レンクのスパンキング冒険記：

パロディ短編集

ユー・メイ著

注記：これはパロディ作品です。これらの物語の翻訳にはAIツールが使用されています。

著者注記

これらの短編小説はそれぞれ独立して執筆されており、どのような順序でも読める独立した物語として意図されています。すべての物語にわたって主人公は同じ名前を冠していますが、それらがすべて同じ共有宇宙や連続性の中で起こっているわけではありません。これらを一貫した小説ではなく、ゆるやかに関連したいくつかの物語や伝説の連作として考えてください。この書籍に収録されている短編小説は、以前に無料でオンライン公開されていた版から編集が加えられています。

このコレクションに収録されている四つの物語は、ゴジラとの共同執筆によるものであり、共著者の許可を得てここに収録されています。

これらの物語の多くには、体罰の描写が顕著に含まれています。これらの場面は、現実感と劇的な効果を提供することを目的としています。著者は、これらの場面がプロットに不可欠であり、描かれている中世のファンタジー世界の文化と価値観を正確に反映しているとの見解を持っています。本作品は、成熟した読者を対象とした風刺的なパロディ作品として意図されています。読者の判断が推奨されます。

これはフィクションの作品です。実在する人物あるいは故人との類似は、すべて偶然によるものです。

ニーベルンクの小さな母

第一章：迷子

「メドーに思い知らせてやる！ あいつが二度と俺のことを腰抜け呼ばわりできなくなるようにしてやる！」

レンクは、メドーから教えられた永遠の森を進む道を、威張り散らして歩いていた。レンクがいつかピクシーの相棒を得られるかどうかをめぐってメドーと激しい口論になった末、メドーはレンクに「老いぼれノット」、すなわち永遠の森に住む人嫌いの樹人を見つけ出せと挑発したのだ。レンクの使命は、老いぼれノットの古木の杖を一本盗んでそこに行った証拠とし、火花の種を老いぼれノットの後頭部に投げつけ、傷一つ負わずに霧の子らの住まいであるニーベルンクの村へ戻ることだった。

最初、レンクはメドーの言うことを聞くのを拒んだ。サリーナが、自分が案内するとき以外は他の子供たちに永遠の森に近づくなと警告していたのを覚えていたからだ。ニーベルンクは皆、賢老樹の保護下にある子供たちだったが、彼らは皆サリーナを自分の姉のように見る傾向があり、特にレンクは物心ついた頃から彼女のことを母親のような存在だと思っていた。

彼女が本当の母親でないことは分かっていた。そんなはずがない。彼女は自分よりほんの数歳年上なだけだ。レンクはかつて自分に母親がいたことを確信していた。しかし、自分の母親や父親について尋ねるたびに、他のニーベルンクたちはいつもこう言った。「賢老樹こそが我々の父なのだ」。

子供たちの中で、レンクにかつて母親がいたことを覚えていると打ち明けたのはサリーナだけだった。レンクが母親に何が起こったのか尋ねると、サリーナはこう答えた。「ごめんなさい、レンク。でも、彼女は迷子になってしまったの」。

迷子になる。それは永遠に失われることだった。レンクは二度と母親に会えないことを知っていた。しかし、彼はそのことをあまり気に留めることはなかった。何しろニーベルンクの子供たちは皆、サリーナが世話をしてくれていたのだから。「小さな母」として。

普段なら、レンクはサリーナに背くことなど夢にも思わなかった。しかし、実にゆっくりと、しかし実に確実に、メドーの痛烈な言葉はレンクの決意を削り取っていった。

レンクは、メドーが自分の腕を曲げて自分をレンクより大きく見せようとしたことを思い出し、頬を火照らせた。「賢老樹がお前みたいな腰抜けにピクシーを授けると思うか？ 偉大にして強大なるメドーは、老いぼれノットの棒の一本を戦利品として獲得するのをためらったりしないぞ！」

（偉大にして強大なるメドーは、偉大にして強大なるメドーを三人称で呼ぶのが大好きだった。）

レンクは野生の草の中を進みながら歯を食いしばった。これがメドーの言う勇気試しなら、あまりにも簡単すぎる。レンクはメドーの指示通りに完璧に進んだ。北へ行き、西へ曲がり、南へ曲がり、西へ曲がる。すると確かに、メドーが言った通りの場所に老いぼれノットが昼寝をしていた。硬い樹皮のような肌と葉のような髪を持った、ずんぐりした小さな生き物は、お気に入りの木の下で気持ちよさそうに居眠りしており、その丸くてずんぐりした鼻の先には鼻水の泡ができていた。

厚い草の陰から注意深く観察しながら、レンクのメドーへの怒りは薄れ、代わりに押しつぶされるような罪悪感が湧き上がった。老いぼれノットはレンクに何の害も加えたことがない。しかし、やはりメドーの言う通りではないのか？ 賢老樹自身が、時が来てレンクが真の勇気を示す準備ができるまではピクシーを授けることはできないとレンクに告げたのではないか？

レンクは自分を奮い立たせた。結局のところ、棒を一本盗んで老いぼれノットの昼寝を邪魔するくらい何の害にもならない。しかしそれはメドーに、レンクが腰抜けなどではないことをはっきりと証明することになるのだ。

つま先立ちで歩きながら、レンクは眠っている老いぼれノットの後ろの木々にもたれかかっている、彫刻が施された古木の杖の束に向かってこっそりと近づいた。レンクが一本を引き抜こうとすると、他の杖が倒れそうになったが、森の床にガチャガチャと落ちる直前でレンクはそれらを受け止めた。

安堵の息を吐きながら、レンクは厚い草のところへ戻り、袋から火花の種を取り出して狙いを定めた。老いぼれノットを傷つけたくなかったので、レンクは気の抜けたように投げたため、それは彼の後頭部に軽く当たって跳ね返るだけだった。

老いぼれノットが甲高い鳴き声を上げて飛び上がると、レンクは思わず笑みを浮かべ、自分が来た時の空洞になった森の道へと向かって駆け出した。あとはメドーから教えられた道順を逆に辿るだけだ。

背後で、カーペット叩きが敷物に打ち付けられるような鋭い破裂音が聞こえた。振り返って見ると、何か発射物が自分めがけて飛んでくるではないか！

力強い「バシッ！」という音とともに、レンクが投げたものの何倍も大きい重い種が、レンクの左臀部のすぐ下、太ももの裏側を打った。レンクは驚いて前に倒れ込んだが、老いぼれノットの激しい呪いの声を聞いて、逃げなければならないと悟り、よろめきながら立ち上がった。

全速力で駆け出し、垂れ下がった帽子が後ろでひらひらと揺れる中、レンクは振り返って老いぼれノットが細い足を踏み鳴らし、骨ばった拳を振り回すのを一瞬見た。年老いた樹人は足の速い少年に追いつけなかったが、鼻から種を爆発的な力で吐き出すことができた。それらは、

ニーベルンクの子供たちがパチンコを使っても決して達成できないほどの力と正確さで命中した。

レンクは身をかがめながら木々の間をジグザグに走って発射物を避け、やがて老いぼれノットははるか後ろに置き去りにされた。

レンクは無事だった！ 帽子を脱ぎ、震える膝に手をつき、脇腹が痛くて二つに折れ曲がった。その半分は疲労のため、半分はこらえきれなかった笑いのためだった。なんという冒険だ！

指で金色の髪をかき上げて額の冷や汗を拭い、レンクは帽子をかぶり直して、メドーに自分の勇気を証明するために盗んだ古木の棒を調べた。

さあ、あとは来た道を戻ってニーベルンクの村へ帰るだけだ！

しかし周囲を調べてみると、レンクは慌てて逃げるうちに森の道をはるかに通り過ぎてしまったことに気づいた。

「大したことない。北へ行って、それから東へ、それから…南だっけ？ いや、待てよ、南へ行って、東へ行って、それから北だ！」

太陽が木々の陰に沈むにつれ、頭上は夕暮れの藍色に暗くなっていった。

＊＊＊

遠くで狼の遠吠えがこだました。レンクは日が沈む前にどうにか再び道を見つけることができたので、頭上の葉の隙間から月明かりがほのかに差し込んでいた。何度も自問自答し、二度も引き返した後、レンクはメドーの指示を注意深く繰り返し、ついに正しい道を割り出した。村のおおよその方角は分かっていたので、森の道を外れなければ、木々の密生した手つかずの部分で迷うことはないと分かっていた。目が薄暗い光に慣れた後でも、レンクは触覚に頼らざるを得ず、一歩一歩確かめながら、自分の足元がよく踏まれた道の上にあることを確認した。しかしその時、予期せぬものに遭遇した。道が二股に分かれていて、一方は南へ、もう一方は西へと続いていたのだ。

レンクは自分の状況を考えた。ニーベルンクの村はおおまかに言って南の方角にあることは分かっていたが、先に東へ行き過ぎてしまったことも確かだった。耳を澄ませると、奇妙な音が聞こえてきた。笛で奏でる魅惑的なメロディーだ。そしてそれは西の道から聞こえてくる！

盗んだ杖を盲人の杖のように使いながら、レンクは笑みを浮かべて西へと進んだ。他のニーベルンクたちに見つかるまで助けを叫びたくなったが、メドーにからかわれることを考えると、レンクは知恵を働かせて諦めないと決心した。自分一人で森を切り抜けたことをサリーナに話すところを想像すると、胸が膨らんだ！

驚いたことに、前方の道にぼんやりとした光が浮かんでいるのに気づいた。おかしい？ ニーベルンクの村に着くまでに少なくとも一度は南へ曲がらなければならないはずなのに、しかしそれ以外に松明の光以外に何があり得るだろう？

しかし近づいてみると、その光は冷たい緑色を帯びており、松明の揺らめきというよりは、蛍の安定した輝きのように見えた。西の道は空き地へと続いており、その中心には古代の倒木があった。もし生きていたなら賢老樹に匹敵したかもしれないその木の切り株は、直径が簡単に六フィートあり、老木の唯一の墓標となっていた。

レンクは杖を握りしめ、震えた。永遠の森のこの場所は全く記憶にない！ 涙をこらえながら、レンクはこれまで見たことのないものが切り株の上に座っているのに気づいた。仲間のニーベルンクのような子供のような姿が、葦笛を吹いている？ レンクはその子供に呼びかけたが、近づこうとしてつまずき、泥と落ち葉の森の床に濡れた音を立てて倒れた。

レンクがつまずく音を聞いて、その子供の頭は音楽から顔を上げた。レンクはその子供の顔に何か変なところがあることにうっすら気づき、その衣服を調べた。茶色い革のようなぼろ布に緑の葉っぱの縁飾りがついている。ニーベルンクの編み帽子とは違い、その帽子はだらりと垂れ、ぼろぼろの切れ端の房がついており、広いつばが顔を影で覆っていた。

その子供が輝く赤い目でレンクをじっと見つめると、レンクは凍りついた。違う…帽子が子供の顔を覆っているわけではない。

その子供には顔がまったくなかったのだ！

それにもかかわらず、その顔のない子供はレンクを見て首をかしげているように見えた。「迷子になったのか？」

声は高かったが、レンクには男の子の声だと確信できた。

レンクは唇から葉っぱを吐き出して体を起こし、杖をしっかりと前に構え、必要なら戦う準備をした。「違う！ 俺は迷子なんかじゃない！ ニーベルンクの村の者だ！ 帰り道は分かっている！ ただ…道を間違えただけだと思う！」

顔のない子供は震えているようだった。「それは残念だ。友達になれると思ったのに。君は優しい顔をしている」

レンクは戦闘態勢を解いた。「ありがとう！ 君は、ええと…赤い目をしているね！ ニーベルンクの誰かと友達なのかい？」

影のような頭は左右に振られた。「いいや。森にいなければならないんだ。でも友達がほしい！」

「君は誰なんだ？」

顔のない子供はその質問を考え込むように一瞬間を置いたようだった。「名前はないと思う。でも君と同じで子供だよ！」

レンクは頭をかきながら、自分の名前を忘れてしまった子供のことを考えるとくすくす笑った。「よし、子供よ、俺が友達になってやる！ 明日日が昇ったらまた会いに来るよ。その頃には俺も自分のピクシーの案内役を持っているかもしれない！ …ところで、ニーベルンクの村に戻るにはどの道を行けばいいか分かるか？」

顔のない子供はゆっくりとうなずいた。

レンクは杖をぎゅっと握りしめた。「家への道を教えてくれるか？」

顔のない子供は激しくうなずき、切り株から飛び降りると南へと走り出し、レンクに手を振った。「ついてきて、友よ！」

勝利の叫びを上げて、レンクは新しい友達を追いかけ、ついていくのに必死でいくつかの小枝が顔をかすめるのを感じた。「もっとゆっくり走ってくれよ、子供！ ついていけない！」

顔のない子供の目は後ろに赤い光の跡を残しているかのようで、振り返って叫び返した。「急がなきゃ！ 飛ぶように急がなきゃ！ もうすぐ日が昇る！」

メドーの挑戦と、サリーナが自分が彼女に背いたことを知ったらどれだけ叱られるかを思い出し、レンクは案内役に追いつこうと全力疾走し、自分の服を引き裂き裸足の脚を引っかく小枝や棘を無視した。空き地の光は後ろに消え、彼らは暗闇に包まれた。鋭い枝が左頬を引っかいたときになって、ようやくレンクは立ち止まった。「痛っ！ 待ってくれよ、子供！ 何も見えない！」

「分かってる」

「だから走るのをやめろ！ 俺の手を握ってくれれば――」

赤い目が再び現れた。「もう走らなくていい。ここで十分だ」

レンクは道を外してしまったことに気づき、顔が熱くなるのを感じた。「待ってくれ、ここはどこだ？ 家に連れて行くって言っただろ！」

「ここが俺の家だ」

「違う、俺の家はニーベルンクの村だ！ 君は――」

「ニーベルンクの村への道は知っていると言った。ニーベルンクの村に連れて行くとは言っていない！ 家への道を教えると言った。今、俺たちは家にいる。これで友達になれる」

レンクは凍りつき、突然寒気がした。「何を言ってるんだ？ 俺たちは迷子になったんだぞ！」

赤い目は空中でねじれ、あたかも顔のない子供が好奇に首を曲げているかのようだった。「俺はもう迷子だった。ずっとずっと昔に迷子になった。今は森から出られない。今度は君も迷子だ！」

レンクはその目に向かって飛びかかり、子供の腕か手首を掴もうとしたが、そこには影しかなかった。レンクは鋭い枝に激しくぶつかり、チュニックが裂け、帽子が頭から落ちた。赤い目が二度まばたきし、暗闇の中へ消えた。「心配するな、またお前を探しに来る！ そうすれば俺たちは永遠の友達になれる！」

愚かにも、レンクは顔のない子供に叫びかけたが、返事はなかった。そしてレンクは賢老樹に向かって、すべてのニーベルンクの子供たちに向かって、そして何よりもサリーナに向かって助けを叫んだ。声がかれるまで叫び続け、ついには地面にうずくまり、泣き続け、やがて泣く力さえも失った。

涙が乾くと、レンクは暗闇と同じくらい深い、圧倒的な静寂を感じた。風に揺れる葉の擦れる音もなく、動物の気配もなかった。ただ無があるだけだった。

「俺は迷子になった。もう永遠に迷子だ」とレンクは思った。その最後の思考さえも飲み込まれてしまいそうだった。

その時、かすかな歌が聞こえてきた。レンクは起き上がり、頭を上の枝にぶつけた。「イタッ！！」

痛む頭蓋骨をこすりながら、レンクは顔のない子供がまた笛の音楽で自分をからかいに戻ってきたのかと思った。しかしもっとよく耳を澄ませると、それは先ほどの歌とは違うし、葦笛の音でもなかった。それはおなじみの普通のジャガイモ笛の音だった。

「サリーナだ！」 レンクは飛び上がり、古木の杖を使って闇の中をよろめきながら楽しげな音楽の方へ進んだ。そして、葉の陰にかすかな光の点を見つけた。長い闇の時間の後には目がくらむほどに感じられ、レンクはその光に向かって飛び込んだ！

レンクは森の道の柔らかい地面に倒れ込み、盗んだ杖は彼の前でガチャリと音を立てて地面に落ち、まさにサリーナの目の前に転がった。彼女が吹いた最後の音は、その歌とは対照的に驚きの鋭い口笛だった。

「レンク！ あなたを見つけたわ！」 彼女の声はひび割れ、自分の言葉の滑稽な響きに彼女は微笑んだ。「あなたの名前を声がかれるまで呼び続けたの。それで歌を吹いたのよ！」

レンクは新しい涙を流しながらサリーナの胸に顔をうずめた。「君が来てくれるって分かってた！」

サリーナは抱きしめ返し、優しく彼の頭をぽんぽんと叩き、それから咳をした。彼女の声はまだ不自然に震えていたが、彼女の表情には笑えるものは何もなかった。「レンク、一体何を考えていたの？ 永遠に迷子になるところだったんだから！ 心配してたのよ」

レンクは身を離してサリーナを見上げ、メドーに持っていくはずだった杖に視線を走らせた。「ごめん、サリーナ。ただ永遠の森を探検したかっただけで、それに――」

「もう老いぼれノットを困らせたことは全部知ってるわ。最初にそこへ行ったんだから！」 サリーナは右手でレンクの耳をしっかりとつまみ、器用にひねると、もう一方の手で盗んだ古木の杖をひったくった。

レンクは悲鳴を上げ、圧力を和らげようと左腕を伸ばして本能的にサリーナの手首を掴んだが、ありがたいことに彼女は強く引っ張らず、レンクを家へと続く道へ導き始めた。「あなた

を見つけられて運が良かったわね、レンク。子供たちは私なしで永遠の森に近づいてはいけないって、あなたもよく分かっているでしょ。家に着いたらお尻を叩くからね、お坊ちゃん！」

レンクは顔をしかめ、新たな涙が目に浮かんだ。「痛いよ！ でも…サリーナ！ ごめんなさいって言っただろ！」

サリーナは見慣れた目つきでレンクを見据えた。「まだ十分に反省していないわね…まだね！」

レンクの肩は緊張し、サリーナの怒りの歩調に合わせて必死に歩いた。これが「小さな母」が彼を膝の上に引きずり込む初めての機会ではなかった。昨日、老いぼれノットを困らせたときに感じていた、ずっと忘れていた罪悪感が突然、倍返しで戻ってきた。

「…分かったよ、サリーナ。もう二度としないって約束する。老いぼれノットのところに連れて行って謝らせてくれるのか？」

サリーナの目は一度だけ同情を込めてレンクの視線と合い、それから自分を奮い立たせて激しい歩みを続けた。レンクは彼女が耳をつまむ圧力を弱めたのを感じたが、完全には離さなかった。「まあ、それが始まりね！ 少なくとも彼に謝らなければならないことは分かっているのね！ でも今日はやめておくわ。彼は数日は機嫌が悪いだろうし、あなたの謝罪を受け入れる気になるのは…まあ、二人とも時間を置いて冷静になってからね！ とにかく、今日はもう十分以上に永遠の森にいたと思うわ！」

家のニーベルンクの村で待っていることを考えると、レンクはもう永遠の森から離れたくないとさえ思った。

しかし、永遠の森の黒く死のような静寂を思い出すと、サリーナの歌が心に呼び起こした温かさを再び感じた。サリーナが自分の耳をつまんで家へ連れて行くときでさえ、彼はサリーナの愛情を感じた。

[第一章 終わり]

ニーベルンクの小さな母

第二章：見つかる

太陽がまだ昇り始めていた頃、サリーナのピクシーの相棒が薄暗い森の道の光源となっていた。サリーナは説教を終え、レンクは恥ずかしさで話せなくなっていたので、静寂はサリーナが盗んだ古木の杖を歩行用の杖として使う一定のトントントンという音だけが響いていた。

彼らが永遠の森から日の光の中へ出てきたときも、サリーナはレンクの耳をつまむのを放さなかった。耳に痛みを感じると、レンクは自分がどれほどぼろぼろの姿かを痛感した。森の最も深く最も暗い場所への狂ったような突撃のおかげで、帽子は永遠に失われ、チュニックは何箇所も裂け、脚や腕や顔には細かい傷が縦横に走っていた。

レンクは自分がどんな見世物になるかを悟り、恥ずかしさで顔を火照らせた。他のニーベルンクたちは皆、彼を見ただけで、森の中で何が起こり、次に何が起こるかを察するだろう。

まるで罰するかのように、レンクは少女のからかうような声が、どこからともなく聞こえてくるのを耳にした。「ねえ！ サリーナ！ レンクを見つけたの？ わあ、すごいぼろぼろだね！」

レンクは目を見開き、その声の主を探して顔を向けたが、捕えられている左耳が優しく引っ張られるのを感じ、サリーナが隠れた少女に答えて呼びかけた。「そうよ！ でも生きていて怪我もないわ。それが大事なの！」

サリーナは頭を傾け、レンクは彼女の視線を追って上を見上げ、声の主を見つけた。彼らの上で、ファドが見張り台から肘をついて金髪の頭を覗かせていた。「怪我はない、だって？ 長くは続かないってわけね！ 今お仕置きをするの？ それとも家に着くまで待つの？」

ファドは後ろで足を楽しそうにバタバタと動かしており、まるで下の世界で起こっているすべてが彼女の楽しみのためのショーであるかのようだった。ファドの目を見ることができず、レンクはうつむき、皆が自分が当然の報いを受けるのを見るのを楽しみにしているのではないかと心配した。

サリーナはファドを厳しい目で見据えた。「それはあなたの知ったことじゃないわ、ファド。彼が一人で永遠の森をうろついているのを見つけた最初のニーベルンクってわけじゃないのよ。あなたも覚えているでしょう！」

ファドのずる賢い笑みは消え、彼女は見張り台の縁から後退し、両手を自分の臀部に当てた。「はい、サリーナ！ 彼を見つけられてよかったです！ 私はここに座って、ええと…自分のことに専念します！」

遠くにいても、サリーナの警告の目から逃れられる者はいないようだった。このやりとりの音を聞いて、他のニーベルンクたちはサリーナの救出作戦の知らせを聞こうと駆け寄った。短い茶色の髪をヘッドバンドでまとめるのが好きな元気な少女ティラは、レンクの姿を見てくすくす笑った。モノは岩石庭園のために石を運ぶ手を止め、長い赤金の髪を目から払いのけて信じられない様子で見つめ、兄弟のシリとキョーダを呼びに走った。

レンクは、三人のそっくりな「何でも知ってる兄弟」から、そもそも永遠の森に入るべきではなかったというためになる説教を聞くことになるのではないかと、苛立ちながら思った。ニーベルンクとそのピクシーの相棒たちの間で知らせが広まるにつれ、すべての家が空になった。ニーベルンクの村のように小さな場所では、秘密は長く守られない。しかし最悪なのは、メドーが小さな群衆の最前列に駆け寄り、速度を落としてレンクとサリーナに向かって、とがった耳からとがった耳まで笑みを浮かべて威張って歩いてきたことだ。「おやおやおや！ ニーベルンク村の英雄が凱旋だ…尻尾を巻いて？ …わあ！」

サリーナが手にした盗んだ古木の杖を振り上げると、メドーはパッと口を閉じた。彼女はメドーの頭蓋骨を打ち砕くのを間一髪で避けて振りを止めたが、杖の柄で彼の鼻を軽く押さえた。「レンクは、老いぼれノットから杖を盗めば、自分がピクシーを得る準備ができている証拠になるとでも思っていたみたいね。そんな馬鹿げた考えを誰が彼の頭に植え付けたのかしら？」

メドーはレンクを毒々しくにらみつけた。「俺のことをサリーナにチクったのか？ よくもまあ――」

サリーナは盗んだ杖でほとんど遊び心たっぷりにメドーの鼻を軽く叩き、彼を数歩よろめかせた。「違うわよ、メドー。レンクはあなたのことを言いつけたりしてないわ。でもあなたは自分で自分を言いつけたのよ！」

「おおお！」と上からファドの声が、目の前で繰り広げられる劇的な場面に耐えきれずに聞こえたが、サリーナの怒りの表情が彼女を見張り台の端から慌てて引っ込ませた。「ごめんなさい！ 自分のことに専念します！」

腕を組んで、メドーは胸を張った。「それがどうした？ ただの冗談だ。まさかあいつがこんなに真に受けるとは思わなかった。ニーベルンクのリーダーとして――」

サリーナは杖を振り上げて、その柄を地面にドンと打ち付けた。「賢老樹はあなたに、彼の木立の入り口を見張って、最近現れているあの怪物のような植物に注意するように頼んだだけよ。それがあなたを私たちのボスにするわけじゃない、メドー。もしリーダーになりたいなら、まず責任を取りなさい。後であなたのツリーハウスで話し合いましょう！」

レンクはこの知らせに耳を立てた。賢老樹は彼らの父であるため、ニーベルンクの子供たちの誰も「リーダー」と呼ぶことはできない。サリーナの「小さな母」という愛称は、あくまで愛

称であり、正式な肩書きではない。彼女が年下のニーベルンクをスパンキングしても、それは強制によるものではなかった。行儀の悪いニーベルンクは、賢老樹自身の前に出されるという代わりの罰として、明らかに罰を受けるに値する場合にサリーナから罰せられた。そして賢老樹は最近、召喚の頻度を減らしていた。

メドーは数週間前に賢老樹が彼とサリーナに話しかけて以来、「リーダー」という肩書きを主張していたが、レンクがニーベルンク村の近くに怪物がいるという話を聞いたのはこれが初めてだった。

レンクは仲間のニーベルンク全員が同じことを考えているのを肌で感じた。

メドーは唾を飲み込み、サリーナの視線を受け止めた。今やすべての視線がレンクではなく自分に向けられていることを痛感していた。「どうして今ここで話せないんだ？」

サリーナは実に甘く誠実な笑みを浮かべ、それは見事だった。「そんなこと言わないで、メドー！ みんなに聞かれたくないでしょう！ それに、まずレンクの世話をしなきゃいけないの！」

＊＊＊

ようやくレンクのツリーハウスに着くと、サリーナは彼の耳を離し、はしごを指さした。

「勇気を出して、レンク。自分の部屋に上がって、これから来るものと向き合いなさい」

恥ずかしそうに、レンクはうなずくしかなく、従った。ツリーハウスへのはしごを登るとき、ぼろぼろのチュニックの残骸を冷たい風が吹き抜けていった。これほど無防備に感じたことはなかった。

サリーナは古木の杖をベルトに差し込み、彼の後についてはしごを登り、最後の段から軽く跳ねて縁側に上がった。彼女が哀しげな目で見下ろすと、レンクは彼女の隣に立つ自分がどれほど小さいかを改めて思い知った。

サリーナは杖を壁にもたせかけ、部屋の中央にある、腰掛けとテーブルを兼ねた戸棚と木の切り株を指さした。「何をすればいいか分かってるわね、レンク」

レンクは喉のつかえを飲み込んだが、従った。彼の戸棚の上には、頑丈な古木のヘアブラシが置かれており、裏には自分で彫った赤い木の枝の模様が刻まれていた。

レンクは震えながらヘアブラシを手に取り、振り返ると、サリーナは既に滑らかな木の切り株の上にきちんと座り、手を差し出していた。彼女にブラシを差し出した後、レンクはゆっくりと彼女の膝の上に身をかがめようとしたが、彼女が手を彼の胸に当てて止めた。「待って、まずあなたをきれいにしましょう！」

驚いたことに、サリーナのピクシーの案内役が彼女のチュニックの胸元からひらりと飛び出し、彼の周りを音楽的に羽音を立てて飛び始めた。レンクは脚や腕、顔の多くの傷の上で焼けるような感覚を覚え、その温もりが消えると、自分が癒されていることに気づいた。サリーナは優しくレンクの髪を梳き始め、一瞬、彼は安らぎの感覚に包まれたが、ブラシが髪に絡まった小枝に引っかかった。

「イテッ！」

サリーナは彼の苦痛にくすくす笑った。「レンク、ひどいありさまね！ 幸い傷跡は残らないみたい。私のピクシーはあなたのチュニックには何もできないのが残念だけど！ 予備はある？」

レンクは顔をそらし、サリーナの目を避けた。こんな状況のとき、何と言っていいのか分からなかった。

サリーナはため息をついたが、その声は理解を示していた。「レンク、私もあなたと同じくらい早くこれを終わらせたいの。私のルールは分かっているわね。他のニーベルンクをスパンキングするのは、相手が自ら進んでそれを受け入れた場合だけよ。そうでなければ――」

「そうでなければ賢老樹のところに行くほうがいいって？」レンクは怒りで恥ずかしさを吹き飛ばして言い放った。「じゃあ、そうしたいかもしれない。あいつが鞭で打っても構わない。なぜ一ヶ月も俺に話しかけてこないんだ？」

サリーナの目は見開かれたが、単なる驚きだけではなかった。レンクは恐怖、いや苦悩の閃きを見てから、サリーナはそれを母性的な落ち着きの奥に隠した。「レンク、この件で賢老樹を煩わせるわけにはいかないの。今、彼は――」

「俺に怒ってるのか？」レンクは歯を食いしばり、拳を握りしめて指の関節が白くなった。「俺が悪夢のことで彼を煩わせたからか？ たぶんメドーの言う通りだ。悪い夢を見るたびに賢老樹のところに走って泣きついてピクシーを頼むのが悪いんだ。前回、彼が言ったのは、真の勇気を示す準備ができたらピクシーを遣わすってだけだった。それってどういう意味だ？ あいつは俺を腰抜けだと思ってるのか！」

サリーナは必死に首を振った。「違う！ そんなことじゃない！ 賢老樹はあなたに怒ってなんかないわ！ それに、メドーはただ…ああ！ いい？ 賢老樹は今は誰にも会えないの。彼は…体調がよくないの」

レンクの怒りは消え、困惑に取って代わられた。「何だって？ 彼は病気か何かか？ 彼は賢老樹だぞ、病気になるわけがない！」

サリーナは肩をすくめ、膝を抱えた。「分からない…私も知りたいわ！」

今度は彼女が彼の目を避ける番だった。彼女が注意深く、しかしうまく隠し切れずに流した涙を一瞥したとき、レンクは突然自分がひどい人間に思えてきた。「サリーナ？ ごめん！」

サリーナははっとして注意を戻したようだった。震える息を一つついて、彼女は背筋を伸ばし、気にしていることを振り払った。「まあ、あなたは謝るべきだけど、それはそのことじゃないわ！ 待って、『悪夢』って言ったわね？ 騎手と炎の夢のことは知ってるわ。今もそれを見ているの？」

レンクは心の目にその恐ろしい夢の記憶を呼び起こした。まるで今もその支配下にあるかのように鮮明に、黒い鎧の長身の男が黒い馬にまたがり、自分に襲いかかってくる。「違う！ …うん？ いや、別の悪夢は見てないけど、うん、同じ夢を何度も何度も繰り返し見てる…」

「毎晩？」

レンクはうなずき、恥ずかしさで顔が火照った。「それが…それが永遠の森に飛び出した理由なんだ。メドーの挑発が馬鹿げてるのは分かってた！ でも自分が勇敢だって証明したかったんだ。馬鹿げた夢なんか怖くないって！」

サリーナは腕を組み、譲ろうとしなかった。「レンク、勇敢な行動っていうのは、メドーに『ノー』と言うことだったのよ。そうせずに、あなたは自分を危険にさらして、友達にたくさん心配をかけた。それに、哀れな老いぼれノットがあなたに何をしたっていうの？ それが一番驚いたわ。無害な樹人をいじめるのがあなたの言う勇気なの？」

レンクはキルトのほつれた裾を弄った。「違う！ 彼を傷つけたくなかった…」声は消え入り、今自分がどれほど愚かに感じているかを表現する言葉が見つからなかった。

サリーナはため息をつき、ヘアブラシを脇に置いた。あたかも敗北を認めるかのように。「まあ、あなたを賢老樹のところに連れて行くわけにはいかないわ。彼のメドーと私への指示は明確だった。だから行き詰まりってところね。もしあなたが反省していないなら、賢老樹が会える状態になるまで待つしか――」

レンクはサリーナの肩を掴んで、立ち上がって去ろうとするのを止めた。「そういう意味じゃない！ 謝ってるんだ、サリーナ…全部に対して」

嬉しい驚きを感じて、サリーナは微笑み、彼の腕をぽんと叩いた。「許すわ、レンク。でも正直なところ、選択肢は二つよ。今すぐ私の膝の上で人生最大のスパンキングを受けるか、後で賢老樹のところに行って人生最大の鞭打ちを受けるか。あなたがどちらを選んでも軽蔑はしないけど、私ならヘアブラシを取るわ！」
レンクはうなずいた。「そうだな、早く終わらせたい。でも、鞭打ちが怖いからってわけじゃない！」

サリーナは輝くような笑顔を見せ、ぺらぺらと話し始めた。「怖がるべきよ！ 私も以前に鞭打ちを受けたことがあるんだから！ ひどかったの！ 賢老樹が大きな枝を一本下ろして、その上にうつ伏せになるよう言われたの。それから彼は私を抱え上げて、小さな枝でめった打ちにして、私は泣きじゃくるありさまだった！ 一週間座れなかったけど、当然の報いだったわ！ あれ以来、二度とメドーを殴ったりしなかったもの！」

普段、レンクは黙って座ってサリーナのとりとめのない話を聞くのが大好きだった。彼女が話すのが好きで、彼が聞くのが好きという事実が、彼らを完璧な会話相手にしていた。しかしレンクは罰を待つ間、何年もの間、宙ぶらりんの状態だった。メドーの挑発を受け入れた瞬間か

ら、レンクは彼女が見つけたときに何を言われるかという、こびりつくような半ば抑えられた恐怖に苦しみ、サリーナが彼を見つけて耳をつまんだ瞬間から、これが避けられない運命であることを受け入れていた。

サリーナが、古代の賢い生きた木にめった打ちにされるのがどんな感じか、素晴らしい詳細を生き生きと語り始める前に、レンクはついに指をそっと彼女の唇に当てて話を止めた。「サリーナ、俺が従わなかったのは君だ。俺を救ったのも君だ。君が罰を執行するのが当然だ。お願いだ…待ちきれない！」

顔を赤らめて、サリーナは手を口に当て、自分の愚かさとぼんやりさを謝るかのようだった。「もちろん！」

サリーナが座り直し、ヘアブラシを手に取ると、レンクは彼女の膝の上にうつ伏せになり、テーブルの滑らかな木の表面に体を預けた。サリーナは深く息を吸い、レンクのぼろぼろのチュニックの座面にヘアブラシを試しに当てながら、突然彼よりも緊張した。「レンク、あなたを愛してるわ。でもスパンキングしなきゃいけないの…準備はいい？」

レンクは歯を食いしばってうなずき、肯定のうめき声でだけ答えた。「うん！」

サリーナは涙を拭い、すすり泣きを隠してから、左手をレンクの腰に巻き付け、右手でヘアブラシをゆっくりと頭上高く掲げた。ヘアブラシによる最初の一撃が決まったとき、レンクは自分のチュニックがどれほどぼろぼろで、どれほど保護してくれないかを突然思い知った。ヘアブラシの表面は、布の裂け目をまったくまい、レンクの太もも上部と白い布の半ズボンを露わにしていた。裂け目の両側では、厚い緑色のウールがわずかなクッションを提供し、鈍く反響するバシッという音を生み出した。しかし裂け目の部分では、レンクは古木のヘアブラシの表面が直接下臀部の肌に当たるのを感じ、これから起こることの不気味な前兆となった。

サリーナは顎を引き締め、慎重に最も強い打撃を十回、レンクの臀部の表面のほとんどをまんべんなく覆うように狙った。レンクがまったく動かず静かに横たわっているのを見て、サリーナは誇りと苛立ちが入り混じった気持ちで見守った。これは驚くことではなかった。レンクはスパンキングの始まりにはいつも断固としていた。サリーナは彼の決意を称賛していたが、彼が強く見えるためだけにそんなに自分を追い込まないでほしいとも思っていた。

しかしサリーナには忍耐する余裕があった。

＊＊＊

レンクのツリーハウスの外で、ファドは半分無邪気にぶらぶらと歩き回っていた。もちろん、彼女はレンクが好きで、彼が困っているのを気の毒に思っていた。一方で、今日は自分以外の誰かが困っているというのはいつもいいものだった！

さらに、ファドはレンクがかつて自分のパチンコを作り、硬い木の実を自分の臀部に直撃させたことを思い出さずにはいられなかった。もちろん、そのパチンコは没収されて賢老樹に送られ、サリーナはファドに、レンクがそのいたずらでしっかりとスパンキングされたと保証してくれた。

しかしファドは、サリーナが自分を含むすべてのニーベルンクの子供たちに課すのと同じ厳しさでレンクをスパンキングしているのかどうか、気になって仕方がなかった。

もしスパンキングが始まっていなければ、何気なくサリーナに手伝いを申し出られたかもしれない。あるいは終わっていたら、レンクに精神的なサポートを提供できたかもしれない。誰が反対できるだろう？

しかしファドがちょうどはしごの最後の段に登ろうとしたとき、最初の特徴的な雷鳴が聞こえてきて、すべてを物語っていた。

ファドはほくそ笑んだ。なんてこと！ 彼女はレンクのスパンキングが始まったまさにその時に到着したのか？

サリーナの家の上の見張り台から重要なことを見張るのが彼女の義務だった。しかし、地上で調査しなければならないこともある！

慎重に、ファドはツリーハウスの床の上に覗き込めるほどだけ頭を上げた。なんて運がいい！ 出入り口のカーテンは留め金で開かれており、まるで彼女のために額縁に収められたかのようにすべてがはっきりと見えた！

レンクの臀部と脚が出入り口の方に向いており、サリーナは直角に座っていて、自分の仕事に集中しすぎてファドに気づいていなかった。

ああ！ ファドはサリーナに助力を申し出る機会を逃してしまった。邪魔するのは失礼だ！ 罰が終わるまで待つしかない！

しかしファドがはしごを下りようとする前に、サリーナがレンクのキルトを腰の上までめくり上げて白い半ズボンを露わにするのがちらりと見えた。

＊＊＊

サリーナは裂けたチュニックの残骸を標的から邪魔にならないように折りたたんだ。レンクの半ズボンの下では、十個の明るいピンク色の跡が既に腫れ始めていたが、レンクは相変わらず頑固に無表情を保っていた。サリーナは自分の状況を考えた。彼女はレンクを辱めたり恥をか

かせたりするつもりはなく、傷跡やあざを残すつもりもなかった。しかし、忘れられない印象も与えなければならなかった。ひらめきが閃いて、サリーナはわざとヘアブラシを置き、レンクにその物体が目の前にあるのをはっきりと見せてから、座り直してレンクの緊張した臀部を試しに開いた手のひらで軽く叩いた。

彼女はレンクに数分間、あのヘアブラシがチュニックの上でどんな感触だったかを考えさせ、薄い半ズボンの上での自分の手のひらの痛みについて考えさせるつもりだった。サリーナがニーベルンク村に対するこの母性的な責任を受け入れてからの長い年月の中で、頑固な子供をスパンキングするには、ゆっくりと着実に行うのが結局は一番早いと学んでいた。

一打一打ごとに、レンクは熱が徐々に臀部に広がっていくのを感じたが、涙をこらえ、拳を握ったり緩めたりして叫びたい衝動を抑えた。

特に強烈な一打の後、レンクの脚が反射的にもがき、半ズボンのきつい布地が伸びて上がってくるのを感じた。汗の玉が額を伝うと、レンクは溜まる熱が平手打ちの痛みよりもさらにひどいことに気づいた。彼はサリーナが半ズボンを下ろして冷たい空気で和らげてくれることをほとんど願った！ しかし、顔の横に置かれた恐ろしいヘアブラシが目に入り、それが無防備な裸の臀部に当たることを想像すると、また寒気がした！

＊＊＊

ファドははしごの段の上で前後に揺れた。これは夢が叶った瞬間だった！ もう二度と、サリーナが他のニーベルンクの子供たちと比べてレンクに特別扱いをしているのかどうか疑問に思うことはないだろう。むしろ、サリーナはファドがこれまで感じた、あるいは目撃したどのスパンキングよりも厳しくレンクをスパンキングしていた。

ニーベルンク村で起こるすべてのことを知るのがファドの役目だった。サリーナの伝説的なスパンキングが行われているときに、たまたま近くにいることがあっても仕方ないだろう？

「ファド？ 何してるの？」

ファドは背筋に震えを感じ、かろうじて悲鳴を抑えた。下では、ティラがはしごの根元に忍び寄り、疑わしそうに彼女を見上げていた。

ファドは怒った反論をしかけたが、自分を抑えて頭を下げてささやいた。「ティラ？ 自分のことに専念しなさいよ！」

「いいアドバイスみたいね！ サリーナがレンクをスパンキングしてるのを覗いてるの？」

ファドは、真っ黒な罪を犯していて現行犯で捕まった時にだけ可能な、衝撃と憤慨の表情を浮かべた。「そんな馬鹿な！ 私はただサリーナに祝福を、哀れなレンクに哀悼の意を伝えに行く途中だったのよ！」

ティラは目を回したが、笑みを隠せなかった。「あら！ そしてあなたがはしごを登っている途中で私が偶然あなたに出くわしたのね。そして明らかにスパンキングが進行中の音を聞いて、『哀れなレンク』とサリーナのプライバシーの必要性への敬意から、すぐに目をそらして家に帰ろうとしたのね！」

ファドははしごを下りながら顔を赤らめ、ティラがこのことをサリーナにべらべらしゃべったら自分の臀部にどんな運命が待ち受けているか既に心配していた。「もちろん！ 何しろ…私たちはみんな前にスパンキングされたことがあるでしょ？ 哀れなレンクが今何を経験しているか分かってるから…この小さな秘密は私たちだけのものにしておくのがいいわ！」

ティラは腕を組み、歯を見せて笑った。「もちろん！『哀れなレンクのため』に、これは私たちだけの秘密ね！」

ファドははしごから飛び降りてから硬直し、その物音がサリーナに気づかれたのではないかと心配した。ファドが後退すると、震える手で臀部を覆い、それからティラの嘲笑的な表情が自分を追っているのに気づいた。それに応えて、ファドはティラをにらみつけてから、指を伸ばすふりをして両手を優雅に背中で組んだ。

ファドが後退したのを確認して、ティラは周囲を調べた。他のニーベルンクは近くにいないようだった。ファドを誘惑した魅力とは何だろう？ 確かに、スパンキングを目撃することは、自分がスパンキングされるリスクを冒す価値はないだろう？

突然、レンクのツリーハウスから安定した平手打ちの音が再び聞こえてきて、静寂が破られた。ティラはサリーナがレンクの試練を一時中断し、再び始めたのだと気づいた！

ティラは顎に手を当て、自分が最後にサリーナの膝の上に引きずられた時のことを思い出した。その時、ティラは緊急時以外は触ってはいけないという標識を無視して、岩の木立に隠された古い霧の刃を探しに行っていた。

自分の経験に基づいて、ティラはサリーナがおそらくヘアブラシか木のスプーンを使ってレンクに教訓を伝えているだろうと推測した。

ティラははしごの段に手を伸ばした。ちょっと覗くくらい、何の問題もない！

＊＊＊

レンクは平手打ちの数を黙って数えるのに必死だった。ゆっくり燃える火で焼かれる感覚から意識をそらすために何でもよかったが、百回を超えたあたりでサリーナはテンポを上げ、レンクは数の感覚を失った。

ようやく、レンクは弱々しく脚を蹴り始め、叫びをうめき声やハミングで抑えた。ようやく進展が見えたので、サリーナは安堵の気持ちが湧いた。もしレンクがいつもの無害な悪戯を犯しただけなら、彼が涙を流したかどうかにかかわらず、サリーナはとっくに満足していただろう。

彼が反省していることは分かっていたし、今や彼の臀部全体が均一なピンク色になっていることも分かっていた。彼女は既に少年の下着の下から放射される熱を感じ取ることができ、彼が彼女の膝の上でもがくにつれて下着がめくれ上がり、下臀部が露わになり、ヘアブラシによる最初の十打でできた赤く盛り上がったミミズ腫れが現れていた。

レンクが抑えた悲鳴を初めて漏らしたのを聞いて、サリーナは一瞬止まった。普段、サリーナは長々とした説教が嫌いだったが、レンクに理解させるには、やみくもに叩き続けるだけではだめだと気づいた。

レンクは彼女がヘアブラシを手に取るのを見て恐怖の戦慄を感じ、息を整えようとした。驚いたことに、サリーナも息を切らしているのが聞こえた。まるで二人とも競争をしているかのように。

「レンク」と彼女の声は固く、しかし優しかった。「今、なぜあなたがスパンキングされているのか分かる？」

最初の猛攻が終わった今、レンクは自分の無防備で灼けた臀部を改めて痛感した。「君に従わず、馬鹿げた挑発に乗った。老いぼれノットに酷いことをして、彼から盗んだ。永遠に迷子になるところだった」

サリーナは彼の答えに満足してうなずいた。「その通りよ」と言い、声に同情の欠片も表さなかった。「あなたはメドーが望んだ通り、いじめっ子で愚か者みたいに振る舞った」

サリーナはレンクが肩をすくめ、顔を腕にうずめるのを見て罪悪感を覚えた。まるでその叱責がヘアブラシによる千の打撃よりも痛いかのように。

彼は大きな英雄になりたかったが、今はいたずらな小さな男の子に成り下がっていた。

サリーナは自分自身に、彼に償うと約束した。彼女は、強い男のふりをしたその下にレンクが感受性豊かな魂を持っていることを知っていたが、彼に決して忘れさせない謙虚さの教訓を教える決意も固めていた。「少し違うことをやってみるわ。あなたは私がヘアブラシで打つ一打一打を数えるの。それから、私はあなたに質問をするわ。よく考えてから答えてほしい」サリーナは強調のためにヘアブラシをレンクの鼓動する両頬に二度ずつ軽く叩きつけた。「さもなければ、ヘアブラシが終わった後に盗んだ杖でむち打ちをすることになるわよ。準備はいい？」

レンクはうなずき、罪悪感の涙を隠そうと無駄に鼻をすする。

＊＊＊

ティラは夢中になっていた。情熱！ ドラマ！ 彼女はいつもレンクが好きだったし、どういうわけか、彼が屈辱の谷間を耐え抜くのを見ることで、彼女の目には彼がますます立派に見えた。

数週間前、ティラは自分がサリーナの膝の上に引きずられている間に、窓越しに金髪の頭がちらつくのを見たことがあった。それ以来、ティラはファドがニーベルンク村でこっそりスパンキングを覗こうとしていると疑っていた。今、その理由が分かった！

「すごいね、ほんとに」とファドの声が加わった。

ティラはぼんやりとうなずいてから、ささやいた。「そうだね、ファド、サリーナは叩き続けて叩き続けてるけど、レンクはじっとしていて耐えてる！ どうやって――」ティラは固まり、振り返ってファドがはしごの下から自分を見上げているのを確認した。

「ファド？ 何してるの？ 見つかっちゃうよ！」

ファドはほくそ笑み、声をひそめようとはしなかった。「『私たち』が見つかるって？ 哀れなレンクのプライバシーを侵しているのは私じゃないわよ！ サリーナが何て言うかしら？」

ティラの目は上のスパンキングの音と下の自分の苦しめる者の間を行ったり来たりし、自分のささやきがサリーナの耳に届かないことを祈った。「ファド、この偽善者！ ほんの一分前まであなたも覗いてたじゃない！」

「ティラ、この偽善者、ほんの一分前まで覗くことで説教してたのはあなたでしょ！」

ティラは片手を必死に降参の合図として振った。「分かった、分かった！ でも私たちだけの秘密だよね？ いい？ 今分かったよ！ これは見るしかない！」

ファドは、まるでティラが素敵なお茶会に招待したかのように輝き、はしごを登ってティラの隣に立った。「それなら、お互い声をひそめたほうがいいわね！」

ティラは二人の体重で木の段がきしむ音に緊張した。これは予想以上だったが、ティラは指を唇に当ててファドを静かにさせた。二人ともうなずき、共犯者たちはゆっくりと頭を上げてレンクのツリーハウスで繰り広げられる光景を目撃した。

＊＊＊

ヘアブラシがレンクの下着の薄い布地を叩く音は、以前の罰の時よりも鋭かったが、ウールのチュニックの上で罰したときの鈍い音ほどは大きくなかった。レンクは鬨の声を上げてから、唇を噛んで平静を保った。「一発、サリーナ！」

サリーナは最初の質問を考え、基本から始めることにした。「今日、永遠の森について何を学んだ？」

「あんなに危険だとは思わなかった！ あの子の言うことをもう二度と聞かない！」

サリーナは眉をひそめた。「あの子って誰？」

レンクは最初の一打の余波が再燃し、ヘアブラシが新しいミミズ腫れを起こすのを感じて顔をしかめた。それはそれ自体が二発目のスパンキングのようだった。それからようやく質問に気づいた。「顔がなくて赤い目の少年だ！ 永遠の森で会ったんだ！」

サリーナは安堵と苛立ちが入り混じった息を吐いた。「彼のことは知ってるわ。それで森の道から迷い込んだのね？」

レンクは激しくうなずいた。サリーナは今日、森の精霊を見つけてスパンキングする時間があるかどうか考えた。彼女は新たな安堵の気持ちでレンクを見た。彼が永遠に迷子になる寸前だったことを知ると、彼をぎゅっと抱きしめて離したくなくなった。一方で、彼の愚かさを思

うと、スパンキングを最初からやり直したくもなった。ため息をついて、サリーナは妥協案を選んだ。「まあ、あなたが知らないはずのことを知らなかったことで罰するわけにはいかないわ。しかし――」

彼女は二発目のヘアブラシをレンクの左頬に斜めに打ち下ろした。あまりに強く、彼はその場で跳ね上がり、叫び声を上げた。

「二発と数えて！」サリーナは動じずに命じた。

レンクは息を切らしながらなんとか叫んだ。「二発、サリーナ！」

サリーナは三発目を打つためにヘアブラシを掲げた。「これから二度と私なしで永遠の森を探検することはないと約束できる？」

息を切らして、レンクは答えを考えるために一呼吸置いた。「それは約束できない、サリーナ！」

サリーナの耳がピクッと動いた。「どういう意味？」

レンクは脚を揃え、余計な一打を食らうのではないかと警戒しているようだった。「君は答える前に考えろと言っただろ、サリーナ。もし他の誰かが森で迷子になったらどうするんだ？ 君が助けてくれたように、その人を助けなきゃならない」

感心して、サリーナはうなずいた。彼女はこれまで、自分の膝の上に無防備に横たわっている子供がこんなに大胆に質問に答えたのを覚えていなかったが、怒ることはできなかった。
「もっともな意見ね。でも、もし自分が迷子になったら、迷子になったニーベルンクを助けることなんてできないわ…こうしましょう。次に永遠の森を訪れるときはあなたも連れて行く

わ。道を覚えれば、それほど難しくはないから。でもそれまでは立ち入り禁止よ。約束する？」

レンクは脚の力を抜いた。もがいたせいで下着が食い込んでいた。サリーナには彼の臀部のピンク色が薄い赤みがかった色に変わったのが見えた。サリーナが見たいと思う輝くような色ではなかったが、進歩はしていた！「約束する、サリーナ！」

サリーナはヘアブラシを掲げて輝くような笑顔を見せた。「じゃあ、約束ね！ 三発と数えるのを忘れないで！ もう注意はしないから！」

彼女は三発目を直接下臀部の中央に狙った。きつい半ズボンが肌を完全に覆っていない場所では、レンクはヘアブラシのしっかりした表面が両方の座面を覆っているのを感じた！ 新たな涙がこみ上げてきて、彼はほとんど唸るように言った。「はあっ！ 三発、サリーナ！」

サリーナはレンクの冒険について老いぼれノットから聞いた話を思い出して、怒りがこみ上げてきた。「あなたを連れて彼のところに行ったら、老いぼれノットに何て言うつもり？」

「謝るって言うよ！ もう二度と彼を困らせない！ 彼がまた火花の種を俺に撃っても構わない！ 大きな棒で叩いても構わない！」

興味を持って、サリーナはレンクの臀部をよく見た。確かに、左臀部の下に火花の種の形をした小さな斑点状のあざがあった。「悪くないアイデアね！ あなたを連れて行ったときに老いぼれノットに決めてもらうことにしましょう！」レンクの臀部の将来の運命を老いぼれノットに任せることに満足して、サリーナはレンクのいじめ行為を許し、次の項目に移ることにした。

彼女は四発目も中央に打ったが、今回は少し高めで、レンクのきつい綿のブリーフに波紋を広げ、衝撃点に楕円形の跡を残した。レンクは叫びを抑えることに集中しすぎて、数を忘れてし

まった。サリーナは数秒待ってから、五発目と六発目を素早く連続して打った。一発ずつ各頬に。「数えて、レンク！」

「うーん！ 四発！ 五、六！」

サリーナはレンクの腰を優しく押さえ、抱きしめるようにしながらも、彼の立場を思い出させ、必要なら素早く連続して叩く準備をした。「違うわ、レンク。四発だけよ。痛くないふりをするのはやめて、数を数えて、答えに集中しなさい！」

レンクは額を木の表面に下ろした。叩かれたお尻の鋭い感覚ほど、自分が愚かに感じさせるものはない！「四発、サリーナ！」

サリーナは頭に浮かんだ最初の質問をした。「そもそもなぜメドーの言うことを聞いたの？」

サリーナはこの質問で時間を稼ぎ、レンクに死の危機に瀕する結果となった一連の愚かな決断について考えさせることを期待していた。彼女はその質問が彼を怒らせるかもしれないと思った。しかし驚いたことに、レンクは泣き始め、肩を震わせた。

「俺は…俺は…怖かった！」

「メドーが怖いの？ あいつにもう振り回される必要はないわ！ あなたなら勝てる！」

レンクは首を振り、涙が厚く震える嗚咽となった。「怖かった…彼に腰抜け呼ばわりされるのが！ 怖かった…自分が腰抜けなのが！」

瞬時に、サリーナの心は溶けた。彼女はブラシを脇に置き、レンクの視界から外し、優しく彼の背中を撫でた。「あなたは腰抜けなんかじゃないわ、レンク。メドーがあんなことを言うのは、あなたが今は彼より強いからよ！」

「彼のことじゃない！ 俺自身だ！ 悪夢が怖いんだ！ 寝るのが怖い！ 馬に乗った男が怖い！ 全部が…怖いんだ！」レンクは崩れ落ち、自由に泣き叫び、下のテーブルの表面が涙で濡れた。

驚き、安堵し、そして心配が一度に押し寄せて、サリーナは彼に存分に泣かせ、頭と肩を撫でて、彼が涙を拭いて再び自分を奮い立たせようとするまで待った。レンクは彼女が右手を自分の臀部に置くのを感じたが、今度は優しく撫でるように、そこに残した赤い跡を和らげようとするかのようだった。

「レンク、言っておくけど、あなたは私が知っている中で一番勇敢なニーベルンクよ。私はあなたをスパンキングするたびに緊張するの…秘密を教えようか？」

レンクの金髪が揺れ、彼は興味を持って顔を上げた。目が合うと、サリーナは彼にウインクした。「メドーをスパンキングするたびに、あいつは最初の一発を打つ前から赤ん坊みたいに泣くのよ。だから次にメドーがあなたに絡んできたら、そのことを思い出して、役に立つかどうか試してみて！」

レンクの荒い息の一つがくすくす笑いに変わり、ようやく呼吸が落ち着いた。「でも悪夢のことはどうすればいいんだ？」

サリーナは何と言えばいいか考えた。彼女はレンクが元々ニーベルンクの生まれではないことを知っていた。彼女は彼の出自について一度も嘘をついたことはなかったが、すべてを話したわけでもなかった。彼の母親がニーベルンクではないこと…ニーベルンクには母親がいないこと。彼女は時が来るまで待っていた。

しかし毎日、レンクは大きく強くなっていた。すぐに、彼が森の子供たちの一人ではないことが明らかになるだろう。サリーナはレンクを自分の膝の上から抱き上げて、すべてを話したいと思った。許しを請う。代わりに自分をスパンキングしてほしいと懇願する。しかし賢老樹はレンクの母親の遺言を尊重し、彼の真の出自をできるだけ長く厳密な秘密にし、少なくとも彼がそれに立ち向かえる年齢になるまでは、外の世界の紛争や戦争から彼を遠ざけておくことにしていた。

胃のあたりに重苦しいものを感じながら、サリーナは賢老樹に時が来たかどうかを決めさせることにした。「あなたの悪夢については分からないけど、レンク、何が起ころうと、一人で立ち向かうことにはならないと約束するわ」

レンクはサリーナの言葉を少し困惑しながらも、しかし慰められているのを感じた。

「さて」と彼女の声は優しかった。「あなたのお尻を裸にするわね。きちんとスパンキングを終わらせるために」

＊＊＊

レンクのツリーハウスの外で、ファドとティラはレンクが耐えた激しい打撃に驚きの息を飲み、メドーが泣き虫だという知らせに笑いをこらえ、レンクが心を打ち明ける痛ましい光景に涙し、サリーナが彼を慰める心温まる光景に感嘆の声を漏らした。

これだけのことがあれば、サリーナは満足するだろうと確信していた。しかし今、裸のお尻のスパンキング？ それは最も重大な違反にのみ取っておかれるものだ！ それに、レンクはニーベルンク村の基本ルールの一つを破っていたのだ。

そして驚いたことに、レンクは抗議の声すら上げずに自分の運命を受け入れているようだった。ティラとファドの頬は押し付け合いながら、よりよく見える位置を争った。ニーベルンク村の少女たちの間では、レンクはニーベルンクではないにもかかわらず、男の子の中で一番ハンサムだと満場一致で認められていた。

甲高い声が小鳥のさえずりのように鳴った。「ねえ！ あなたたち二人、いったい何をしているの？」

ファドとティラは共有していたはしごの段の上で危険に揺れ、それぞれ片手を離して自分の後ろを覆った。まるでサリーナが復讐の霊として空中で彼らをスパンキングしに来たかのように。振り返ると、二人のピクシーの相棒がいた。ティラのピクシーは腕を組み、羽を安定して羽ばたかせていた。ファドのピクシーは腰に手を当て、見えない床の上に立っているかのように足をトントンと叩いていた。

ティラとファドは目を合わせ、それぞれが相手が何か素晴らしい説明をしてくれることを期待した。彼らのピクシーの相棒は友達以上の存在だった。守護者であり、助言者であり、道徳的な導き手だった！ 何の弁解もできず、ティラとファドは自分の妖精たちを見つめ、彼らがサリーナに知らせるのを待った。あるいは、はしごを登って、レンクの前で即刻スパンキングされるよう丁寧に頼むよう命じるかもしれない！

しかし二人の妖精は意地悪く微笑み、ニーベルンクの子供たちの頭の上にひらりと座った。「よくもこれを、私たちを誘わずに見ていたな！」

＊＊＊

レンクの心臓は期待で高鳴った。彼はこの瞬間を恐れ、それが来ることを十分に承知していたが、それでもサリーナがこの最後の屈辱から彼を免れてくれることを望んでいた。しかし長い

スパンキングが彼の頑固さを打ち砕き、今や彼は自分の運命を受け入れる準備ができていることに気づいた。これが罰の最後の部分であり、勇敢なニーベルンクとしてそれを受け止める決意を固めていた。

サリーナは優しくレンクを立たせ、チュニックのスカートの下に手を伸ばして白い半ズボンを支える紐を解いた。レンクの手が最初にその結び目に飛んだ。「お願いだ、サリーナ！…俺にやらせてくれるか？」

サリーナはうなずき、丁寧に顔をそらし、レンクが下着を臀部のすぐ下まで下ろすのを許した。半ズボンを下ろしたとき、それがどれほど不快だったかに気づいた。彼はチュニックの裾を前の腰の下に押さえ、ぼろぼろのチュニックの残骸が提供する最後の一欠片の慎みに感謝した。レンクはそこに立って、露わで無防備な状態で、顔が熱くなるのを感じた。しかしツリーハウスを吹き抜ける冷たい風は、もう一方の赤くなった頬には心地よく感じられた。

レンクは素直に元の位置に戻り、裂けたチュニックの裏をきれいなフラップのようにめくり上げて、赤くなった臀部を露わにした。サリーナが始めようとしたまさにその時、彼女は視野の端に光の閃きを捉えた。太陽の光の中のピクシーの粉のような。彼女は瞬きをして、ドアの外のはしごを注意深く見たが、目の前のレンクの裸の臀部を見て、目の前の仕事に集中することにし、手のひらから始めて、まるで最初から始めるかのようにスパンキングを再開した。

サリーナは尋問に対するレンクの答えに満足していた。もし彼が生意気な返事や言い訳をしていたら、彼女は必要なだけ罰を延長するつもりだった。実際には、サリーナはレンクの試練を早く終わらせたかったが、彼の臀部が赤い林檎のように輝くまで容赦しないと決意していた。

レンクは既に、今後数日間は座るのが大変だろうと分かっていた。しかし、恥、罪悪感、屈辱、そして痛みはすべて、新たな感情、すなわち愛、安全、そして恐れのなさと鮮明に対照をなしていた。レンクの涙が再び流れた。レンクはサリーナが手のひらでのスパンキングを一時

中断したことにほとんど気づかなかった。多くの打撃の累積的な痛みが、今や個々の平手打ちを感じる能力を圧倒していた。

しかし、ヘアブラシの冷たい木が自分の臀部を撫でるのを感じ、警告の軽い打撃音を聞くと、彼の最後の思いはサリーナへの感謝と、自分の運命の受容だった。

＊＊＊

サリーナの注意を逃れるために辛うじてタイミングよく身をかがめた後、ファドとティラは大胆にも頭を十分に上げて大団円を目撃した。レンクはサリーナがヘアブラシで容赦なく叩くたびに叫び声を上げてもがいたが、小さな手が彼を押さえているだけで、レンクは純粋な意志力で位置を離れたり身を守ろうとしなかった！

彼らの密かな冒険の非合法な楽しみは、とっくに畏敬と同情の念に取って代わられていた。二人の少女はレンクのそばに駆け寄って慰めたい、あるいはサリーナの足元に身を投げてすべてを告白したいと思った。ティラは頭を高く上げ、隠れるふりを忘れて叫ぼうとした。「お願い！ 代わりに私をスパンキングして！」

しかし運命が介入した。レンクは左足を猛烈に蹴り、ブーツが部屋中を飛び越え、開いた出入り口を通り抜け、ティラの顔面を直撃した。ファドはそれが起こる前に見る時間があったが、反応する術はなかった。ティラは反射的にファドに掴まり、二人が立っていたはしごの段はきしんで真っ二つに折れ、ファドは反射的に最上段に掴まり、はしご全体がデッキから外れ、彼らはすべて地面に転がり落ち、狂ったようなもがき合いの末、最後には少女らしい抱き合いとなり、二人の妖精も無力に少女たちの髪にしがみついていた。

レンクは自分の罰に夢中で騒動に気づかなかったが、サリーナはすべてを見ていた。レンクを見下ろし、彼女は自分の手による仕上がりを調べた。優しく、しかし迅速に、サリーナは自由に泣きじゃくる少年を膝の上から持ち上げ、彼の頭をテーブルに休ませた。

デッキの端から覗き込んで、サリーナはファドとティラを認識した。二人とも気絶しており、困惑した表情が顔に凍りついていた。サリーナは静かに憤慨した。「なんて日だ！」

彼女はシャツの胸元を軽く叩いてピクシーに合図し、彼女を下に送って二人のスパイの様子を見させた。妖精たちは治癒の魔法に恵まれているので、サリーナにできることはこれ以上なく、当面はレンクに全注意を向けることにした。

泣きながら、レンクは前腕で涙を拭い、まだ自分の位置を保とうとしていた。「うっ？ 何が起きた？ 蹴りすぎたのか？」

「いいえ、あなたのはしごが落ちたの。予備はある？」

レンクは瞬きをし、それからチュニックの前で鼻水を拭い、自分の悪行を悔い改めて当然の罰を受け入れること以外を思い出そうとした。「ああ、袋に綱はしごがあるよ」

サリーナは誇りで輝いた。「あなたは素晴らしいわ、レンク！ 隅に行って私を待っていなさい」

レンクの目は隅に置かれた杖へと向かった。「まさか…次はその杖でむち打つつもりか？」

サリーナは彼の視線を追って盗んだ棒を見た。中断がなかったなら、彼女は追加の鞭打ちをしたり、盗んだ棒でむち打って盗みの報いとして詩的な正義の最終的な一手を与えようと強く

思っていたが、レンクはこれほど勇敢で、従順で、悔い改めていたので、彼女の心は溶けた。「いいえ。あなたは勇敢に罰を受けたわ、レンク。誇りに思う」

レンクは涙で輝く目で彼女を見上げた。「ありがとう、サリーナ。罰を受けるに値することをしてごめんなさい」

サリーナは微笑み、腕を彼の肩に回して隅へ導き、それから盗んだ杖を自分で掴んでベルトに引っ掛けた。それが役に立つだろうという予感があった。「許すわ！ でも老いぼれノットに謝るのを忘れないでね。明日これを返しに行くわ。もしその時までにまだ罪悪感を感じていたら、彼にあなたがむち打ちに値すると思うかどうか尋ねてもいいわよ。あなたに尋ねるよう強制はしない。それはあなた次第。ここに立って、今日起こったすべてのことについて、私が迎えに来るまで考えていなさい」

レンクはうなずき、半ズボンを引き上げながら、むち打ちの見通しにもかかわらず、奇妙なほど慰められ、許された気持ちになった。サリーナは、お気に入りの小さな友達が見張りに立っている姿を最後にもう一度堪能してから、綱はしごを結ぶ作業に注意を向けた。

彼女はドアを閉め、レンクに自分が覗かれていたという恐ろしい事実をまだ知られたくなかった。どうしよう、どうしよう？

サリーナの安堵のために、彼女のピクシーはファドとティラの両方に永久的な怪我はないが、二人とも予定外の昼寝をしていると報告した。

サリーナは、四人の悪党が草の生えた小さな丘の上に山積みになっているという馬鹿げた光景を見て口を引き締めた。「彼らのピクシーの相棒たちは？」

「目は覚めてるけど、羽がちょっと乱れてるわ」

サリーナは綱はしごを落とし、はしごの端がファドの上を向いた臀部に軽く叩きつけられるのを見て、思わず笑みがこぼれた。来るべきことの兆しと前兆だ！ ファドがそれを評価するために起きていないのが残念だ！

「私はレンクを寝かしつけるわ。女の子たちは、三人とも昼寝から目覚めた後で、レンクにちゃんと謝ることができるわ」

サリーナのピクシーは指の関節をポキポキ鳴らし、それから腕を伸ばしてピクシーサイズの臀部を平手打ちするパントマイムをした。「彼らの妖精たちにもしっかりお仕置きするのを忘れないでね。レンクを覗くだけでも十分悪いのに、ピクシーの守護者が自分のニーベルンクを悪い道に導くなんて？ あなたが与える罰は何でも、私は倍にするわ！ 実際、彼らのニーベルンクが回復している間に遅らせる理由はまったくないわ！」

サリーナは、これほど共感できる守護者を持っていることを考えてくすくす笑った！ レンクは彼女が再びツリーハウスに入ってくるのを好奇の目で見たが、スパンキングの記憶がまだ鮮明な彼は、あえて詮索したり議論したりしなかった。「決めたよ。老いぼれノットにむち打ってくれるように頼むつもりだ。それに賢老樹にも鞭打ちを頼むつもりだ！」

サリーナは二度見し、レンクが冗談を言っていることを願った。「罰を欲しがる必要はないわ、レンク！」

レンクはサリーナに、議論の余地のない決意のまなざしを向けた。「怖くない！」

サリーナは肩をすくめてから、彼の髪をくしゃくしゃと撫でた。「まあ、決断は彼らに任せることにしましょう」

彼はあくびをして、垂れ下がる目をこすりながら、サリーナがタイムアウトから解放してベッドへ導いた。

サリーナは彼のチュニックの襟に手を伸ばして、上に引っ張って頭から脱がせようとした。「服はぼろぼろね！ 縫ってあげる！」

レンクはチュニックの裾を掴み、顔を赤らめた。「やめて！ お願いだ、サリーナ、自分でやらせてくれ！」

サリーナは手を離し、馬鹿げた気持ちになった。「おっと！ ごめん、レンク。習慣ね。プライバシーのために外に出るわ」それはほろ苦い瞬間だった。彼女はレンクが乳児として彼女の世話に預けられたときから着替えさせていた。瞬く間に、それらの日々が永遠に過ぎ去ったと感じた。

レンクはぼろぼろの服をドアの外に置き、それからカーテンの陰から頭を覗かせた。サリーナは彼がまだ服を脱ぐのを恥ずかしがっているのかと思ったが、彼が予備のチュニックと帽子に着替えているのを見た。「サリーナ？ ありがとう、全部に！」

サリーナは彼の額にキスをして答え、彼を昼寝に残した。彼女は彼が永遠の森での眠れぬ夜の後、ベッドに飛び込むドサッという音を聞いた。

サリーナがはしごを下りると、彼女のピクシーがファドとティラの妖精たちを集め、それぞれの羽をつまんで導いているのが聞こえた。「ねえ！ 聞いて！ 二人とも恥を知れ！ ピクシーが自分のニーベルンクをそんな破滅に誘うなんて？ これはピクシー族全体の不名誉だ！」

サリーナがファドの腰を抱えて持ち上げ始めたとき、ブロンドのニーベルンクが目を覚まし、震える声でつぶやいた。「…あと五分、ママ！」

サリーナは笑みを浮かべ、素早くファドの臀部を叩いた。「あら、素晴らしい！ 起きたのね！」

ファドはその平手打ちで目を覚まし、子犬のようにキャンと鳴いた。ニーベルンク村全体の前で膝の上にうつ伏せになってスパンキングされるという鮮明な夢から目覚めたばかりで、ファドは自分の悪夢が現実になったことをぼんやりと認識しながら、あまりに怖くて話せなかった。

ファドの安堵のために、サリーナは彼女を下ろし、さらにしっかりとした一叩きを加えてファドのツリーハウスを指さした。「まっすぐ家に戻って私を待っていなさい。私がどうやってレンクをスパンキングするのかそんなに気になるなら、覗かなくてもいいわ。直接教えてあげるから！」

「どうか他のニーベルンクの前でスパンキングしないでください！」とファドは懇願した。

サリーナは、まるでファドが素晴らしいアイデアを与えたかのように、その考えを考慮するふりをした。「うーん！ それは他人のプライバシーを尊重することを教えるのに公平な方法かもしれないわね！」

サリーナはベルトから杖を取り出し、開いた手のひらに叩きつけてから、ファドに手渡した。囚人は自分の処刑の斧を運ぶのだ！「あなたとティラをスパンキングした後、彼に直接謝る機会をあげるわ。あなたがプライバシーの尊厳に値するかどうかは彼次第よ。でもいずれにせよ、レンクに謝った後に追加のむち打ちを受けることになるわ。さあ、歩きなさい、ファド！」

ファドは従い、既に自分の運命を受け入れ、レンクが自分に慈悲を示してくれるよう必死に祈った。

サリーナのピクシーはまだ気絶しているティラを足で指さした。「あの子が起きるのを待つなら、私はこの二人に教訓を教え始めるわ！」有罪の二人の妖精は激しく震え、ピクシーの粉のシャワーをまき散らした。サリーナはうなずき、誇りを持って自分のピクシーが二人の怠けた妖精を引きずっていくのを見守った。二人の妖精は小さな輝く臀部を両手で覆っていた。

サリーナは、まだ気絶していて間抜けな笑みを浮かべているティラの姿を見て、失望のため息をついた。「あらあら、ティラ。ファドがこっそり他のニーベルンクのスパンキングを覗き見しているのを疑ってはいたけど、あなたにはもっと期待していたわ！」

サリーナはティラに一緒に来てもらい、ニーベルンク村でもっと責任を負ってもらうことを考えていた。最近、いたずらをするニーベルンクが多すぎるのだ！

彼女はティラのぐったりした体を肩に担ぎ上げながら、やるべきことリストを考えた。まずファドとティラ、次に彼らの妖精たち、それからメドー（彼はいつも手強い）、そしてファドとティラはレンクに謝らなければならない。つまりファドとティラのもう一度のスパンキング、そして彼らの妖精たちのもう一度のスパンキング！

ティラはうめき声を上げ、肩の上で体重を動かした。まるで夢の中で想像上のスパンキングに苦しんでいるかのように。

サリーナは警告の遊び心のある一発をティラの上を向いたお尻に叩き込んだ。「じっとしてなさい、ティラ。家に運んであげるから！」

「…ごめんなさい、サリーナ…」とティラは眠そうにつぶやいた。

サリーナは目を回し、かすかに笑った。どんなにいたずらなニーベルンクでも、スパンキングのために臀部を上に向けて横たわっている悔い改めたニーベルンクに怒り続けるのは不可能だった。

エピローグ：
サリーナは忙しい数日間を過ごした。彼女はティラが回復している間にファドのスパンキングを始めた。ティラが完全に目覚めたとき、その光景を見て目覚めなければよかったと思った！サリーナはファドに「私は他のニーベルンクがスパンキングされるのを覗くのが好きです！」と書かれた木の看板を彫るように指示した。これでファドは、サリーナがその日の最初のティラのスパンキングを行う間、自分の将来の運命を推測する十分な時間を得た。真剣な話し合いの後、二人の涙ぐむ少女は二度としないと約束した。ファドは誠意を示すために、こっそり覗いたすべてのスパンキングを告白した。

それにもかかわらず、サリーナはファドを膝の上に引き寄せ、木のスプーンで二回戦を行い、ティラも自分の番を待つ間に自分の看板を彫らなければならなかった。サリーナのピクシーは、二人の悪い妖精たちとの同じ手順を繰り返すのを忘れさせなかったが、サリーナは二人を同時にスパンキングすることで時間を節約した。彼女の手のひらと木のスプーンの両方が、二つの小さなお尻を簡単に覆うことができた。

少女たちは看板を頭に巻き付けられ、レンクのツリーハウスに護送されて謝罪し、レンクの運命を受け入れた。最初の衝撃を乗り越えた後、レンクはサリーナが二人の悪党（とその妖精たち）を古木のヘアブラシでスパンキングするのを手伝うことを許された。これで彼の最初の苛立ちを忘れるには十分だった。サリーナが冗談めかしてティラとファドが公開むち打ちに値するかどうか提案したとき、レンクはむち打ちなしでファドとティラを許すつもりだった。

しかし、ファドとティラはレンクに対する自分の扱いに深く心を痛めていた。ティラはニーベルンク村全体の前で長く激しい裸のスパンキングを受け、他の子供たちの模範となるよう懇願した。これはファドが予想していたよりも少し厳しかったが、サリーナがティラの成熟と勇気を称賛したとき、ファドも公開叱責を志願した。この時点で、二人の妖精はサリーナのピクシーに昼夜問わずスパンキングされ続けることを単に受け入れた。ファドとティラは看板を身につけて家々を回り、公開罰の日時と理由をすべてのニーベルンクとピクシーに知らせるために送られた。

ファドとティラの公開むち打ちは翌日に延期された。サリーナはようやく夕方にメドーの家にたどり着き、彼が激しく行ったり来たりしているのを見つけた。最初、メドーは自分は大事な人間だからスパンキングされるわけにはいかないと激しく主張したが、サリーナは彼にそれに立ち向かう勇気がなければスパンキングは意味がないと主張した。嬉しい驚きに、メドーはスパンキングを要求し、自分のベルトをサリーナに差し出した。いじめっ子のような態度にもかかわらず、サリーナはメドーが本当に他のニーベルンクを助けたいと切望していることを知っていた。もちろん、それは彼女がメドーが二度とレンクを困らせないと約束するまでメドーの臀部を真っ赤に焼くのを止めるものではなかった。

翌日、サリーナはレンクを連れて永遠の森の老いぼれノットに謝りに行った。レンクの提案で、老いぼれノットは自分の昼寝を邪魔した復讐として、レンクを自分の小枝のような膝の上にうつ伏せにするのを少し喜びすぎた。レンクは驚いて、古い樹人の手のひらが木のヘアブラシのように硬く、彼の指の一本一本が鞭のように柔軟で細いことを発見した。レンクはまた、両手を膝に当てて立ち、老いぼれノットから古木の棒で六回のむち打ちを受けた。老いぼれノットが、昔はいたずらな若木も爆発性の火花の種を撃ち込まれて罰せられたと熱心に語り始めたとき、サリーナはレンクがさらに創造的な罰に志願する前に割って入った。古い樹人は満足したようで、盗まれた杖を、侵入してくる小さな子供たちを言い聞かせるための贈り物としてサリーナに差し出した。

彼女とレンクが手をつないで家に帰る途中、サリーナは永遠の森の孤独な赤い目の精霊の子供が、深い影に埋もれた頭蓋骨の上に浮かんでいるのをちらりと見た。レンクが一緒だったので、サリーナは今のところその精霊を無視することにしたが、頭蓋骨の子供たちを捕まえてスパンキングするための可能な方法について賢老樹に尋ねるという心のメモを残した。

ニーベルンク村に戻ると、サリーナはレンクにティラとファドのむち打ちを手伝ってくれるよう懇願し、レンクは躊躇しながら承諾した。彼は他のニーベルンクが痛みに苦しむのを見るのが嫌いだったが、サリーナが圧倒されていることを知っていた。レンクが驚いたことに、ファドとティラだけでなく、メドーも石の輪にやって来て公開スパンキングを受け入れた！ レンクがサリーナの助手を務めることを知ったとき、メドーは怒って辞退しそうになったが、サリーナの一瞥といくつかの笑い声とやじの声が、彼を最後までやり通すのに十分だった。そして文字通りの意味でも。

両手を頭の後ろで組み、首に恥を宣言する看板を巻き、臀部を露わにして立っているティラは、サリーナがファドを膝の上に引き寄せ、レンクが顔色の青ざめたメドーを膝の上に引き寄せるのを、好奇心旺盛な見物人に囲まれた石の輪の真ん中で緊張しながら見ていた。ティラはサリーナが自分の方にウインクを投げかけるのを見てから、ファドの最初の平手打ちを加えた。それは必ずしも励みになるものではなかったが、自分の当然の罰に直面したレンクの勇気を思い出して、ティラは安堵の感覚を覚えた。彼女はこれから来るものに立ち向かう準備ができていた。

二人のスパンカーが五人（のスパンキー）を交互に罰することを余儀なくされたため、公開罰は午後いっぱいかかり、サリーナは単純に最初から罰を始めるよう主張した。最初に手のひらでのスパンキング、続いてヘアブラシ、木のスプーン、ベルト、賢老樹自身が提供した細い小枝の束、何でも知ってる兄弟たちが彫ったパドル、そして最後に古木の杖による最終むち打ち。サリーナのピクシーは、ファドとティラの妖精たちが一日中（ピクシーのお尻は治癒魔法のために驚くほど回復力がある）スパンキングされ続けることを確認した。

結局、すべてのニーベルンクがメドー、ファド、ティラの罰の受け止め方を祝福し、レンクとメドーも握手を交わした。三人の裸で徹底的に叩かれたお尻が家に帰っていく様子を見て、サリーナはよくやったと自分を称賛した。

小さな母の仕事は終わることはなく、彼女はそれ以外の状態を望まなかった！

［終わり］

美しきは獣の腹の中に

第一章：大魚

「助けて。私はダグ＝ガドール様のお腹の中に閉じ込められています。

──ラピス

追伸：父には言わないでください！」

レンクとネヴィアがアヴァロンの湖で釣りをしているときに、瓶に入ったメッセージを発見してから、一日と一夜が過ぎていた。レンクはそれが悪戯ではないかと考えていたが、二人のメロウ漁師（鱗と鰭を持つ「魚人間」にはふさわしい職業だとレンクは思った）に偶然出会うまで、そう思っていた。彼らにその奇妙なメモを見せた後、レンクはラピスが彼らの王女の名前であり、彼女が確かに二日間行方不明になっていることを知った。ダグ＝ガドールは偉大な神聖な魚であり、すべてのメロウの間でその知恵で有名であることが判明した。

魔法のメロウ・サファイアの行方について手がかりを求めてメロウ領周辺の地域を探検して一週間が経ち、これがレンクが今までに見つけた唯一の手がかりだった。説得にはいくらか時間がかかったが、二人のメロウ漁師は、アヴァロン人としてはこれほど多くの魚を釣れる少年は悪い人間ではありえないと判断し、彼をメロウ王の宮殿へ案内することに同意した。

決意を固めて、レンクはどんな犠牲を払ってでも王女を救わなければならないと知っていた…それにはラピス王女の指示を無視して彼女の父であるメロウ王デ・ボン十六世に伝えることも含まれていた。

王のぷっくりとしたナマズのような髭が、そのメモを調べながら震えた。「ほぉ、この手紙！ラピス王女からのものだ！ うーむ…見てみよう…彼女はダグ＝ガドール様の中にいるだと？ そんなはずはない！ 我々の守護神であるダグ＝ガドール様が、私の愛しいラピス王女を食べるわ

けがない！ だが、あのよそ者のマドック・ドラコメアが来てから、ダグ＝ガドール様は少し青ざめておられる…」

レンクは王が一呼吸置いてその問題を考えているように見えたので待った。それから数秒待った。さらに数秒待った。レンクが口を開こうとしたちょうどその時、王は背筋を伸ばし、その腹はその努力で激しく揺れた。

「証拠は明らかだ。もちろん君はラピスを探しに行くのだろう。ここからダグ＝ガドール様の祭壇へ通ることができる。私はこの手紙を預かる。君はその瓶を保管しなさい。敬意を持って持っていくのだ…メロウよ！」

メロウ王はその巨大な体を休めていた場所から転がり落とすのに数回試行錯誤し、ゆっくりとその体重を横にずらし始め、水の玉座の背後に隠された祭壇への道を開いた。

王はその肥えた尻を動かすという英雄的な努力に、鋭く息を吐いた。「ムウィープ！ さあ、来たぞ、若者よ！ さあ、行け！ おお…それと、もしラピス王女がまた言いつけを破ってダグ＝ガドール様の口の中で遊んでいるのを見つけたら、彼女に大変なことになると伝えてくれ！ そして家に帰ったらパパからお仕置きを受けると思えと言ってくれ！」

メロウ王は細くて水かきのある手を上げ、強調して振り下ろしたが、彼の腕はその巨大な腹を越えて遠くまで届かなかった。「うーむ…しかし考え直すと、彼女は言いつけを破っていないかもしれない。彼女がダグ＝ガドール様のお腹の中にいないことを願う。彼女をスパンキングしなければならないのは嫌だ…それは以前、彼女の母親に任せていたことだった！」

半分だけ聞きながら、レンクは必死にうなずき、王の途方もない胴回りを押しのけようとした。「はい、陛下！ 喜んでお手伝いします！ それでメロウ・サファイアの方は？」

メロウ王は玉座からずり落ちる努力を止め、レンクを岩と柔らかくぷにぷにした場所の間に危険に挟み込んだ。「うん？ そうだ、そうだ！ それは壮大な工芸品だ！ そういえば、君がこんなに親切な若者だというので、一つだけ小さなお願いをしてもいいだろうか。もし…そしてもしもの時だけだ！ だが、もし私の愛しいパフィーフィッシュ王女が家を飛び出してまたダグ＝ガドール様の口の中で遊んでいるのを発見したら、私の代わりに彼女を…お仕置きしてくれないか？ 彼女が有罪だと思っているわけではない！ 彼女は母親と同じように可愛い子だ！ これは君が既に引き受けた多大な努力に対する敬意と、彼女の父親として私に代わって行動する必要がある君への配慮から、この可能性に言及しているだけだ。君も当然ご理解いただけるだろう！ もしその必要が生じ、彼女が本当に、真にそれに値するなら、君にはもちろん彼女をスパンキングする許可を与える！」

レンクは必死にうなずき、王を押しのけて出口へと向かった。「はい、陛下！ 彼女が言いつけを破った場合だけです！ 分かりました！ それでメロウ・サファイアの方は？」

「おお！ それについては、私の素敵な小さな王女が救出された後に話す時間があるだろう！ これは素晴らしい！ いつ有能な若者がメロウ・サファイアについて尋ねに来るのかと思っていたところだ！ 君がアヴァロン人だということも全く気にしない！」

ネヴィアはメロウ王が何について話しているのか疑問に思ったが、彼女が尋ねる前に、レンクはメロウ王の広大な大殿筋を押しのけて叫んだ。「はい、陛下！ メロウ王女を救出し、宝石を見つけ、彼女を家に連れ帰ります！」

「そして彼女をスパンキングする…必要な場合だけだ！」メロウ王は誰かに愛娘を罰してもらわねばならないという考えに頭を垂れた。

「分かりました！ 必要な場合だけです！」とレンクは答え、王を無視して華麗なアーチ状の廊下を駆け抜け、隠された聖域へと向かった。

ダグ＝ガドールへの祭壇は、大きく澄んだ池であり、四方を高い通行不能な岩層に囲まれていた。レンクが池に近づくと、クジラよりも大きな巨大な魚が水面から飛び出し、その頭を高くなった木製の桟橋に乗せた。まるでおやつを求める期待に満ちた、人懐っこい子犬のように。

ネヴィアはレンクの帽子の裏側に軽く弾んだ。「さあ、行きなさいレンク！ 礼儀正しくね！」

巨大な神聖な魚にどう接するのが正しいのか分からず、レンクはお辞儀をした。「ええと…偉大なるダグ＝ガドール様？ 私はラピス王女を探しています！ 彼女をご覧になりましたか？」

桟橋の木材は魚の重みできしみ、それは間違いなく上下に頭を振って答えた。はい！

レンクは「わっ！」という勝利の叫びとともに空中に飛び上がり、それから敬意を込めて再びお辞儀をするのを思い出した。「それでは、彼女に会うことはできますか？」

低く響くうめき声とともに、ダグ＝ガドールは左右に頭を振った。いいえ！

苛立って、レンクは頭を上げ、敬意を忘れてネヴィアに答えを求めた。「じゃあ…どうすればいいんだ？」

「レンク！ 危ない！」とピクシーがきしむような声を上げた。

レンクが目をそらしている間に、ダグ＝ガドールは頭を前に突き出し、その唇が濡れた音を立ててレンクに強く当たり、少年は後ろ向きに尻餅をついた。恐ろしい唸り声が聞こえ、レンクは剣の柄を握ったが、ダグ＝ガドールが水中に戻って横向きに転がるのを見た。レンクはその唸り声が戦闘の叫びではなく、巨大な魚の胃から来ていることに気づいた。

打ち身の尾てい骨をさすりながら、レンクは立ち上がってその生き物のよだれを顔から拭った。「お前は…お腹が空いているのか？」

ダグ＝ガドールは再びクジラの歌のような呻き声とともにうなずいたが、今回はその巨魚の叫びに悲しく苦しげな響きがあることにレンクは気づいた。メロウがそれを崇拝するのも無理はなかった。

レンクは自分の携帯袋から干物にした塩漬けのアヴァロン産スズキがぶら下がっているのを見下ろした。それは夕食にするつもりだったものだ。ダグ＝ガドール様はそれを欲しそうに見つめていた。レンクはそのスズキをフックにぶら下げてダグ＝ガドールの前で揺らした。ダグ＝ガドールの腹が再びゴロゴロと鳴ったが、巨魚は動かなかった。

「ええと…おいで、お魚さん、お魚さん、お魚さん？」とレンクは歌うように言い、時間が経つにつれて自分がますます愚かに感じられた。

レンクの歌うような声を聞いて、ダグ＝ガドールはその頭を桟橋に強く打ち付け、レンクは空いた手で体を支えなければならなかった。彼は腐った卵のような臭いのする熱い風の一撃を感じた。巨魚が大きく口を開けたのだ。それだけでメロニー牧場の馬一頭を丸呑みにできそうだった。レンクは吐き気を覚えたが、ダグ＝ガドールは切迫した知性ある目で彼を見下ろした。

ネヴィアは興奮して羽を羽ばたかせた。「ああ！ 手紙を覚えてる？『私はダグ＝ガドール様のお腹の中に閉じ込められています』って！ でもどうやって…待って！ レンク？ 何をしてるの！？」

ネヴィアが反応する前に、レンクは巨魚の顎の中に飛び込んだ。ネヴィアは口がバタンと閉まるのと同時に彼の後を急いで追い、彼女のピクシーの光だけが唯一の光源となった。

ネヴィアは子猫ほどの力でレンクの帽子に小さな拳を叩きつけた。「レンク、あれは正気の沙汰じゃなかったわ！ 何を考えてたの？」

「君の言うことを聞いてたんだ！」とレンクは完璧な誠意を込めて答えた。

ネヴィアが本格的な説教モードに入る前に、人間の頭ほどの大きさの病的な黄色い光が周囲で輝き始めた。それはダグ＝ガドールの口と舌の赤紫色の肉とは鮮明な対照をなしていた。

レンクはその不気味な輝きから目を守った。「あれは何だ？」

「ジャリジリ膿瘍よ！ 寄生虫が引き起こすの。でも…あんなに大きなものは見たことも聞いたこともないわ？」

「危険なのか？」

「膿瘍そのものは危険じゃないけど、ジャリかジリが肉に卵を埋め込んで寄生した痕なの。普通の大きさのものならスズメバチに刺されたくらいの電気ショックを与えるけど、あの大きさ？」ネヴィアは嫌悪の声を上げてレンクの帽子の下に飛び込んで隠れた。「ええと、空飛ぶクラゲみたいなものを見かけたら、触らないで！ 感電するわよ！」

「ありがとう、ネヴィア！」レンクは剣を鞘に収め、木製のクォータースタッフに手を伸ばした。レンクはココリコの鍛冶屋に依頼して、持ち運びやすいようにスタッフをカスタマイズさせていた。一本の枝を使う代わりに、中央に金属製のハンドルがあり、二本の小さな杖がぴったり収まる溝が刻まれていた。中央からでも、従来のクォータースタッフのようにどちらかの端からでも扱えるように完璧に重量配分されていた。

レンクは腕を温めるために数回振りの練習をした。「ジリが木を感電させられるか見てみよう！」

噂をすれば影が差す！ ダグ＝ガドールの喉の奥にある大きな膿瘍が膨らんで破裂し、滴るクラゲのような生き物が現れた。青く透き通った光る皮膚と、紐のように垂れ下がった長い触手を持っていた。

浮遊する怪物に態勢を整えさせまいと、レンクはスタッフでそれを空中から叩き落とし、電気の火花がパチッと閃くのを見た。致命傷を負ったジリは威嚇的なシューという音を立てて地面に漂い、ダグ＝ガドールの震える舌の上に着地すると二度目の電撃を放った。

「哀れなダグ＝ガドール様！ きっと苦しんでいるに違いない！」とレンクは声に出して考えた。

ネヴィアがレンクの帽子の下から頭を出した。「私たちはどうなるの？ ここからどうやって出るの？」

レンクは振り返って肩をすくめた。「戻るのは選択肢じゃない。もっと深く探検してラピス王女を見つけなきゃ。もし彼女がまだ生きているなら、ダグ＝ガドールに口を開けさせる方法を知っているかもしれない！」

ネヴィアはその光景に顔をしかめた。「もっと深く探検？ どこまで行くつもり――おおおお！」

彼女の問いかけが終わる前に、レンクはダグ＝ガドールの喉の奥へ飛び降り、彼女の最後の質問は長い叫び声に消えていった。

彼らはダグ＝ガドールの食道の基部に柔らかいドスッという音とともに着地した。そこは横方向に広い洞窟へと開いており、壁は厚く波打つ肉で覆われていた。彼の胃の内壁だ。下では黄緑色の酸がかすかにシューシューと音を立てていた。レンクは笑い、アドレナリンで心臓が高鳴った。ネヴィアが帽子の下で怒り狂っているのを聞いて、レンクはそっと帽子を叩いた。「ああ、騒ぐなよ、ネヴィア！ 生きてるぞ！ …もしもし？ 誰かいるか？」

か細い声が、どこからともなく答えた。「やっと誰かが助けに来たわね。あなた！ 誰なの？！」

その声がどれほどか弱いものであっても、レンクはその言葉に明らかな皮肉の響きがあることに気づいた。それは人間の声とは違っていた。レンクが会ったメロウ漁師たちの声と同じように細くかすんでいたが、彼らの声よりはるかに高かった。

レンクは声の主を探しながら頭をかいた。「俺はレンク、ニーベルンクの森の者だ！」

その声は威厳のある雰囲気で答えた。まるでダグ＝ガドールの胃の壁に反響しているかのようだった。「私はラピス、メロウの王女よ。」

レンクは食道の端から注意深く覗き込み、下にいくつかの自然に丸みを帯びた棚があるのを見つけた。その危うい棚の一つに壁に背を預けて立っているのは、レンクと同い年くらいの若いメロウの少女だった。レンクの最初の印象は、彼女の頭がサメのように見えることだったが、彼女が振り返って彼を見たとき、それは錯覚だと気づいた。正面から見ると、彼女の可愛い顔は、鰭のような耳を持つ、か弱いがかなり怒っている若い女性のものだった。しかし後ろから見ると、彼女の「髪」はシュモクザメの頭蓋骨の冠のような形をしており、二対の目が完全に付いていた。彼女は文字通り頭の後ろにも目があった！

レンクは笑みを浮かべ、手を差し伸べて彼女を引き上げようとした。「ああ！ そこにいたのか、ラピス王女！ 君の手紙を瓶の中に見つけたよ。父君がとても心配しているよ！」

ラピス王女は目を見開き、それからフンと鼻を鳴らして天を仰いだ。「何？！ 私の父があなたを助けに寄越したって言うの？ 私が誰かにそんなことを頼むわけないわ！『瓶の中の手紙』？ 何のことかさっぱり分からないわ！ 父が私を心配している？ そんなの関係ないわ！ とにかく、今は家に帰れないの。それにあなた…」

ラピス王女は水かきのある足を踏み鳴らし、叫んだ。「ここから出て行きなさい！！…分かった？」

彼女が足を踏み鳴らしたとき、王女は足を滑らせて胃壁を数フィート滑り落ちた。「おおお、ダメーーーッ！ ドフッ！！」
彼女は尾で下の棚に着地した。胃の底で湯気を立てて泡立つ液体のわずか数フィート上だった。王女は体を起こし、スカートのような二つの尾鰭の後ろで尾を擦った。

「なんてわがままな子！」とネヴィアがきしむように言ったが、レンクは一本の指を立てた。完全な沈黙の合図だ。レンクは壁沿いのさらに光る膿瘍を指さした。光る寄生虫が孵化する寸前で、内部で動いていた。

レンクは慎重に最初の棚に身を下ろし、そこから魚の少女にまだ手が届くことを願った。

ラピス王女は彼が降りてくるのを見て、すぐに尻を擦るのをやめ、命令的で高圧的な態度を装った。「まだうろついてるの？ あっちへ行けって言ったでしょ！」

彼女の声が部屋中にこだまするると、レンクはいくつかの膿瘍が震えるのを見た。まるで内部の生き物が目覚めかけているかのように。彼は必死に手を振って王女を黙らせようとした。
「シーッ！ 助けに来たんだ！ もし君が――」

農民の少年に黙らされることに慣れていないラピス王女は、その長広舌を続けた。「大丈夫よ！ 私は小さい頃からダグ＝ガドール様のお腹の中に入っているの！ 彼は誰かに歯を掃除してもらうのが大好きで、ちゃんと私の言うことを聞いてくれるのよ！ でも…」

震える膿瘍に気づかず、ラピス王女は頭を下げ、怒りが薄れていった。「ダグ＝ガドール様が最近とてもおかしくなって… 普通はあまり深く落ちるとすぐに私を吐き出すのに、喉が詰まったみたいなの。電気クラゲや変な穴があちこちにあって…」

クラゲの話を聞いて、レンクは必死に近くの膿瘍の壁を指さした。

ラピス王女は目を回した。「ああ、そんなこともちろん知ってるわ！ 何日もダグ＝ガドール様の喉の中で追いかけ回されてきたのよ！ それに加えて私の貴重な石が…でも…」

「貴重な石」と言ったとき、ラピス王女は手で口を覆い、それからレンクを毒々しくにらみつけた。「それはあなたに関係ないわ！ とにかく…あなた！ 今すぐ家に帰りなさい！ 分かった？！」

ネヴィアがレンクの耳元でささやいた。「貴重な石だって？ それはメロウ・サファイアに違いないわ！ 彼女に私たちにそれをイゾルデ王女に持って行かせられるように説得しなきゃ！」

レンクは顔をしかめた。もしその貴重な石がメロウ・サファイアで、ラピス王女がレンクが彼女の「貴重な石」を盗もうとしていると心配しているなら、彼女の心配はもっともだった。レ

ンクは密かにメロウ王が娘を救出した褒美としてその石をくれることを期待していたが、もしそれが王ではなく王女のものなら、彼の計画は複雑になった。

レンクは手を差し伸べてラピス王女を引き上げようとした。「お願いだ、一緒に父君のところに戻ろう。もし何か、ええと、失くしたものがあるなら、俺がまた来て見つけてやる。必ず君のところに持ち帰るって約束するよ！」

ネヴィアは彼の耳の後ろに寄り添い、レンクだけに聞こえるほど静かにささやいた。「何を言ってるの？ そんな約束をしたら、石を持ち帰れなくなるわよ！」

ネヴィアはレンクの名誉心が、彼の言葉が彼の絆であることを意味することを知っていた。一方で、ネヴィアはレンクがただ嘘をついてラピス王女に石を渡させるために何でも言えばいいのにと思ったが、他方で、彼女の責任はレンクの良心として行動することだった。彼女は良心に従って、彼に約束を破れと言うことはできなかった。

レンクは耳を動かしてネヴィアの邪魔を黙らせた。

レンクの共犯者の存在に気づかず、ラピス王女は彼の騎士道的な申し出に感動して目をぱちぱちさせ、繊細な手を差し出した。まるでキスをさせるかのように。「そんなに私を心配してくれてるの？ ではあなたに私を運ぶ栄誉を与えましょう！」

勝利の笑みを浮かべて、レンクは彼女の手首を掴み、自分の棚に引き上げようとしたが、ラピス王女は自分の体重すべてで彼の腕を引き下ろした。不意を突かれて、レンクは滑りやすい棚から滑り落ち、胃の床に濡れた音を立てて叩きつけられた。彼は顔を地面から上げると、ひどく沁みる粘液を吐き出した。そこにはラピス王女が命令の態度で見下ろしているのが見えた。「しかし…私は探しているものを見つけるまでは離れないわ。信じてね！」

レンクは口を拭い、その味に吐き気を覚えた。「分かった。最後にその…大事なものを見たのはどこだ？」

ラピス王女はレンクを一通り見渡し、おそらく彼を値踏みしてから微笑んだ。「最後に見たのは一週間前よ。その時――」

この知らせに、ネヴィアはもう我慢の限界だった。彼女はレンクの帽子から飛び出し、ラピス王女の鼻の真ん前に浮かんだ。「一週間前にここで失くしたの？ でもメロウたちはあなたが行方不明になってからたった二日だって言ってたわ！ なぜ父や他のメロウたちに言わなかったの？」

怒ったピクシーの出現に驚いて、ラピス王女はたじろいだ。「だって！ 十分に待てばダグ＝ガドール様が吐き出すかもしれないと思ったの…それか…まあ、それから彼の病気が悪化して、何日もほとんど食べてないの！ 他にどうすればいいか分からなかったのよ！」

ネヴィアは空中で足を踏み鳴らした。「うーん！ つまり、失くしたことを認めたくなかっただけね！ この石はあなたにとって大事なものじゃなかったの？」

それを聞いて、ラピス王女の怒りが爆発した。「ちょっと待ちなさい、それは公平じゃないわ、あなた…ホタルみたいなやつ！ 私にとってとても大事なものなの！ それは母の石だったの――」

ラピス王女は唇を噛み、すぐに付け加えた。「いい？ 一週間前、彼に餌をあげているときに、突然私を飲み込んだの！ 驚いて中に落としてしまったの。ダグ＝ガドール様がそれを飲み込んだときに私はとても動揺したわ…でも二日前まではダグ＝ガドール様の口の中で口蓋垂より深くまで行ったことは一度もなかったの！ それがクラゲが現れて、喉の奥まで追いかけてきたの

よ！ 喉はくまなく探したから、石は胃を通ってダグ＝ガドール様の小腸に落ちたとほぼ確信してるわ。」

ネヴィアはラピス王女の頭の周りを怒って螺旋状に飛び回った。「まあ素晴らしい、私たちが息を止めて彼の内臓を泳ぎ回れってわけね？」

レンクは、初めて自分の守護ピクシーの怒りを他の誰かが被るのを見るのが楽しいと気づいた。

ラピス王女はピクシーの無害な平手打ちの攻撃から頭を守った。「痛い！ よくも私に手を出したわね！ いい？ そんな必要はないの！ ダグ＝ガドール様が危険なほど脱水状態なのが分からないの？ 彼の内臓は乾いて空っぽよ。レンクは私を胃の向こう側に運んでくれればいいの。そしたら私は入って出てくるから！」

レンクはダグ＝ガドール様の胃の底に溜まった泡立つシューシューいう液体を見て躊躇した。「でも王女様、もし君を運ぼうとしたら、胃酸が俺を溶かしてしまうよ」

ラピスは嘲笑した。「馬鹿げてるわ。そこまで強くないの。ちょっとくすぐったいだけよ」

レンクは疑問そうにネヴィアを見た。ピクシーはその不気味な溜まりを躊躇しながら調べた。「まあ、普通の胃酸なら、短時間の接触ではあなたを焼かないわ。でももしダグ＝ガドール様の消化系が普通の人間より強いとしたら？」

ラピス王女は手を振って否定した。「ばかばかしい！ 私は何年もダグ＝ガドール様に餌をあげてきたのよ！」彼女の手の甲はネヴィアの小さな臀部に十分な力で当たり、ピクシーを数インチコースから外して飛ばした。

「おい！」とレンクとネヴィアが同時に叫び、レンクは自分のピクシーの相棒を庇った。

ラピス王女は後悔の表情でピクシーを見た。彼女はその仕草を遊び以上の意味で意図したわけではなかった。「ごめんなさい！ そんなつもりじゃなかったの…つまり、誰だって胃酸はあなたを溶かすほど強くないって知ってるわ。考えてみて！ なぜダグ＝ガドール様の胃に穴が開いていないの？ それに、とにかく、私の貴重な石なしでは戻れないのよ！」

レンクは緊張して唾を飲み込んだが、ネヴィアを見て静かにうなずいた。緊張しながら、ネヴィアも同じようにうなずき、レンクの帽子の下の定位置に戻った。二人の友は静かに合意していた。石を手に入れるには、レンクはラピス王女の経験を信じるしかなかった。

腰を下ろして、レンクは革のブーツを脱ぎ、ナップサックに詰めた。

ラピス王女は片目を細めて、彼が正気ではないかのように見た。「一体何をしてるの？」

「もしブーツが酸に浸かると、どれだけ弱くても数日でバラバラになる。それに、足をあまり守ってくれないしね」レンクはナップサックを胸の前に投げ、それから体をかがめてラピス王女が背中に乗り、両腕を首に回せるようにした。

彼女を持ち上げ、両腕で彼女の脚を支えて体重を支えると、ラピス王女は可愛らしい「イープ！」という声を上げた。

レンクがつま先を慎重に酸に浸すと、鋭い痛みは感じなかった。彼の安堵のために、それはただ少しくすぐったいだけだった。

「見て？ それほどひどくないって言ったでしょ」とラピス王女は得意げに言った。

レンクは目を回し、素早く池の中を歩き始めた。彼は最深部でも胸の上部までしか届かないと推測した。しかし中間地点に達したとき、足のくすぐったい感覚が徐々に軽い灼熱感に変わっていることに気づいた。

一気に、彼は反対側に向かって突進し、ラピス王女が首にしっかりと腕を巻き付けて抗議するのを無視した。「何をしてるの？ ゆっくりして！ 落ちる前にゆっくりして！」

レンクは息を切らし、ふくらはぎや太ももまで広がる痛みを感じた。「そんなにきつくしないで！ 支えてるから、ちょっと――」

しかしラピス王女は聞いていなかった。彼女はレンクの首をあまりにきつく抱きしめたため、彼の体重を後ろに引き、彼女の臀部と尾鰭が後ろの酸に浸かった。ほんの少し触れただけで、ラピス王女の目は大きく見開かれた。「イーク！ 熱い！ 急いで！ 急いで！」

バランスを保とうともがくうちに、レンクはラピスの右足のグリップが滑っているのを感じた。

「お願いい、落とさないで！」ラピスは叫び、酸がレンクの胸を越えて彼女の両脚を覆った。その接触に彼女がもがくと、彼女の脚はレンクの掴みから外れ、下半身が酸に突っ込んだ。

反射的に、レンクは目を閉じて頭全体を酸の下に沈め、ラピスの脚が自分の肩の上に乗るようにグリップを調整し、胃の反対側の岸に向かって上方へ、そして前方へと飛び出した。まだ目を強く閉じたまま、レンクはラピス王女の臀部、ちょうど下臀部の下に手を当て、彼女を頭上に持ち上げて物理的に安全な場所に投げ飛ばした。彼女は空中を飛ぶ間に叫び声を上げ、反対側にうつ伏せに着地し、尾を空中に上げて、酸との短い接触でまだジュージュー音を立てていた。

レンクは頭の上でパチパチという音を聞きながら、盲目のまま岸に向かって必死に這い進み、泡を吹いた。

ネヴィアが行動を起こした。「レンク！ ジリが目覚めてるわ！ あなたを狙ってる！」

目をこじ開けようとした瞬間、レンクは何か湿った粘着性のあるものが頭に叩きつけられるのを感じ、それから全身に鳴り響く衝撃が走るのを感じた。ジリが彼の顔を攻撃してきたのだ！ 古木のスタッフを振り抜き、レンクは思いつく唯一のことをした。頭を前に突き出して怪物を自分と一緒に酸に沈め、スタッフの柄を衝撃を受けた獣の体に叩き込んで自分を解放した。

盲目の戦いの中で、レンクはネヴィアの警告の声を聞いた。「もっと来るわ！ 最初の一匹、後ろの右側！」

酸の中を歩きながらスタッフを後ろに振ると、レンクは自分の一撃が別の空飛ぶ獣に当たったのを感じた。浅くなってきた！ もうすぐ着く！
「あと二匹！ 最初のは左！ 二匹目は真上、首を狙ってる！」レンクは大きく弧を描いて左に振り抜いて最初の一匹を打ち、素早くスタッフの端を自分の首に当てて上向きに突き刺した。最後のジリが触手で首を絡め取る直前だった。

足が反対側の岸に着地するのを感じると、何かが彼の腕を掴んで前に引っ張った。ラピスのかすかな声が彼に呼びかけた。「捕まえたわ、のろま！ こっちよ！」

彼はすするような、すぼめるような音を聞き、何か湿った肉のようなものが腕や脚に触れるのを感じてから、スポンジのような床の上に前方に倒れ込んだ。

ネヴィアの声が天使の歌声のように響いた。「退却してるわ！ やったわね、レンク！ …ああ、なんてこと！ あなたの目！ 癒してあげる！ ああ、レンク！ 哀れな子！」

レンクはネヴィアのピクシーの粉が自分の目に振りかけられるのを感じ、目を開ける危険を冒した。彼は目の周りの酸の痛みが瞬時に消えるのを感じ、安堵のため息をついた。それから彼は、自分の目が文字通り全身で灼けるように痛くない唯一の部分であることに気づいた。彼はあえて素早く見てみた。足と脚は真っ赤で、体の残りの部分は股間と臀部から胸の上部まで明るいピンク色だった。

第二波の灼熱感を感じると、レンクは服が酸でびしょ濡れになっていることに気づいた。叫び声を上げて、彼はチュニックと半ズボンを脱ぎ捨て、ラピスが目を覆いながら頬を空色に染めて悲鳴を上げるのを無視した。「正気なの？ 何をしてるの？」

彼は叫ぶ息もなかった。レンクは手と膝をついて休み、第二波の灼熱の炎が消えるのを震えながら待ち、新しい感覚に取って代わられた。ニーベルンクの森で、レンクはかつて長時間日光の下で働いて背中にひどい日焼けを負い、メドーがからかうようにそれを叩いたことがあった。つま先から胸の上部までの下半身全体と、前腕下部もまさにそのような状態だった。肩と顔も痛んだが、同じレベルではなかった。

痛みをこらえて、レンクは冷静に損傷を評価しようとした。脚はまだ動いたが、それで叫びたい気持ちが和らぐことはなかった。

彼はネヴィアの声を聞いた。「良かった。ほとんど表面だけよ。火傷は…数日で自然に治るわ」

「…ありがとう、ネヴィア」とレンクは丁寧に答え、誰にも当たるべきでない人に怒りをぶつけるのを拒んだ。この瞬間、鋭く甲高い女性のメロウの声が彼の思考を遮った。「服を着てくれない？ あなたは乙女の前にいるのよ！」

レンクは瞬きをして振り返り、ラピス王女が片手で自分の脚と臀部を擦りながら、もう一方の手で両目を覆おうとして失敗しているのを見つけた。

レンクは自分の荷物を調べた。服ではなく、城下町からの回復薬がまだ残っていないか願って。ネヴィアの魔法は命に関わる状況では有用だが、貴重な資源であり、通常の火傷にはほとんど効果がなかった。

「ネヴィア？ ここはどこだ？ まだ胃の中か？」

「小腸の入り口だと思うわ。彼女の王女様が何か気持ち悪いドアを通ってあなたを引っ張ったのよ。うえっ！ 脈動して開いたり閉じたりしてるわ！」

レンクが振り返ると、確かにそのドアは胃に通じる円形の筋肉の塊だった。レンクはそれが閉じる前に、その向こうに胃酸の湖が一瞬見えた。

ラピスは鼻を鳴らし、ネヴィアをにらみつけた。「ドアじゃないわ！ ダグ＝ガドール様の幽門括約筋よ！ 何も知らないの？」

ネヴィアは再び攻撃モードに入り、スズメバチのようにラピスの頭の周りをブンブン飛び回った。「あら！ もちろん！ ダグ＝ガドール様の幽門括約筋を『ドア』と呼ぶなんて、私ったらなんて愚かだったのかしら！ もちろん、よく考えれば、この『床』と『天井』は本当は腸壁の襞に過ぎないんだから、みんなで天井の上を歩けばいいじゃない！？」

レンクは騒がしい女性たちを無視して荷物を探った。安堵したことに、彼は赤い回復薬を二本持っており、酸は彼の持ち物に染み込んでいなかった。雑巾を取り出して、レンクは最後の酸の滴を拭き取り、それからラピスに雑巾と回復薬の瓶を差し出した。

「服！ 着て！ よ！」と彼女はきしむように言い、雑巾を奪い取って必死に自分の臀部を拭いた。そこが最も長く酸にさらされていたようだ。

全身を回復薬の風呂に浸かりたいと思いながら、レンクは手持ちの薬を最もダメージを受けた足と脚に集中させた。怒ったような赤が明るいピンクに変わり、再び痛み始めた。

素晴らしい！ つまり回復薬は、彼が再び脚の痛みを感じられる程度には効いているということだ！ 数日これで、彼は完全に回復するだろう！

レンクは予備の服を見つけて着替え、以前に唯一のブーツを保存しておいてよかったと感謝した。

ようやく彼がきちんとした格好になったので、ラピス王女は彼に熱い視線を送り、頬はまだ明るい青に染まっていた（両方とも）。「なんて無分別なの！ どうして私をそんな風に落としたりできるの？」

レンクは彼女を頭からつま先まで見渡し、彼女が自分ほどひどく傷ついていないことを願った。彼女の脚と臀部の鮮やかな青い火傷を見て、メロウは自分たちのようなニーベルンクよりも皮膚が薄いのかもしれないと思った。「君が俺の掴みから滑り落ちたんだ」

ラピスの目が彼の目と合い、しかめ面で彼女は顔をそらし、これ以上の検査から自分の臀部を苛立ちながら隠した。「もし男なら、それらしく振る舞いなさい！ 責任を取りなさい！」

レンクは頭を下げた。「落としてしまってごめん。君が無事でよかったよ！」

そんな誠実な謝罪の言葉を聞いて、ラピスはリラックスし、それから以前のからかうような口調に戻ったようだった。「それに、あの…私を掴んだり、市場に出荷する魚みたいに岸に投げたりした件はどうなの？ 何を考えてたの？」

レンクはラピスが自分の視線に応えるまでしっかりと目を合わせ続けた。「考える時間がなかった。行動したんだ。君を酸から出さなきゃならなかった」

これ以上の言い訳を思いつかず、ラピスは自分の危機一髪を思い出して脚が震えるのを感じた。彼女はレンクの視線に応えられず、焦げた自分の臀部をちらりと見て、尾鰭が焼けていようと、突然生きていることに感謝した。「まあ、もっとひどくなり得たわね！ すごかった！ あれを乗り切ったなんて信じられない！ ダグ＝ガドール様の胃酸がそんなに強いなんて知らなかった！」

ラピスが顔を戻してレンクに微笑みかけると、ネヴィアが空中から突然彼女の前に現れたようだった。「知らなかったって？ あれは普通の胃酸じゃなかったわ！ あなたはダグ＝ガドール様について何でも知ってるって言ってたじゃない！」

レンクは首を振った。「彼女のせいじゃない。俺がリスクを承知でやったことだ。それに、彼が脱水状態だから普段よりひどいのかもしれない」これを聞いて、ネヴィアは落ち着き、レンクの方へ飛び戻った。

ラピスは眉を上げた（いや、眉の代わりにある繊細な魚の鱗を上げた）。「そうね、それは理にかなってるわ。ジャブジャブには強い消化器系があるって知ってたけど、予想よりずっとひどかったわ」

ネヴィアはすぐに戻ってきて、ラピスと鼻を突き合わせるように立った。「予想より強かった？ ジャブジャブには強い消化器系があるって知ってたの？ それってどういう意味？」

ラピス王女はまつげをぱちぱちさせ、自慢げに頭を揺らした。「だって、ダグ＝ガドール様が嘔吐してるから、胆汁の酸性度を調べて彼の状態を評価しようとしたのよ。何かが彼に潰瘍を起こしているのは知ってたけど、その程度までは知らなかったのよ」

ついに、レンクの ストイックな決意にひびが入った。「待ってくれ、つまり君はそれがいつもよりひどいって知ってて、それを言わなかったのか？ 普通の胃酸は危険じゃないはずだって言っただろ！」

ラピスは口をとがらせ、賢い教師が特に鈍い生徒に明らかなことを説明する口調で答えた。「それは完全に正しいわ！ 私たちがリスクを冒しているのは分かってたけど、ただ…それほどひどくはないだろうって思ったのよ！」

ネヴィアが言い返そうとしたが、レンクが先に答えた。「君は真実を知らずに俺の命を危険にさらしたのか？ そう言うべきだった！」

レンクがそんなに早く答えたので、ピクシーは驚いた。彼女はレンクが自分の考えを表現するのが遅いことに慣れていたからだ。彼女はまたすぐにレンクの声のトーンを認識した。柔らかく、制御されているが、危険だった。まるで戦いに入ろうとしているときのように。

ラピス王女にとって不幸なことに、彼女はネヴィアほどレンクを知らなかった。レンクは声を荒げなかったので、ラピスはその背後にある抑えられた怒りを感知できなかった。

彼女は嘘が露見して恥ずかしく、何か間違ったことをしたと認めるには頑固すぎた。腕を組んで、「そんなに怒ってるなら、私の父、メロウの王に告げ口しに行けば？」

彼女はからかうように自分の臀部を叩いた。「もしかしたら父は嘘をついたことで私をスパンキングしてくれるかもしれないわね！」

ラピスは痛みをこらえた。その遊び心のある平手打ちの後からじんじんする灼熱感を感じたからだ。なぜ彼女はこんなに皮膚が薄いのだろう？

しかし彼女がレンクの目を見ると、まったく異なる種類のぞくぞくする感覚を覚えた。

彼女は突然、彼が本気であることに気づいた。

レンクは腕を伸ばし、火傷からのもう一つの激しい抗議の声を感じた。「いや、君のことを告げ口したりはしないよ、ラピス王女」

ネヴィアはラピスよりも先に何が起ころうとしているかに気づいた。邪魔をしたくなかったので、ネヴィアは飛び去り、ショーを見るのに良い席を見つけた。

ラピスは安堵の息を吐いたが、レンクが左手で彼女の手首をしっかりと掴むのを感じるまでそうだった。レンクは彼女を酸の湖へのドア（別名幽門括約筋）からさらに遠くへ導き、安全な棚の上に休ませた。ラピスはこの棚が「十二指腸」と呼ばれることを説明し、すぐに手を放せと要求しようとしたが、レンクが彼女の方を向き、彼女が口を閉ざすような表情を浮かべた。「君の父は君が家出したことをもう知っている。君を探すように言ってきたのは彼だ。君がダグ＝ガドールの口の中で遊んでいることも知っていると思うが、それはよく分からなかった。でも今、君が手紙の中で父に伝えないでくれと懇願した理由がよく分かったよ」

ラピスの目は左右に泳ぎ、まるで逃げ道を探しているようだった。「彼…彼が知ってるの？ あなた私の――」

彼女は咳払いをし、冷静を装おうとした。「…つまり、何の手紙？」

レンクはナップサックを床に落としてクッション代わりにし、その上にきちんと座った。ラピスの手首を一瞬も放さずに。「瓶の中の手紙にはこう書いてあった。『助けて。私はダグ＝ガドール様のお腹の中に閉じ込められています。署名：ラピス。追伸：父には言わないでください！』そう、彼は知ってるし、機嫌がよくない。もしかしたら別のラピスがどこかの巨大な神聖な魚の腹の中に閉じ込められていて、それもまた父親に知られたくないと思っているかもしれない。俺が知ってるのは、君の父親が俺に君を探しに行け、無事に家に連れ帰れ、そして言いつけを破ったことでしっかりスパンキングしろと言ったことだ…もし必要な場合には」

「レンク、冗談でしょ」と彼女の声は震え、空いている手は焼けた青い臀部を覆うために飛んだ。

優しく引っ張って、レンクはラピスを前に導き、自分の膝の上にうつ伏せにし、右手で彼女を押さえつけて左手を自由にした。彼はわざと自分の手のひらに息を吹きかけ、暖めるふりをしてラピスに見せた。

レンクの右腕に弱々しく逆らい、この猛烈な少年の慈悲に身をゆだねていることに気づいたラピスの頭は、逃げ道を探して回った。「待って！ あなたは私を無事に家に連れ帰ることになってるんでしょ？ それまで待ってくれない？ それがパパの言ってることだって確信してるわ！」

それは彼女が考えつく最高の策略だったが、もしかしたら、もしかすると、一度レンクが彼女を家に連れ帰ったら、父親は手を緩めて叱るだけで済ませてくれるかもしれない。母親が亡くなってからは、それが常だった。

レンクは左手を高く掲げた。「心配するな、無事に家に連れ帰ったら、君にふさわしいスパンキングをしてやるつもりだ」

ラピスは安堵で震え、レンクの膝の上から体を起こそうとしたが、彼の右手が簡単に彼女を押さえつけているのを感じた。

ラピスは最初の一発をあまり感じなかった。衝撃は感じたが、痛みは認識できなかった。しかし彼女はそれが背後で雷鳴のように洞窟の壁にこだまするのを聞き、それが何であるかを悟ると、驚きで沈黙した。それから彼女は痛みを感じた。臀部全体に広がるひどい火傷が抗議して燃え上がったのだ。

レンクは一呼吸置き、ラピスに自分がどれほど厄介なことになっているかを考える時間を与え、その知識を完全に浸透させた。これが一度のしっかりしたスパンキングの感覚だと。ラピスは既に目に涙が浮かんでいるのを感じた。

「でも、家に帰るまで待って最初のスパンキングをするわけにはいかない、王女様。君の父親の指示は、必要な場合にはスパンキングしろということだった。今すぐ君は教訓を学ぶ必要がある！」

「レンク、お願い！ そんなことできない！」彼女は叫び、肩越しに振り返ってレンクに自分の震える唇を見せた。哀れな子犬の目を使うのは、家で困ったときにはいつもパパに効いていた！

彼女がレンクが二発目のスパンキングのために手を上げるのを見て、叫んだ。「ダメ！ 私は王──」しかし遅かった。

彼女が自分が確かに王女であることをレンクに思い出させる前に、二発目が決まり、メロウの王女はついに自分の状況を理解した。他のメロウたちの間でこれほど効果を発揮した彼女の高慢な態度は、ここでは何の保護にもならなかった。それは彼女をダグ＝ガドールの腹の中の危

険から守れなかったし、今こうして膝の上にうつ伏せにされているときも彼女を守ってはいなかった。

最も軽い叩きでも、彼女の焼けた臀部に痛みの波を送るには十分だったが、レンクの筋肉は毎日の運動で鍛えられていた。今度は、ラピスは平手打ちの痛みを完全に認識していた。それは敏感な酸の火傷の後の痛みに重なっていた。

レンクの手が三度目に彼女の臀部に当たると、ラピスの体はその激しい衝撃に硬直し、彼女の顔は歪んだ。彼女は臀部全体、尾鰭、脚に広がる痛みの第一波と第二波に耐えようとした。

レンクは左手が彼女の頬に明るい白い跡を残すのを見て、それがすぐに深い海の青色に変わった。最初に見たとき、レンクはメロウの肉がぬるぬると魚っぽいと思っていた。代わりに、ラピスの臀部は確かに冷たく露に濡れているが、触ると滑らかでもあることに気づいた。

一方、ラピスはレンクの手が驚くほど温かくてざらざらしていると感じた。母親の手のひらと比べて。ついに、ラピスは自分が厄介なことになっていると理解した。しかし彼女の王族としての本能は、心の奥底で既に知っていることを受け入れることを拒んだ。

心の中で、ラピスは自分がスパンキングされるに値することを知っており、それを受け入れる準備はできていた。もし悔い改めを示せばレンクが慈悲を示してくれることを祈るかもしれない。

しかしラピス王女は自分がもっとよく知っていると思っていた。これから逃れる方法があるはずだ！

「これは公平じゃないわ！ あなたが火傷を負ったからって何？ 私も火傷したのよ！」

レンクは一瞬止まり、疑問そうにラピスを見下ろした。「公平じゃない？ その通りだ！ 君に不公平にしたくない！」

彼は自分の下にある旅行袋の中で何かを探った。

ラピスは興奮のひらめきを感じた。大きな悲しげな目が効かないときは、威圧的な声を使うのがいつも効果的だった！「そうよ…あなたは私をスパンキングする立場にないわ、アヴァロン人！」

「そして君は口答えする立場にないよ、王女様」とレンクは厳しく答え、自分の荷物から厚い木製のヘアブラシを取り出した。その裏には、手彫りで赤く塗られた賢老樹を表すニーベルンクの紋章が刻まれていた。

ラピスの目は恐怖で見開かれ、それが何のためにあるかを理解した。メロウには髪の毛がないが、それでもメロウ王妃はアヴァロン王室からの贈り物である真珠のヘアブラシを持っていた。そして母親が生きていた頃、ラピス王女の頻繁な不行儀は、彼女の臀部が頑丈なヘアブラシの裏側とよく知り合う結果となっていた。

侮辱の言葉が唇で死に、彼女はレンクがより速いペースで彼女をヘアブラシで叩くにつれて悲鳴を上げた。ヘアブラシの一撃一撃は、先ほどの手のひらの平手打ちよりもはるかに激しく、彼女はその波紋が青い臀部全体に大海の波のように広がるのを感じた。

レンクはスパンキングを一時停止して説教した。「何を間違えたんだ、王女様？」

ラピスの頭は回転した。悲しげな鹿の目は効かなかった。侮辱も効かなかった。権威を主張することも効かなかった。考えろ、ラピス、考えろ！

彼女は最後に母親の膝の上にうつ伏せになった時を思い出した。必死に謝り、教訓を学んだと約束し、母親がついに折れた時のことを。

震える声に混じる痛みと恐怖を隠そうとしながら、ラピスは丁寧な落ち着きを装って答えた。「ごめんなさい、レンク。家出して自分を危険にさらすべきじゃなかったわ。ダグ＝ガドールの口の中で遊ぶことで父に背いていることは分かってたわ！ そして失くした時に誰かに言うべきだったのも分かってた…母の贈り物を失くしたって！」

レンクは彼女の謝罪を考慮し、手にはまだ威嚇的にヘアブラシを握っていた。ラピスは自分の臀部の運命が瀬戸際にあることを知り、自分の謝罪が今学んでいる痛みを伴う教訓を終わらせるのに十分であることを願った。彼女は交互に各頬に数回の優しい警告の軽い打撃を感じた。それらでさえ、継続的な灼熱の痛みを目覚めさせるのに十分だった。

火と熱はメロウにとって比較的異質な現象だった。メロウの母親がいたずらな子供に厳しい警告を与えたいときは、「尻尾に火をつけるわよ！」と脅すのが常だった。

ラピスがまだ幼い頃、アヴァロンの宮廷を訪れているときに火のついたろうそくに触れるなという母親の警告を無視したことがあった。指を火傷することで、幼い王女は「火」という言葉の意味を発見し、火傷した指で泣きながら母親のところへ行くと、母親の膝の上で再びその言葉の意味を学んだ。

ヘアブラシの優しい軽打を感じるたびに、そのろうそくの炎の記憶がラピスの頭に鮮明に浮かんだ。

「ラピス王女。正直に答えてくれ。今私が与えたスパンキングで、君の父親は君が彼に背いたことへの罰として満足すると思うか？」

新たな涙が二筋、頬に輝くと、ラピス王女は愛想笑いを浮かべた。これが彼女の試練を終わらせるチャンスだった！

「はい、私を罰するあなたの仕事に彼はとても満足するでしょう。家出についての教訓は学びました」

それは真実だった！ 父は自分の王女がスパンキングされるのを見るのが好きではなかった。確かに、王妃ならレンクの立場でもう少し続けたかもしれないが、ラピス王女は嘘をついていなかった！

レンクは微笑んだ。「よし」

ラピスが安堵の息を吐いたちょうどその時、彼は再びヘアブラシで彼女をスパンキングして不意を突いた。今度は両方の下臀部を、酸の火傷が最もひどい場所を横切って。

「家出については、君の父親が頼んだ通りに十分に罰した。しかし今度は、失礼なことと、酸について嘘をついたことで、君が本当に、心から反省するまで再びスパンキングする」

レンクは彼女の左右の頬を素早く連続して叩いた。レンクの言葉の意味が浸透し始めたちょうどその時、ラピスはヘアブラシが自分の肉に食い込むのを感じた。彼女は実際に裏面に刻まれた彫刻の跡を見ることができた。そして火傷が燃え上がった。

それが決め手だった。突然、ラピスは再び母親の膝の上にいる子供であることを思い出した。王女としての立場に関するすべての考えはゆっくりと燃え尽きた。レンクの膝の上で、ラピスはいたずらな小さな女の子に過ぎなかった。

レンクが次の十発を加えると、彼女は泣き叫び、怒鳴り、懇願したが、それに応じてレンクはヘアブラシのペースを落とし、それによって彼女は一打一打が残す持続的な灼熱感を感じる時間を得た。

彼女は最初から涙を抑えられなかったが、完全に崩れ落ちる衝動には抵抗できていた。彼女の決意が崩れ始めるのを感じると、ラピスはついにまだ試していないことを思い出した。心からの謝罪だ。

「でも…反省してるわ！ 本当に、反省してる！」

レンクはヘアブラシを振りかざした途中で止め、ブラシが標的に柔らかく当たった（それでも火傷を目覚めさせるには十分以上だった）。「おや？ それはいい始めだ、ラピス。それなら、これを俺の代わりに持っていてくれ、落とさないで」

ラピスはレンクがヘアブラシを自分の顔の前に下ろし、指で柄を握るのを手伝うのを好奇の目で見た。「え？ なぜこれを私に渡すの？」

「後で必要になるかもしれないから。もし本当に反省しているなら、俺が頼んだときにそれを返してくれるだろう」

ラピスはごくりと唾を飲み込み、ヘアブラシを両手でしっかりと握りしめ、落としたらどうなるかを恐れた。

レンクは体勢を調整し、ラピスの下半身が自分の右足に乗り、腰が右腕の下に収まるようにした。彼はその新しい角度を、ほとんど愛情を込めて左手で彼女の臀部を叩くことで試した。
「ねえ、この尾鰭には、スパンキングされたことはあるのか？」

ラピスは肩越しに振り返った。この角度から、彼女の顔はレンクの供給袋の柔らかい布地に寄りかかっており、彼女はレンクの左手が好奇に自分の尾鰭を叩いているのをかろうじて見ることができた。ラピスはメロウ王妃の膝の上でまったく同じ光景を見た記憶に震えた。「そうね、本当にいたずらしたときは、母は手で私の鰭と脚とお尻をスパンキングして、それから鰭を背中の上に上げて、ヘアブラシでお尻だけを仕上げたわ」

「そうなのか？ 徹底してるみたいだな！ 彼女に会ってみたいものだ。いくつかコツを教えてもらえるかもしれない！」

ラピスの目には新たな涙が溢れ、臀部の痛みは忘れられた。「あなた…彼女に会えないわ…彼女は…もういないの！」

レンクは金髪の頭をかいた。「彼女も行方不明なのか？」

ネヴィアは顔を両手にうずめた。レンクが口を開くたびに、彼は自分の足を撃つ方法を見つけるのだった。

苛立ちで、ラピスの涙は蒸発し、彼女は叫んだ。「彼女は死んだのよ、バカ！」

レンクは自分の失敗に顔を赤らめた。「ああ！ ごめんなさい、ラピス王女！ 知らなかった！」

気まずい沈黙があった。

ラピスは突然自分の奇妙な状況に気づいた。ここはダグ＝ガドール様の腹の奥深く、外部の世界からの頑固な農民の少年の膝の上にうつ伏せになっており、彼はまるで自分が困っているかのように、愚かで甘い誠実さで彼女に謝罪している。「はあ…許すわ、レンク」

レンクは周囲を調べた。「そうだな、考え直したけど、これは君を家に連れ帰ってからにしたほうがいいかもしれない」

ラピスはレンクの右膝の上の自分の位置から動こうとしなかった。「あら、そうはさせないわ！ あなたは役立たずね！ 父に代わってこれをしなければならないって言ったわよね？ 母はいつも父に代わって私をスパンキングしてたけど、彼女は絶対に途中でやめたりしなかった！ もし男なら、始めたことは最後までやり遂げなさい！」

レンクは途方に暮れた。「でも…君の母親は男じゃなかっただろ？」

彼らの上で、ネヴィアはこらえきれずにくすくす笑いをこらえてうつ伏せになっていた。ラピスはついに彼女に好感を持ち始めていた！

ラピスは唇をすぼめ、半分は面白がり、半分は苛立っていた。「もちろん違うわ！ でももし彼女がここにいたら、まさにそう言うでしょうね！」

レンクはうなずいた。「ああ！ それなら、ラピス王女、君の今日の行動に対して、君の母親は手とヘアブラシで君をスパンキングしたと思うか？」

魚の少女は固まり、これがどこに向かっているのかを悟り、理解が一瞬で訪れた。一瞬前まで、彼女は自分がレンクよりずっと賢いと感じていた。しかし、ここには避けられないヘアブラシがあり、彼女の手の中にある。彼女は、自分が本当に反省していることを彼に証明するために、頼まれたときにそれを返すという彼の言葉を思い出した。「は、はい？」

レンクは再び彼女の尾鰭を叩き、失ったリズムを見つけようとした。「それなら、メロウ王妃がここで俺を見ているかのように最善を尽くすつもりだ。準備はいいか、ラピス王女？」

ラピスはすすり泣いた。「はい…ご主人様！」彼女は敬称を付け加え、この姿勢にあるときは常に丁寧に答えるようにという母親の指示を思い出した。

笑みを浮かべて、レンクは再び始め、ラピスの尾鰭に平手打ちを集中させた。彼女のあまりに人間的な臀部が枕のようなものなら、尾鰭は二枚のしなやかな毛布のようなものだった。彼はゆっくりとそれぞれを叩き、白からサファイアブルーに変わるまで叩き、それから優しく脇に折りたたんだ。まるでカーテンを引いて、輝く淡い青い月を現すかのように。

レンクが尾鰭を脇に払うのを感じて、ラピスは優しく臀部を持ち上げ、彼がそれを腰の下に収められるようにしてから、再び落ち着いた。

レンクはラピスの決意に感銘を受けた。彼の最初の印象は彼女が泣き虫でわがままな子だということだったが、今彼女は自分の新しい一面を見せていた。それは奇妙なことに従順でありながら勇敢でもあった。

しかしレンクはまた、ラピスが悔恨の新たな涙を流すまで彼女を解放しないと決意していた。彼は自分自身に、そんな愚かな質問をしたことで自分を叱っており、ラピスの母親が設定した高いハードルを超えるという挑戦に勇気づけられていた。

レンクは標的を調べた。確かに、酸でできた青い火傷の跡は痛々しく見えたが、彼女の頬の側面は尾鰭が酸とレンクの手のひらの両方から保護してくれたおかげでより青白いことに気づいた。レンクは色を均等にし、ラピスの臀部の隅々までが火傷のサファイアブルーに合うようにすることにし、ラピスの左頬の遠い側面に下向きの一撃を加えて始めた。

ラピスは抗議の声を抑えるために歯を食いしばり、涙が再び溢れた。彼女はレンクと同じくらい愚かに感じ、自分の決意を証明することに同じくらい熱心だったが、追加の重荷を感じた。恥ずかしさだ。ゆっくりとした安定したスパンキングのペースは、彼女にすべてについて考え

る時間を与え、頬と太ももの側面に加えられる平手打ちの新たな感覚は、彼女の罰が最初からやり直しのように感じられた。

火傷と打撃の両方で最もダメージを受けた臀部の中心は、今や着実に痛み、脈打っていた！ 彼女は再び怒りが高まるのを感じ、呪いの言葉や痛烈な発言を叫びたい衝動を感じた。彼女の別の部分はワニの涙を流して彼の慈悲に訴えようと誘惑された。

彼女はただこのスパンキングがもう終わってほしかった！

しかし、心の目で、ラピスは幻を見た。異なる道にいる三人の自分がいて、彼女は自分の道を選ぶことができた。彼女はわがままな子のように振る舞わないことを選ぶことができた。彼女は王女のように振る舞わないことを選ぶことができた。彼女は心から話すことを選ぶことができた。彼女は自由に泣きながら叫んだ。「お願い！ 許して、レンク！ 私は…私はいい子になる！」

レンクは最後の一発を彼女の臀部の中心に加えてから止めた。「許すよ、ラピス。さあ、ヘアブラシを渡してくれ」

ラピスの目はぱちっと開き、彼女の手の中のヘアブラシは自分の涙の霧の滝の背後に隠れているように見えた。嗚咽しながら、彼女はヘアブラシを頭上に掲げ、従順に懲戒者に差し出した。彼女の頭の後ろにある双眼のシュモクザメの目は、優れた周辺視野を彼女に与えていた。彼女が自由に泣き崩れ、自分の手に顔をうずめると、メロウの子供以外には決して見ることのできないものが見えた。レンクがヘアブラシを高く掲げ、何度も何度も振り下ろす中で、自分の臀部が青いスミレの花のように咲くミミズ腫れを残すのが水晶のように鮮明に見えた。

両生類のように、メロウは水中にいないときの水分補給のために皮膚に余分な水を蓄えていた。普通の子供が涙をすべて出し尽くしてからずっと後も、ラピスの涙は二つの滝のように自

由に流れた。彼女は身もだえし、のた打ち回り、震え、足を蹴ったが、自分の臀部を覆ったり逃げたりはしなかった。彼女はレンクが加えた最後の十発の一撃一撃を見、聞き、感じた。

レンクがヘアブラシで十発目を黙って数え終えた後、彼はラピスに哀れみを感じた。彼女の謝罪は誠実であり、メロウ王妃がレンクに同意したかどうかに関わらず、彼はラピスはもう十分以上にスパンキングされたと判断した。「よし。君の声の調子で本当に反省しているのが分かる。さて、もう一つ君に与えなければならないものがある」

ラピスは緊張して見上げ、泣き言を言った。「それは…またスパンキング？」

レンクは彼女を持ち上げ、優しく回して自分の膝の上に座らせ、温かい抱擁を与えてから、離れて彼女の背中を叩いた。「よしよし、ラピス王女。もう終わりだ」

彼女の座面がレンクの膝の上に下りるのを感じて、ラピスはきゃっという声を上げてその場で少し跳ね、それから両腕をレンクの肩に回して体重を支え、焼けた臀部を彼の膝の上と端の上にわずかに浮かせた。「私…母もそれで満足すると思うわ！」

突然、自分がどれほど子供っぽく感じているかに気づき、ラピスは顔を赤らめて立ち上がり、レンクの抱擁から解放された。「まあ！ これからどうするつもり？」

彼女のショーを存分に楽しんだ後、ネヴィアはレンクの元に戻った。「今からラピス王女を家に連れて帰るの？」

レンクは周囲を調べた。「ここまで来たんだから、ゾー…ああ、ラピスの貴重な石を探すべきだ。ダグ＝ガドール様の病気の原因も分かるかもしれない」

ラピスはすすり泣いて涙を隠し、それから自分の柔らかくうずくような臀部がまったく影響を受けていないふりをした。「ようやくまともなことを言ったわね！ それに、私からそれを奪おうなんて考えないでよ！ あなたは私の母の石にやけに興味があるみたいね！」

レンクは心臓に手を当てた。「約束する。絶対に君から盗んだりしない」

ネヴィアはうめいた。彼女の少年は実に誠実な馬鹿で、それが彼女が彼のピクシーであることを誇りに思う理由だった。

行動に熱心なレンクは、ラピスの手を掴み、速足で前に進み、彼女を後ろに引きずった。「さあ、王女様！」

ラピスの目は見開かれたが、空いた手で自分の臀部を擦りながら、口元が間抜けな笑みに歪んだ。「あら！ 私を運んでくれない？ …つまり、ただ引きずり回さないで！ 私はひもでつながれたおもちゃじゃないのよ！」

ネヴィアは声を上げた。「またスパンキングが欲しいの？ 動き続けなさい！」

しかしネヴィアが言い終える前に、レンクは立ち止まり、ラピスを軽く抱き上げた。

ネヴィアの羽がピクッと動いた。「レンク、彼女に振り回される必要はないわよ！」

レンクは肩をすくめ、ラピスが恥ずかしそうに彼から目をそらし、真っ赤に頬を染めていることには全く気づいていなかった。「彼女は丁寧に頼んだ。それに、こっちのほうが速く動ける！」

ついに、ラピスはレンクの目を見ることができた。「レンク…私を無事に家に連れ帰った後、また私をスパンキングするつもり？」

レンクは眉をひそめ、答えが明らかであるかのようだった。「そうだ、王女様」

ラピスは興奮のひりつきを感じた。それは脚や尾に沿ったひりつきと一致するものだった。「…あら！ もちろん！」

彼女は再び支えのために両腕をレンクの肩に巻き付け、それからぶっきらぼうに付け加えた。「忘れないって約束して？ あなたは自分の言葉を守るって期待してるから！」

レンクは眉を上げた。「もし忘れたら、思い出させてくれるか？」

「ふん！ そんな大事なことを忘れるなんて！ あなたは自分の言葉に誠実な男なのか、そうじゃないのか？」

レンクは輝いた。「自分の言葉を守るよ。忘れないと約束する！」

ラピスは自分の頭をレンクの胸にすり寄せ、メロウ・サファイアを自分に譲り渡したときに母親がずっと昔に言った言葉を思い出した。「この石は我々の民の心を表している。あなたの父が私に婚約の贈り物としてくれたものよ。それを男に差し出してはいけない。ただし、尊敬できる男、自分の言葉を守る男にだけは別よ…そして失くさないで。さもないとスパンキングするからね！」

ラピスは息を吸い込み、野生のアヴァロン人の少年の奇妙な塩気のある香りを取り込んだ。ついに、ここに自分の言葉に誠実な男が現れた！

［第一章 終わり］

美しきは獣の腹の中に

第二章：聖なる誓い

ラピス王女の貴重な石を探すという共通の使命の途中で、レンクとラピスは胸が高鳴り、心温まる一連の冒険を経験した。ダグ＝ガドール様の腸内で暴れ回る怪物ビッグオクトーに待ち伏せされ、二人の友は引き離された後、レンクは何か黒魔術が働いているかもしれないと疑い始めた。レンクは哀れなダグ＝ガドール様の小腸を巡り、その源、すなわちネヴィアがジャリネードと認識した、触手のある嫌悪すべきゼラチン状の怪物が寄生の原因であることを突き止めた。

その獣がラピス王女をその手中に捕らえているのを見て、レンクは勇敢に行動を起こした。残念ながら、感電せずに剣で触れることはできなかった。レンクは自分が終わったと思ったが、ラピスが自分も何かを手にしていることを明かした。ブーメラン？

「まったく！ こんなところで見つかるものね。ダグ＝ガドール様が大食漢でよかったわ！」とラピスは叫び、レンクが必死に怪物の攻撃を避ける中、ブーメランを使って遠距離から攻撃した。

その忌々しいものを倒した後、彼らはラピスの貴重な石を回収した。それは確かに神秘的なメロウ・サファイアだった。（「驚いた、驚いた！」とネヴィアが皮肉っぽく付け加えた。）

幸いにも、魔法の石の力で彼らはダグ＝ガドール様の内臓からテレポートし、神聖な魚の消化管の見学を終える必要はなく、二人とも湖の水にどぼんと飛び込んだ。

冒険が終わり、ラピス王女はあくびをした。まるで初デートで普通に公園を散歩したかのように、それからレンクに向かって泳ぎ、彼の目をまっすぐに見つめ、両手を背中で組んで揺れな

がら言った。「あなた！ 格好良かったわ…思ってたより格好良かったけど…ちょっとだけね！ まあとにかく、あなたは私を救ってくれたから、報酬をあげるわ。何が望み？ 教えて…」

レンクはきらめく宝石、金の枠に三つのサファイアが嵌められたものを指さした。「その精霊の石が欲しい」

ラピスは胃がひっくり返るような感覚を覚えた。「水の石のことね？ 母が私にくれて、夫となる人だけにあげなさいって言われたの。メロウの婚約指輪って呼んでもいいわよ！ いいわ！ 私の一番の宝物をあげる…メロウのサファイアよ！」

「…婚約指輪？」とネヴィアが尋ねたが、遅かった。レンクは熱心にその宝石を受け取り、勝利のうちに高く掲げた。

ラピスはウインクして水から上がった。「父には言わないで…」それから、彼女はレンクの先にスキップして行き、自分に甘い小歌を口ずさんだ。

ネヴィアはラピスが聞こえない距離に行くのを待ってから、レンクに向き直った。「レンク…婚約指輪が何か分かってるの？」

レンクは石をしまい、間抜けな笑顔が消えた。「え？ 彼女が何を言ってるのかよく分からなかったけど、ついに三つの精霊の石を全部集めたんだ！ イゾルデ王女がマドックを倒すのを手伝うという使命ももうすぐ終わる！」

ネヴィアはため息をついた。

レンクは眉を上げた。「心配するな、ネヴィア！ それがラピス王女の一番の宝物だって分かってる。イゾルデがそれを使い終えたら、ラピスの『婚約指輪』を無事に返すよ！」

ネヴィアは答えなかった。レンクは突然、自分が何か見落としているのではないかと思った。

「ええと…ネヴィア？ 婚約指輪が何か知っておくべきなのか？」

ネヴィアは彼の帽子から遊び心を込めて一度跳ねてから、彼の先に飛んで行った。「それについては後でたっぷり話す時間があるわ」

願わくば、君があと何年か成長してからね、とネヴィアは思った。

＊＊＊

レンクとネヴィアは廊下を駆け抜けてメロウ王の宮殿に戻り、メロウ王の巨大な臀部が出口を塞いでいるのを見つけた。彼らはアーチの向こうから彼の声がこもって聞こえた。「なるほど。やはり言いつけを破ったのだな。大変失望したぞ、ラピス王女！ お前の母親は何と言うだろう？」

レンクは頭をかいた。「ええと、陛下？ 通していただけますか？」

「うん？ おお！ 我らの英雄が到着した！ ちょっと待ってくれ、若者よ！ ちょっと待て！ ムウィープ！ ムーウィープ！！！」

ネヴィアはメロウ王が唸り声を上げてその巨体を出口から少しずつ動かし始めるのを聞きながら、黙って怒りを燃やした。建築家と肥満した王自身のどちらに腹が立っているのか分からなかった。「ねえ、この宮殿を設計したのは誰？」

「ムウィープ！ おお？ ほとんど自分で設計したのだ！ ほとんどのメロウは紙を重要視しないが、私は水中から出ると結構な製図士なのだ！ この格子細工は単に素晴らしいと思わないか？」

ネヴィアは王の臀部がアーチの美しい格子細工の上を数インチ押し広げられるのを見た。「見事！ 完璧！ あなたはまさに水から上がった魚そのものね！」

「どうもありがとう！」メロウ王は笑い、扉に光の隙間が現れ、彼の二つの壮大な臀部の間の隙間を照らすのに十分な光が差し込んだが、それでもアーチの十分の九は塞がれていた。レンクは息を止めて、王の腰を無理に押し通り、ようやくメロウ領に戻った。

アーチの反対側では、はるかに心地よい光景が彼を迎えた。ラピス王女は父の玉座の前の高くなった石の壇の上に立ち、両手を慎ましやかに前に組み、レンクには見えない小さな白い物体を握っていた。壇の周りには、メロウの全人口が集まっているようだった。おそらくラピスの救出の知らせを聞きに来て、彼女の完全な告白を聞くために残ったのだろう。

父親の背後からレンクが現れるのを見て、ラピスは固まり、それから頭を垂れた。「レンク？ 来てくれたの！ ちょうどパパに起こったすべてのことを話していたところよ…文字通りすべてのことよ！」

父親が繊細な水かきのある指を指すのを見て、ラピスはため息をつき、壇の上で回って民衆に向き直った。「皆さん、私が引き起こしたすべての面倒と心配を謝罪します。私は水の精霊の石に対して適切な責任を果たしませんでした。皆さんから真実を隠しました。家出しました。父に故意に背き、そして…ダグ＝ガドール様の口の中で再び遊びました！」

大人のメロウたちは舌打ちをして首を振り、子供たちの中にはダグ＝ガドール様の口の中で遊ぶという言葉に息を呑む者もいた。

ラピスの肩は震え、正式な謝罪を続けた。「そして、もしこの勇敢なアヴァロン人がいなければ、私は確実に死んでいたでしょう。彼に適切な礼儀を示さなかったことも失敗しました」

レンクは自分がアヴァロン人ではなくニーベルンクだと説明しようと口を挟みかけたが、ネヴィアが彼の頭の上で上下に跳ねて彼を黙らせた。

威厳のある落ち着きを忘れて、王女は自分の尾にある輝く青紫色の跡を見下ろした。それは彼女が無礼に対する罰を受けた公の証だった。

メロウ王は悔い改め、罰せられた娘の姿を眺めた。「まあ、レンクが私の頼みを実行し、徹底的にやってくれたようだ！ よし、ラピス王女…自分の部屋に行きなさい！」

ラピスは再び父親の方を向いた。「嫌よ、パパ！」

観衆がざわめき、メロウ王はそわそわした。「うーん…言うことを聞いてくれないか？」彼は愛する亡きメロウ王妃というより良い半分なしでは、こういう状況でどうすればいいのか分からなかった。

ラピスはレンクを見て、壇の上で彼に近づくよう黙って促し、それから再び恥ずかしそうに目を伏せた。「従うわ、パパ。でもまず償わなければ。レンクがダグ＝ガドール様のお腹の中で与えた罰は、私自身の頑固さが招いたものよ。彼は無事に家に帰ったら私を罰すると約束し、私は自分の運命を受け入れると約束したわ。メロウを代表して、私はその約束を守らなければならない」

彼女はこっそりと背後で石段の麓に集まった親子たち、すべての臣民を一瞥した。「そしてメロウ領の民は、老いも若きも、自分たちの王女が法の上に立つ者ではないことを見なければならない」

メロウ王は安堵のため息をつき、それから快適に背もたれにもたれかかった。「ああ！ もちろん！ 続けてくれ、レンク、若者よ！」

レンクが石段を上がって壇の上でラピスに会うと、彼女は再び彼の方を向き、手に持った小さな白い物体を差し出した。それは装飾が施された真珠のヘアブラシだった。「これは母のものよ。何に使っていたか想像がつくと思うわ。今、それを使ってほしいの」

ネヴィアはレンクの帽子の下から頭を出してささやいた。「レンク、本当にやるつもり――」

しかしレンクは指を立ててネヴィアに沈黙の合図をし、帽子をさりげなく元の位置に戻しながらラピスからブラシを受け取った。レンクは喉が詰まるのを感じた。いったいこの状況で何と言えばいいのか？ 彼はもう一度ラピスをスパンキングするという約束をほとんど忘れており、彼女を許そうと考えていた。最も激怒した瞬間でさえ、彼はこの光景が人里離れた場所で展開することを想像しており、決して目撃者の群衆を想像したことはなかった。

ラピス王女は待たずに、おとなしくその姿勢をとり、水かきのある手を膝の上に置いた。レンクは数人の子供たちがラピスの臀部をよく見ようとわざわざ壇の周りを駆け回るのを見た。レンクはラピスの目が潤み、頬が赤らむのを見た。彼女は目の前の光景、すなわち彼女の公開むち打ちを目撃するために集まった民衆全体を受け止めていた。

レンクは右腕をラピスの腰に巻き付けて彼女の体重を支えるとき、同じ視線が自分を追っているのを感じた。彼女は震えていた。彼は彼女を優しく抱きしめようと最善を尽くし、彼女が自分の手触りから自分が彼女に怒っていないことを感じ取れることを願った。

彼がブラシを高く掲げると、レンクはラピスがこれに立ち向かうのを助けるために何か言わなければならないと感じた。黙っているという彼の習慣ではうまくいかないだろう。「皆さん？ ラピス王女も非常に勇敢だったことを知ってほしい。彼女がいなければ、私はおそらく死んでいたでしょう。彼女が今日以前にしたことが間違っていたことは分かっていますが、皆さんは自分たちの王女が今日どう行動したかを恥じるべきではありません」

これを聞いて、子供たちはざわめき、厳しい顔の大人たちの何人かは笑みを浮かべ、レンクが友好的なジェスチャーであることを願って鰭を振った。レンクは下の群衆のつぶやきを無視して、ラピスだけに聞こえるようにささやいた。「それには君も含まれるよ、王女様」

レンクは彼女の震えが和らぐのを感じ、彼女の顔に笑みが一瞬浮かんでから、ふりをした苛立ちの背後に隠れたのを見た。「まあ、一日中私を宙ぶらりんにしておくつもり？ メロウ領全体があなたを待ってるのよ！ さあ、始めなさい！」

レンクはうなずき、真珠のヘアブラシの平らな端でラピスの既に焼けた臀部を軽く叩いた。それは自分が彫った木製のブラシより小さいが、その材質は頑丈で重みがあることに気づいた。一打一打がより小さく、より集中した範囲をカバーし、あざが残るかもしれないと思った。

レンクはごくりと飲み込んだ。一方で、すべての正式な儀式の後、メロウの誰にもラピスを甘く扱っていると思われたくなかった。他方で、彼はもう彼女に同情していた。自分が強く打ちすぎているかどうか、どうやって判断すればいいのだろう？ メロウの紺碧の臀部は、アヴァロン人やニーベルンクの桃色の臀部と比較するのが難しかった。

最初の一発が鳴り響き、群衆の頭上にこだました。レンクはブラシがラピスの左座面に当たった場所に斑のある紫色の跡が浮かぶのを見た。レンクはメロウが人間よりあざができやすいのではないかと願うばかりだった。

レンクは妥協案を選んだ。全力を抑えるが、より長い罰を執行し、群衆とラピス自身の両方からの合図を聞いて、彼女が十分に罰せられたかどうかを判断することにした。彼は打撃の力を弱めたが、ラピスの臀部と太もも上部の隅々までカバーすることを確実にした。この時点で、ラピスの王族の臀部の色は鮮やかな王室の青に深まっていた。レンクは彼女がじっとしようと奮闘しているのを感じ、彼女の腹の重みが支えのために彼の右手の指に押し付けられるのを感じた。彼女は勇敢に闘っていたが、火傷の残る影響は耐え難いものだったに違いない。

レンクは一瞬止まり、これが彼女の罪に対する公正な罰と見なされることを願った。あるいは少なくとも彼女に一息つく時間を与えるために。「ラピス王女、立ち上がって父親と向き合いなさい」

ラピスは従い、新たな涙が自由に溢れ、冷たい光を受けて輝いた。彼らの背後で、レンクは大人たちの声が何かを呟くのを聞いた。それが承認であることを願い、さらには数人の子供たちの声が感嘆の声を上げるのさえ聞こえた。メロウ王は目から手を下ろした。どうやら甘やかした幼い娘が苦しむ姿を見るのに苦労していたようだ。「非常に結構！ まあ、私は決して厳格な者ではなかったが、彼女の母親は君の仕事に非常に満足し、君にも非常に満足しただろうと思うぞ、若者よ！ これはメロウにとって喜ばしい日だ！」

ついに、期待に満ちたメロウの群衆は震える鬨の声を上げた。彼らの音楽的な声は水中で話すことに慣れているものだった。安堵の気持ちで、レンクはヘアブラシをラピスに返そうとしたが、彼女は彼の指を柄の周りに閉じさせた。「いいえ、馬鹿ね。もちろんあなたが持っていてよ。将来きっとまた必要になるわよ！」

ネヴィアはレンクが自分の顔に浮かべた困惑した表情を見ることができればよかった。「でも俺はもうヘアブラシを持ってるよ？」

ラピスは目を回し、それから彼の頬に軽くキスをし、彼らが石段を下りるときに右腕を彼の左腕に軽く巻き付けた。「じゃあ、私の感謝の印として持っていて。次に私をスパンキングしなければならなくなったときは、母のブラシを使ってほしいわ。もちろん、私が手に負えない場合は、あなたがヘアブラシと呼ぶあの不格好な棍棒を使っても構わないけど」

レンクは大人のメロウたちに背中を叩かれながら微笑み、なぜ十代のメロウの少女たちがあんなに馬鹿げた笑いをしているのか不思議に思った。「スパンキングする？ いつまた君をスパンキングしなきゃいけなくなるんだ？」

ラピスはくすくす笑い、レンクの腕を優しく握った。「そう言ってくれるのはとても優しいけど、私たち二人とも私が頑固なタイプだって分かってるでしょ！ でもあなたのために、できるだけお利口さんにすると約束するわ…しばらくはね！」

レンクは上の空でうなずき、混み合ったメロウたちの奇妙な激励の言葉やささやき声を聞きながら、ラピスの言うことを聞こうと奮闘した。

「よくやった、若者よ。我らの王女がついに自分を手懐けるのに十分な男を見つけたぞ！」

「まあ、彼はなんてハンサムなの。想像してみて！ 我らが小さなアヴァロンの王子様！」

愛らしい小さなメロウの少女が彼らの前でぴょんぴょん跳ねた。「私もいつかあなたみたいに勇敢なメロウの伴侶を見つけたいな、アヴァロン人！ 結婚したらたくさん子供を作るの？」

レンクは恥ずかしそうに笑った。「実は俺はニーベルンクなんだ。そういう他のことについてはあまり考えたことがないな。大人になって、いつか子供ができたらいいなとは思うけど。でもまずイゾルデ王女の使命を完了させなきゃ！」

瞬時に、群衆に静寂が広がった。レンクはラピスが自分の腕を握る力が再び強くなるのを感じたが、今回は彼女がとても強く握ったので腕がしびれた。彼女はゆっくりと彼の方を向いた。「イゾルデ王女？ 彼女を知ってるの？ 彼女との関係は？」

彼女はとても甘く微笑んだので、レンクは緊張した。二つの王国の間に自分が知らない緊張があるのだろうか？ レンクは自分がアヴァロンとメロウの慣習にあまりにも無知であることを願った。「彼女は俺に三つの精霊の石を集める重要な使命を授けたんだ。だからそもそもメロウ領を探していたんだ。アヴァロン全体の運命が俺の肩にかかっているんだ！」

「そしてそれが母の石を受け入れた唯一の理由なの？ 私からの贈り物として欲しくなかったの？」

ネヴィアは息を呑み、レンクの耳に飛ぼうとしたが、遅すぎた！

レンクはラピスの両肩を掴み、切迫して答えた。「違うよ、素晴らしい贈り物だった！ 永遠に感謝している。イゾルデ王女がマドック・ドラコメアが…何をしようとしているのかを阻止するのを助けたら、すぐに君のところに戻ってくるよ！」

これを聞いて、群衆は承認するようにうなずき、祝賀に戻ったようだった。彼らはレンクとラピスの前に飾り付けを吊るし、花をまき散らし始めていた。レンクはこれらの奇妙なメロウの慣習がラピスの救出を祝うためのものなのか疑問に思った。何か奇妙な祝日の準備のように見えた。

ラピス王女はうなずき、明らかに安心してから、レンクの頬にキスをした。「まあ、イゾルデ王女はよく知ってるわ。彼女は良い友人であり、知恵の模範よ。彼女が私にとってそんなに貴重なものを盗もうとするとは思えないわ！ …母の石があなたの使命に役立つことを願ってるわ…てへへ！」

レンクは輝き、ラピスをしっかりと抱きしめ、こんなに良い友人ができたことを喜んだ。ラピスは真っ赤に頬を染め、それから遊び心を持ってレンクを押しのけ、腕を組んだ。「みんなの前でそんなことしないで、間抜け！」

レンクはあまりにも激しくうなずいたので、ネヴィアは帽子の中で前後に跳ね返り、彼の注意を引くことができなかった。彼は滝、すなわちメロウ領への入り口を隠す滝に向かって走りながら、ラピスに手を振った。「分かった。バイバイ、ラピス！」

この別れはラピスが予想していたよりはるかに早かった。彼女のふりをした苛立ちは消えた。彼女は優雅な別れの手を上げてから、すべての虚飾を捨てて滝で彼を見送るためにレンクの後を追いかけた。「あまり長く待たせないでね！ 次の満月に結婚式を挙げるわよ！」

レンクは滝の前で立ち止まった。「式？ へえ。長くて退屈なやつじゃないといいけどな」

レンクの帽子の中で揺さぶられた後、ネヴィアはほとんど彼の耳に向かって飛び込んだ。すべてがとても速く進んでいた！「待って、レンク！ ねえ！ 聞いて！」

ラピスは首を振った。「いいえ。短くて甘くて…そして美しいわ！」

ネヴィアは一瞬止まった。彼女はラピスが優しくレンクの頬に手を置き、それから彼を荒っぽい半分抱擁、半分チョークホールドに引き寄せるのを見た。ネヴィアはラピスが先にレンクの抱擁を押しのけたことを償おうとしていることを瞬時に理解した。長く残る思い出を作ろうとしているのだ。

気づかずに、レンクは心からの抱擁を返した。ラピスの荒々しい握りは、彼の腕の中で溶けるように緩んだ。

ネヴィアは差し迫った警告が唇で死ぬのを感じた。どんな欠点があろうとも、ラピスはこの瞬間を持つに値した。ネヴィアは別の機会にレンクにこの知らせを伝えなければならなかった。

レンクは輝いた。「できるだけ早く君のところに戻ってくるよ、ラピス王女！」

［終わり］

ニーシャ、ついに報いを受ける
第一章：小悪魔と狼

レンクは何週間もの間、狼の姿に閉じ込められていた。その声は激しい唸り声だけに変わっていた。四つん這いで森を駆け抜ける間、彼の鋭くなった嗅覚と聴覚は想像以上の情報を捉えていた。彼は、魔法使いヴァン・サントの牢獄で目覚め、自分の運命を待っていた時、突如としてニーシャという名の小さな意地悪な小鬼によって解放されたことを思い出した。彼女は闇の魔法を操り、レンクの呪いについてからかうことを喜んでいるように見えた。

彼らが脱出する際の彼女の嘲るような言葉を覚えていた。「ずいぶんと獣らしくなったわね？はっ！ 心配しないで、あなたのいわゆる人間の友達みたいに見捨てたりしないから」レンクは一言も返せなかったが、その恥ずかしさと挫折感が心の中に湧き上がるのを感じた。

世界中に味方がいないレンクは、その日以来ニーシャの導きに従っていた。ニーシャは彼を田舎中を無駄足で連れ回し、その間ずっとからかい続けることを楽しんでいるようだった。「さあ、わんちゃん！ ハイヨー！」彼女は笑いながら彼の背中に座り、まるで自分の馬であるかのように彼の腿を叩いた。一度、彼が唸り声を上げて猛烈な速さで突進したとき、ニーシャは彼の背中から持ち上がった。彼女の座面が彼にぶつかって音を立てて着地するのを感じると、ニーシャはただ「おっ！」という驚きの声を漏らしただけだった。振り返ると、彼女はしっかりと彼の毛にしがみついており、傷ついた誇りの表情を浮かべていた。それは何週間もの間、レンクの唯一の小さな勝利だった。彼女が彼の腿を叩き、彼は彼女のそれを叩く方法を見つけた。たとえ手がなくても。

狼としての彼の本能は鋭かったが、人間とコミュニケーションが取れないことに喪失感を覚えずにはいられなかった。田舎での長い食料調達とキャッスル・ダウンの端を回る日々がついに実を結んだ。ニーシャはヴァン・サントの黒魔術を破ることができる魔法の刃についての噂を嗅ぎつけていた。

空気を嗅いでシャドウフェル、すなわちヴァン・サントの闇の魔法によって奴隷にされた哀れな魂たちから生み出された怪物を探知すると、彼はニーシャの闇の魔法のかすかな香りと、彼女の長い髪が魔法の内なる光で輝くかすかな擦れる音を聞くことができた。彼はニーシャが自分を解放する方法を見つけることに真剣なのか、それともただ自分の楽しみのために彼を弄んでいるだけなのか、疑問に思わずにはいられなかった。

彼らがついに目的地、霧に包まれた廃墟の石の神殿に到着したとき、ニーシャはついにレンクの呪いについて口を開いた。「それで、今は狼で不満なの？ うーん、もしかしたら助けられるかもしれないわね…でも、私に何の得があるのかしら？」レンクの心は、自分の不幸を楽しんでいるように見える者の慈悲に身を委ねるという考えに沈んだ。

彼女は彼の周囲の影から現れたり消えたりしながら、彼の前の地面から直接頭を出した。いや、地面そのものではなく、彼が地面に落とす影からだ。「どう思う、犬よ？ 私が魔法の小物を見つけるのを手伝って、また二本足で歩けるようにしてあげる。その代わりに、あなたは私が探している別の魔法の小物を見つけるのを手伝ってくれる？」

頭を下げて、レンクはただ吠えることしかできず、黙ってうなずくように首を振った。「約束する」と彼は思った。

浮遊の魔法と影を通り抜ける能力を持つニーシャは、彼のペースについていくのに十分な能力を持っていた。それにもかかわらず、彼女は彼の背中に腰を下ろし、彼の脇腹に鋭い蹴りを入れた。「さあ、のろま！ あなたは英雄のはずでしょ！」と彼女は嘲ったが、その残酷な言葉にもかかわらず、レンクは彼女が自分を必要な場所に導いていると感じていた。

ついに彼らは神殿の壁の中に到着した。それは遠い昔に忘れ去られた古代文明の廃墟だった。ニーシャは降りて、新たな敬意を込めてレンクを見た。「よくもまあ、汚いノミだらけの獣に

しては、悪くないわね」彼女は相変わらずからかいながらも、その声には本物の賞賛の色が混じっていた。

彼らは神殿を探し、ニーシャは罠や障害物に遭遇するたびにレンクに吠えかけ、レンクは歯と爪と生の力を使って廃墟を進み、ついに彼らが探していた聖なる木立、すなわち内陣にたどり着いた。石の台座の上には、蔓に覆われた古代の剣と思われるものが置かれていたが、レンクはそこからかすかな光が放たれているのを感じた。

鼻をそれに触れると、レンクは呪いが解けるのを感じた。彼は自分が人間の姿に戻っていくのを感じた。ニーシャは彼をじっと見つめ、その表情は読めなかった。

剣の柄を握り、それを石から軽く引き抜くと、レンクは彼女の方を向き、安堵と感謝の入り混じった気持ちを感じた。「ありがとう、ニーシャ。君なしではできなかった」

彼の感謝を無視して、ニーシャは輝く刃をじっと見つめた。「その剣はあなたを主人として認めたのね…」

少し愚かに感じながら、レンクは武器を見下ろした。彼はあまりにも簡単にそれを抜いたので、これが強力な遺物であるはずだということに気づかなかった。

顔を上げると、ニーシャは暗く装飾された水晶を彼の顔の前に掲げていた。「これはヴァン・サントがあなたにかけた邪悪な魔法の具現化よ。私たちの部族の影の魔法とは明らかに違うわ」

反射的に、レンクは空いている手を伸ばしてその水晶を取り、調べようとした。これが彼の苦しみの源なのか？

「気をつけて！」とニーシャは鋭く言い、まるで彼が瓶からお菓子を盗んでいるのを捕まえたかのように彼の手首の甲を叩いた。「もし触ったら、また獣に戻っちゃうわよ！」

見事な刃を鞘に収め、レンクは右手首の痛みを擦った。「これをどうすればいい？」

「これは危険すぎるわ。おそらくここに置いておくのが一番いいんじゃないかしら？
でも一方で…もし持っていたら、いつでも好きな時に獣に変身できるわよ」

レンクの耳がピクッと動いた。「もう二度と狼にはなりたくない！」

ニーシャはオレンジ色の目を細め、残念そうに言った。「ああ、そんなに小さな考えを持たないで。あの興奮を楽しめなかったなんて言わせないわよ。強さや速さを恋しく思わないの？ これがどれほど役に立つか分かるでしょう！」

レンクは反論の言葉、いや返答の言葉さえも見つけるのに苦労した。それができず、彼は沈黙を守った。彼は言う価値のあることがなければ話そうとしなかった。

自分が勝ったと感じて、ニーシャは水晶をまるで子供のおもちゃのように指先でバランスよく乗せた。「そうね、ヴァン・サントが親切にもこれを私たちにくれたのだから、感謝してできるだけ使いましょう！ もし必要なら、私を呼んで。私は目立たないようにしたいから、あなたが人間のときはあなたの影に隠れているけど、好きなときにいつでも変身させられるわ」

「好きなときっていうのは、俺が好きなときだろ」とレンクはついに冷たく言い返した。

「その通りよ！」とニーシャは笑いながら、言葉のない肩の動きで「私ったら、おバカさん！」と言っているかのようだった。しかしレンクは彼女の表情豊かな目が集中していることに気づいた。彼女はまさに言いたいことを言っていた。

それがニーシャのやり方だった。彼女の言葉、彼女の考え、彼女の視線。彼女はいつでも三つの異なることを同時に言っているかのようで、どれを意味しているのか分からないのは愚か者だった。「いつでも好きなときに狼になれるわ！ それに、このおかげで狼の姿に切り替えれば、いつでも私の影渡り魔法を使えるのよ」

彼女は影に滑り込み、彼の肩の後ろに再び現れた。「ねえ、でも聞いて、レンク…お願いがあるんだけど」

水晶を彼女の手の近くで空中に回転させ、その光が二人の目に反射するようにしながら、彼女はまるでお父さんに特別なおもちゃを買ってほしいと頼む子供のように彼を見上げた。「『黄昏の鏡』って呼ばれるものを見つけるのに一緒に来てくれない？ それはアヴァロンのどこかに隠された魔法の黒い鏡よ。そう、黄昏の鏡…ヴァン・サントに対抗するための最後の可能性よ」

レンクは彼女の視線に応えたが、水晶を視野の端に保っていた。それは彼が注意を払わなければならないほど近くにあったが、触れる危険があるほど近くではなかった。「それがさっき話してたものか？ 君の魔法の小物？」

彼女はウインクした。「賢い子ね！ 覚えてたの！ 狼のときも人間の記憶を保ってるなんて思わなかったわ。時々すごく鈍そうだったから、頭が緩んでるのかと思ってたわ。それともそれが普通なの？ でもそうよ、あなたは私の小さな小物を集めるのを手伝ってくれるのよ。もちろん、二度と狼に戻る心配をしたくないならね！」

レンクは激しい怒りの閃きを感じた。それは狼のとき、シャドウフェルに狩られたときに感じたものと全く同じだった。「脅す必要はない、ニーシャ。約束したんだ。君を助けると約束したし、その通りにする。俺は言葉に誠実な男だ」

ニーシャは彼から素早く後退し、彼女の小悪魔的な笑みは怖がった小さな少女のような表情に変わった。彼女は瞬きをし、髪を振り払って落ち着きを取り戻し、唸るように言った。「私は脅しなんてしないわ、狼少年。それは約束よ。同情で助けたわけじゃない。あなたが必要なのよ。そしてあなたは借りを返すのよ。それだけよ」

レンクは目を細めた。「君にとってはそれだけだったのか？ ただの手段だったのか？」

ニーシャの笑みは消え、彼女の目には一瞬の罪悪感がちらついた。「まあ、それだけじゃないかもね。あなたは…からかうのが結構面白かったわ」彼女は地面を見下ろした。レンクは自分が彼女に厳しすぎたのではないかと考えた。彼は手を伸ばして彼女の頭に置こうとした。彼が彼女から受けた助けについて感謝しようとしたちょうどその時、ニーシャは再び彼の影に滑り込んだ。「でも考え直すと、狼のときにからかうほうがずっと面白かったわ。今はポニーライドが欲しい気分ね！」

彼の首の後ろの毛が逆立った。左手を上げて剣の柄を握り、抜き始めた。ニーシャが彼の視野の端に現れ、水晶を彼の目に向けたその時――

彼の頭の後ろから日光がさんさんと輝いた。彼はそれに耐えるために目を強く閉じなければならなかったが、それでも世界は痛々しい赤い輝きだった。目を開けると、それは太陽ではないことが分かった。彼の背中に括り付けられた剣だった。聖なる光は薄れ、彼が下を見ると、攻撃者は彼の足元に横たわっていた。

レンクの表情は暗くなった。しかし彼がニーシャを見ると、何かが違うことに気づいた。彼女の肌がかすかに輝いており、その色が変わっていた。レンクはそれが正確に何が違うのかを理解するのに一瞬かかった。以前は白と黒だった。今は黒と白だ。それで同じじゃないか？ いや、もちろん違う！ 反転していたのだ。

「典型的ね！」と彼女は吐き捨てた。「防御魔法よ。あなたたちアヴァロン人はみんな同じね。魔術と影の魔法の微妙な違いを理解する気はないの！ 聖なる光で何もかも吹き飛ばすだけ！」

「怪我はしたか？」レンクは心配そうに尋ねた。

彼女は顔をしかめた。「もししてたら、あなたのせいよ、アヴァロン人！」彼女は輝く自分の体を調べ、それはゆっくりと元の色のパターンに戻った。「女神様に感謝。単純な防御魔法みたいね。もう元に戻ってきてるわ。そう言えば…」彼女は慌てて落とした水晶を探した。草の中からそれを掴み取ると、猫のような速さでレンクの方を向いた。「さあ、君を本当の姿に戻すために何ができるか見てみましょう、狼少年！」ニーシャは軽く空中に跳び、影の魔法で浮遊する準備をした。レンクが考える前に、彼はすでに剣を抜いて戦闘態勢に戻っていた。

しかしその時、最も奇妙なことが起こった。彼女は約一フィートほど空中に浮かび上がり、邪悪な勝利の表情を浮かべた。それが困惑した表情に変わった。永遠のように感じられる一瞬の間、彼女は空中に浮かび、それから前方に、うつ伏せに、神殿の廃墟の石床を覆う露に濡れた草と苔の上に倒れ込んだ。

バシッ！

その衝撃で実際に塵の雲が空中に立ち上った。それが晴れると、ニーシャはレンクの知らない言語で悪態をついたが、彼女の母国語であると認識した。「ムドラ！ 私の飛行？ 構わない、ただ…」彼女は地面に手を押し付け、それから狂ったように石と苔を叩き始めた。「ダメ！ ダメ、ダメ、ダメ！！！」

レンクは即座に理解した。かつて彼女を暗闇の中で気づかれずに動かせた影の魔法は、今は消え去っていた。彼女は石を叩いているのではない。彼女は闇に滑り込もうとしているのだ。

彼女は立ち上がって頭を振り、オレンジ色のポニーテールが顔に叩きつけられた。「私の髪！ 操れない！ アヴァよ呪われよ！ エシュもアハヴァもチャッヴァも金色の三角形に座ってしまえ！」

「永久的だと思うか？」レンクは慎重に尋ねた。これは幸運のように思えたが、一方で、このままではニーシャは彼にとってあまり助けにならない。

彼女は足を踏み鳴らし、髪を引っ張ったが、それは内なる輝きなしに生気なく揺れるだけだった。「私がどうして分かるのよ、バカ！ 私の魔法じゃないんだから！」

レンクが彼女に近づくと、彼は狼の姿に閉じ込められている間に彼女がからかい、蹴ったすべての時を思い出さずにはいられなかった。彼は彼女の前に立ち、目を彼女に固定して尋ねた。「さて、無力になるのがどんな気持ちか分かっただろう。俺を犬のように扱ったすべての時を覚えているか？」

ニーシャは鼻を鳴らし、目を回した。「あらやだ、まさかまたその話を持ち出すつもりじゃないわよね？ ちょっと楽しんでただけよ」

レンクは一歩近づきながら目を細めた。「楽しんで？ 俺を動物のように扱うのが楽しいと思ったのか？ 自分を守ることさえできないときに蹴ったりからかったりするのが？」

ニーシャは腕を組み、彼をにらみつけた。「馬鹿げてるわ。ただのゲームよ。それに、あなたはただの馬鹿な狼だったじゃない。何を期待したの？ 宮廷の礼儀？」

レンクは怒りが高まるのを感じたが、深呼吸して落ち着こうとした。「俺は君に敬意を持って接してほしいと期待したんだ。たとえあの姿に閉じ込められていても、俺は俺のままだと理解してほしかった。でも代わりに君は俺をおもちゃのように扱った。そして今、俺が自由になった今、君は自分にとって大切なものを失ったのが分かる。それは、他人に対する接し方を考えるべきだというサインかもしれない」

ニーシャはフンと息を吐き、顔をそらした。「あなたの説教なんて必要ないわ、英雄さん。そしてあなたの許しも必要ない。私は生き残るために必要なことをしただけよ。後悔はしてない」

レンクは首を振り、立ち去ろうとした。歩き去りながら、彼は悲しみの痛みを覚えずにはいられなかった。彼はニーシャが自分の行動が彼をどれほど傷つけたかを理解してくれることを望んでいたが、彼女は相変わらず頑固で利己的なままでいるようだった。歩き去りながら、彼は彼女に自分の過ちを気づかせるために何かできることがあるかと考えた。しかし今のところ、彼にできるのは彼女がいつか考えを改めることを願うだけだった。

＊＊＊

レンクはニーシャの前を歩きながら、心は重かった。会話のことでまだ考え込んでいた。彼女の行動によって彼らの友情が損なわれたことに悲しみを感じずにはいられなかった。まあ、「友情」という言葉が正しいかどうかは分からない。「関係？」「協力関係？」アヴァロン語にはこれが何であるかを表す言葉がないのかもしれない、とレンクは考えた。

歩きながら、オドラーン村での子供時代の記憶がよみがえってきた。彼は養父ラッセルに育てられていた。レンクは、他の子供たちに見せびらかすための悪戯でいくつかの壺を割ったとき、ラッセルがどのように罰したかを思い出した。罰は厳しかったが、レンクはその教訓を決して忘れなかった。「変だな」とレンクは思った。「なぜあのことを思い出したんだろう？」

歩いていると、ニーシャが彼についていくのに苦労している音が聞こえた。彼女はまだ影の魔法を失っており、彼のペースについていくのに苦労しているのは明らかだった。「信じられないわ、力もなくただの人間のようにここに閉じ込められてるなんて」と彼女は苦々しく愚痴った。

レンクは一息つくために立ち止まり、ニーシャはすぐに唸り声を上げて彼に吠えかかった。「すぐに私を運べと要求するわ！」

「君も他の皆と同じように自分の足で歩くことを覚えなきゃならない」

ニーシャは彼をにらみつけた。「言っておくけど、私は誰の命令も受けないのよ。特にあなたみたいなただの人間の命令はね」

レンクは彼女に目を回した。「分かった、好きにしろ。でももう君を運んだりしない。自分でついてこい」

ニーシャは腕を組み、ふくれっ面で動こうとしなかった。「歩くのは嫌よ。私にはふさわしくない」

「俺は君の犬じゃない」と彼はきっぱりと言った。「君は俺にもっと敬意を示す必要がある」

ニーシャは嘲った。「敬意？ あら、それでどうするつもりなの、英雄さん？ いたずらっ子みたいにスパンキングでもするの？ あなたは剣を持ったただの愚かな小さな男の子よ。あなたをそばに置いてあげてるだけでもありがたいと思いなさいよ」

レンクは血が沸騰するのを感じた。一緒にこれだけのことを経験した後で、どうして彼女がこんなに無礼でいられるのか？ 彼は何をすべきか分かっていた。

レンクの表情は固まった。「ニーシャ」と彼は厳しく言った。「君に教訓を教える時が来たと思う」

ニーシャは笑った。「私に教訓を教えるだって？ あなたは私の助けなしでは魚一匹釣れなかったくせに」

レンクは彼女を無視して、近くの切り株に座った。「こっちに来なさい」と彼は言い、彼女に近づくよう合図した。

ニーシャは躊躇したが、結局彼のところに歩いて行った。「このバカ、座っておしゃべりしたいのか。いいわ。付き合ってやる。彼がぺらぺらしゃべっている間に、髪から水晶を抜き出して――」

ためらわずに、彼はニーシャの腕を掴んで自分の膝の上に引き倒した。

ニーシャの目は驚きで見開かれ、彼が左手を上げて彼女の臀部に強く叩き下ろした。

バシッ！

ニーシャは完全な衝撃の状態で全身を硬直させた。実際にはそれほど痛くなかった。まあ、痛いのかどうかも分からなかった。彼女はただ、それが実際に起こったとは信じられなかった。「違う。彼が私をスパンキングしたなんて。そんなはずない！」

ニーシャがこの哲学的問題について考えている間、レンクは彼女の臀部に手を慎重に擦り付けた。それは驚くほど柔らかく触れた。ラッセルの妻ウルリケは、本格的にスパンキングを始める前に「相手が起きていて注意を払っていることを確認する」良い方法だと彼に教えていた。ニーシャが確かに起きていると判断して、レンクは手を引き、二発目の鋭い平手打ちを加えた。その音は神殿中にこだました。

ニーシャは、レンクの手が自分の臀部に与える痛みに驚いて息を呑んだ。彼女は頭を向けてレンクをにらみつけたが、彼はしっかりと彼女を見つめ、彼女が自分の状況を完全に理解するのを待っていた。

「な、なんてことを！」ニーシャは憤慨して叫び、立ち上がろうともがいた。

レンクは彼女の背中を押さえつけ、強い手で彼女をその場に固定した。ニーシャは彼が罰を与える準備をしているときに、彼の筋肉が緊張するのを感じた。

彼は二度彼女をスパンキングし、大きな弧を描く腕の動きで左右の頬を交互に叩いた。

レンクの手が彼女の臀部に下りると、ニーシャは息を呑んだ。その衝撃が彼女の全身に震えを走らせ、彼女は彼の手のひら全体と五本の指の痛みを感じた。彼女はその損傷を見ることはできなかったが、彼の大きな左手のほぼ完璧な跡が左臀部に残っていることを想像できた。彼女は歯を食いしばり、声を出さないように努めた。

レンクの手が再び彼女の臀部に下りた。先ほどほど強くはなかったが、それでも痛みは強まった。ニーシャは身をよじり、足を蹴って逃げようとしたが、レンクの握りは強すぎた。

「君は当然の罰を受けているんだ」とレンクは低く厳しい声できっぱりと言った。「君は俺に敬意を持って接することを学ぶ必要がある。あの剣に何らかの防御魔法がかかっていたのは俺のせいじゃない。君が俺を裏切ろうとしたときに、それを発動させたのは君自身だ」

ニーシャは唇を噛み、必死に反論をこらえた。彼の言葉は彼女の誇りを傷つけた。というのも、自分の中の一部が彼に同意していることに気づいたからだ。彼女はこの一時間ずっと自分自身に激怒していた。しかし代わりにレンクに激怒するほうが簡単だった。「それをスパンキングって言うの？ おばあちゃんみたいな叩き方ね」

「ありがとう」とレンクは答え、さらに四発の鋭く安定した一撃を加えた。「オドラーン村に知ってるおばあちゃんが何人かいるけど、それは最高の褒め言葉だ」

この冗談にニーシャは鼻を鳴らした。彼女は、強くて寡黙なタイプの彼が、足と同じくらい言葉も速いことに驚いた。最後の数発のスパンキングで自分の臀部が跳ねて揺れるのを感じて、彼女はくすくす笑った。これはそれほど悪くない、と彼女は思った。我慢できる。しかし別の考えが彼女を襲った。これはレンクが叩ける最大の力ではない。最初の四発の震えるような一撃の全力を十分に感じていたので、それはよく分かっていた。ではなぜ彼は今、手加減しているのか？ 彼の説教を聞かせるためか？ しかしそれなら…

ニーシャのくすくす笑いは喉で止まった。彼女は首を回し、レンクを新しい光の中で見ることができた。それは弱さから手加減しているのではない。それは…経験に裏打ちされていた。「この男がスパンキングしたのは私が最初の尻ではないのか？」とニーシャは恐怖の念を抱いて考えた。

安定したリズムを保ちながら、レンクはラッセルの賢明な言葉を思い出した。「棒を拾って腕を振り回すだけじゃ剣士にはなれないぞ、坊や。そこには芸術があるんだ。剣では、タイミング、正確さ…優雅さを学ばなければならない。それはダンスのようなものだ」

「剣術はスパンキングに似てるわね」とウルリケは彼らの稽古を見ながらからかった。レンクはその言葉の知恵を、スパンキングの受け手としても与える側としても学んでいた。ただ腕を無茶苦茶に上下に振るだけでは、良い結果は得られない。

左手を下に角度をつけて、レンクはニーシャの左頬の下部、太ももの上部と接する部分に強烈な一発を狙った。「座面」と呼ばれる場所だ。そこはほんの数発だけにしておく。彼はその部分を最後に取っておくのが好きだった。一種のとどめとして。その名が示す通り、それはニーシャの臀部の中で彼女が座る、いやむしろ座らないであろう部分だ。しかしまだだ、とレンクは思った。ただの警告だ。

レンクの手が彼女の座面に着地すると、ニーシャは胴体が前方にわずかに、一センチも満たないほど持ち上がるのを感じた。力を下向きにかけるのとは対照的に、レンクはこの最後の一発の低い角度を使ってペースを変えた。同じような響く力はなかったが、より広い表面積をカバーした。ニーシャは実際に手のひらと臀部の摩擦を感じた。かかれた後の刺痛のかゆみのように。そしてニーシャがその痛みがすぐには消えないのを感じる前に、レンクは彼女の右座面にまったく同じ二発目を加えた。

特に急ぐことなく、レンクは以前の柔らかいペースに戻り、ニーシャに自分の状況を考えさせた。彼女の思考が内面に向かうと、彼女は狼だったときにレンクをからかい、見下したすべての時を考えた。彼女は自分の行動が彼をどれほど傷つけたかを考えたことはなかった。今、彼の手が自分の臀部に痛みを与えるのを感じながら、彼女は自分が彼の腿を叩いて駆けさせたことを思い出した。

二発の平手打ちで、レンクは安定したリズムを保ちながら力を増し、どういうわけかリズムを崩さずに一瞬だけ彼の手が彼女の臀部にとどまることを可能にした。

ニーシャはその衝撃にひるんだが、自分が叫び出したい怒りの咆哮を抑えて、小さなうめき声しか漏らさなかった。彼女の臀部は数発の平手打ちで薄いピンク色になったが、レンクはそれでは教訓を教えるには十分でないことを知っていた。

「痛い！ レンク、痛いわ！」とニーシャは抗議し、彼の膝の上で身をよじった。

「よし、そういうものだ」とレンクは厳しく答え、スパンキングを続けた。

ニーシャは身をよじり抗議し続けたが、彼女の抵抗はレンクの適切に罰する決意をさらに強固にした。彼の手はより速いテンポで彼女の臀部に当たり、一打ごとに彼女の肌の色が一段と赤くなった。

ニーシャは強がった態度を維持しようと奮闘した。彼がより強い力でスパンキングし始めると、彼女が緊張するのが感じられたが、彼女はすぐに不快感を皮肉で隠そうとした。

「まあまあまあ。大英雄様が私をスパンキングしてるわね」とニーシャは嘲笑した。

レンクは歯を食いしばり、「低角度投げ」の一発を彼女の臀部の中央、ほぼ両頬を覆うように狙った。それから彼はより予測しにくいパターンに変えた。速い打撃、強い打撃、あちこちに小さな変化。レンクはかつてイリヤと踊った活気あるダンスのステップを思い出した。城下町からの来客が好むゆっくりとした予測可能なワルツとは対照的に。今、ニーシャは彼のダンスパートナーだった。彼の手と彼女の臀部は、まるで自分たちの鼓動に合わせて踊っているようだった。

彼がそれぞれのしっかりとした平手打ちを加えるたびに、ニーシャの嘲りはますます怒りに満ちていった。

「自分が偉くなったと思ってるんでしょ？」と彼女は吐き捨てた。「私がいなきゃここにいなかったのに。あなたは私に借りがあるのに、ただ腹いせに私を叩いてるだけよ！」

レンクは罰を一時停止し、厳しくニーシャを見た。「君に何も借りはない、ニーシャ。君を助けようと思ったのは、自分が君の奴隷だと思ったからじゃない。君が友達だと思ったから助けようと思ったんだ。でも君はまるで敵のように振る舞う。確かに君は呪いを解くのを手伝ってくれたかもしれない。でもだからといって俺を犬のように扱う権利があるわけじゃない」

ニーシャはフンと息を吐き、腕を組んだ。「分かったわ。この馬鹿げた罰をさっさと終わらせて、次に行きましょう」

レンクはうなずき、スパンキングを再開した。自分が行き過ぎたのではないかと考えながら。ニーシャは自分のことをあまり話さなかったが、長い週の間に彼女の言うことすべてを聞いており、彼女の誇りは疑いようがなかった。彼女は後に、いたずらな子供のようにスパンキングしたことで復讐を求めるかもしれない。しかし彼は狼の姿に閉じ込められている間にニーシャがからかい、蹴ったすべての時を思い出し、彼女が教訓を学ぶ必要があることを知っていた。

ニーシャはついに一打ごとに悲鳴を上げ始め、その音は実際に近くの鳥たちを木々のざわめく枝の中へパニックに陥れて飛び立たせた。彼女は再び身を起こそうとしたが、レンクは彼女をしっかりと固定し、彼の手の一撃一撃は前よりも強く当たった。
罰が進むにつれて、ニーシャの臀部は明るい赤色に変わり始め、彼女は痛みに顔をしかめ、シューという音を立てた。

「やめて、レンク！」とニーシャは声を震わせて叫んだ。

レンクは一瞬止まり、手はまだ彼女の熱く桜色の臀部に置かれていた。

「なぜこれをしているのか分かるか？」とレンクは厳しく尋ねた。

ニーシャはフンと息を吐き、うなずいた。「私が馬鹿だったからよ」と彼女は唸った。

レンクは満足してうなずき、ニーシャを立ち上がらせた。彼女は痛む臀部を擦り、その痛みにひるんだ。

「さて、君は小枝を見つけに行くんだ」とレンクは近くの木を指さして言った。「まだ終わってない」

ニーシャは凍りついた。彼が本気だなんてありえない！「レンク、やめて、私にこんなことできないわ！ 私は…」彼女は多くを明かす前に自分を止めた。「つまり。ごめんなさい？」ニーシャは感情で声を震わせようとわざと努力して懇願した。傷ついた子犬のふりを少しするくらい、悪くはないだろう？

レンクは一瞬止まり、厳しく彼女を見た。「君はまだ反省していない」と彼は言った。「さあ、自分の小枝を取ってきなさい。丈夫なものを選ぶんだ」

ニーシャはレンクをにらみつけたが、議論しないほうがいいと分かっていた。不承不承、彼女は近くの木立に向かって足を引きずりながら歩き、まだ激しく輝く赤い臀部を擦っていた。彼女は彼に熱い視線を送ったが、彼が彼女の視線に応えると、彼女の怒りは溶けるように消えた。

涙を瞬きで拭い、彼女は彼をほとんど、色っぽく見つめた？ それは狼の姿に閉じ込められている彼をからかっていたときに彼女が使っていたのと同じ表情だった。突然、ニーシャは顔をそらした。明らかに彼女は自分の臀部よりも涙に恥ずかしさを感じていた。レンクはその仕草が奇妙に可愛らしく感じられ、その考えの奇妙さに驚いた。

ニーシャが従順な兵士のように木々の中に消えていくのを見ながら、レンクは状況を振り返らずにはいられなかった。彼はニーシャが自分にした扱いを許したいとは思っていなかったが、彼女を置き去りにすることもできなかった。彼女は今や彼の旅の一部であり、彼はそれを最後までやり遂げる決意をしていた。同時に、彼は彼女に対して奇妙な敬意を抱いていることに気づいた。ある意味で、彼女が完全に酷い人間だったほうが簡単だっただろう。彼女の強さと賢さは、彼女のひどい言葉を一層辛辣なものにしていた。

彼は、ラッセルや他の親たちが時々オドラーン村の子供たちを罰するのを手伝ってほしいと頼んだことを思い出した。トゥロ、ムロ、ベス、そしてコナーさえも。彼らは皆、少なくとも一度は「レンク兄ちゃん」の膝の上にいる身を経験していた。特に記憶に残っている事件があった。トゥロが彼らを永遠の森へ導いたのだ。両親が彼らの不在を発見し、村中が捜索隊に加わったとき、森の中で泣いている迷子の子供たちを見つけたのはレンクだった。その後、無事に家に帰った後、彼らは別の理由で泣いていた。レンクが一人ずつスパンキングしてから、両親の帰りを待つために家に送り返したからだ。レンクがオドラーン村を去る日まで、オドラーンの両親たちは、いたずらな子供をレンクに罰せられると脅すことが完璧な行動を促す傾向にあることに気づいていた。

ラッセルは、スパンキングの目的は子供が良い人間に成長するのを助けることだと教えていた。適切なスパンキングには許しが必要だった。レンクは暗く考えた、ニーシャについては許しの部分に取り組まなければならないだろうと。

［第一章 終わり］

ニーシャ、ついに報いを受ける

第二章：王女と騎士

敏感になった臀部の痛みを無視しようとしながら、ニーシャは跳ね上がって、丈夫そうな枝を引っ張るのに十分な高さに届こうとした。彼女の魔法の髪の一振りで、鋭いパキッという音とともにそれを折った。「あの防御魔法の効果もようやく切れてきているはずだ」と彼女は思った。影に隠れることができるか試してみると、できないことが分かった。「もっと複雑な影の魔法には長く効果が続くに違いない」とニーシャは悟った。しかし彼女の髪があれば、奇襲攻撃には十分だろうか？ ニーシャは手に小枝を持ち、その重さと丈夫な樹皮を感じた。彼女はレンクが自分を傷つけることを恐れてはいなかったが、彼は確かにその能力を持っていた。彼を狼に変えることが、状況の主導権を奪還する最善のチャンスだった。「もしこの小さな懲戒処分が終わって、彼が私をここに置き去りにすると決めたらどうしよう？」と彼女は考えた。しかし違う、レンクは単純で心の優しいタイプだ。彼女は、おそらく彼女への約束を破るくらいなら死を選ぶであろう者に対して、陰謀を企てていたのだ。

ニーシャはある考えを思いついた。彼女は自分がレンクを恐れていないと言い聞かせたが、それは完全に真実だろうか？ 彼女はここ数週間、注意深く選んだヒントやからかいでレンクから真実を隠してきたように、自分自身にも嘘をついているのだろうか？ ある意味で、彼女はそんなに優しい魂を恐れることはできない。しかし、彼が自分を傷つけることを本当に恐れていないのだろうか？ 冷たいそよ風が、彼女の臀部にある手の形の赤い印の痛む温かさを撫でた。もし彼女が遠慮なく彼を攻撃したらどうなる？ 彼に打ち勝てるだろうか？ もし彼女が彼を追い詰めたらどうなる？ 彼は彼女に剣を向けるだろうか？ 彼女を殺すだろうか？ 彼女はちょっとしたスパンキングと誇りの傷を避けるためだけに、そのリスクを冒す覚悟があるだろうか？ あまりにも多くのことが危険にさらされており、レンクが想像できる以上のものだった。

結局、それは本当に彼女が戻って、スパンキングに直面し、自由な男として彼が自分を助けると信じるか、それとも彼女に都合がいいという理由だけで彼を隷属させようとするかの問題だった。

「私は臆病者じゃない」と彼女は声に出して言い、魔法の一振りで小枝から余計な小枝を切り落とした。

ニーシャは細い白樺の小枝を持って森から現れ、しぶしぶそれをレンクに手渡した。レンクはそれを注意深く調べ、自分の考えている罰に適した大きさと形であることを確認した。少し短いが、丈夫でしなやかだと彼は思った。「いい小枝を見つけたな、ニーシャ。これで十分だ」

彼はそれを空中に振り回し、手に馴染むか試した。ニーシャはその音に硬直し、あと何回この同じ「スーッ」という音とそれに続く鋭い「パチッ！」という音を聞くことになるか想像した。しかしレンクはすぐには罰を始めず、その瞬間を引き延ばした。
「ニーシャ」と彼は真剣な声で言った。「なぜあんな風に俺を扱ったんだ？ 呪われていて自分で話せなかったからか？」

ニーシャはうつむき、その顔は恥と怒りが入り混じっていた。「あなたには分からないわ、レンク。あなたは私にとってただの道具だったの。目的を達成するための手段よ。私はあなたを人間としては見ていなかったの。ただ私の民にかけられた呪いを解くのを助けてくれる方法として見ていただけ」

レンクの表情は暗くなった。「それは言い訳にならない、ニーシャ。君が俺を気にかけていなくても、敬意を持って接することはできたはずだ。犬みたいに蹴ったりからかったりする必要はなかった」

ニーシャは逆上した。「だって、あなたは技術的には犬だったんだから！」と彼女は抗議した。「それに、あなたが呪われた姿に閉じ込められている間、私があなたに役立たなかったわけじゃないでしょ」

レンクは首を振った。「それで許されるわけじゃない、ニーシャ。君は俺を傷つけた。それに対して責任を取る必要がある。ただ流して、それが問題じゃなかったかのように振る舞うことはできない」

ニーシャは顔をそらし、レンクの視線に応えられなかった。彼が正しいことは分かっていたが、それを認めたくなかった。彼女はいつも自分はタフで独立していると思っていた。謝って自分が間違っていたと認めるという考えは、誇りを傷つけるもののように感じられた。

しかし彼女がそこに立ち、レンクが白樺の小枝を持っているのを見ていると、彼女は別の何かを感じ始めた。後悔だ。それは自分の臀部に起ころうとしていることだけでなく、それを招いた自分がしたことに対してもだった。彼女は、自分が感じている痛みは、レンクが自分の蹴りから感じていたのと同じ種類の痛みであることに気づいた。

ついに、彼女は顔を上げてレンクを見た。「ごめんなさい、レンク」と彼女は小声でつぶやいた。「あんな風に扱ったのは間違ってたわ。残酷で不公平だった。後悔してる」

レンクはうなずいたが、小枝を下ろさなかった。「謝罪を受け入れるよ、ニーシャ。でもまだ終わっていないことがあると思う」

レンクが彼女に振り返るよう合図すると、ニーシャの目は驚きで見開かれた。「あの倒木が見えるか？」と彼は鋭く尋ねた。「あれにうつ伏せになりなさい。この小枝をちゃんと使うには、腕を十分に振る必要がある」

「これをやらなきゃダメなの？ 謝っただけじゃ足りないの？」と彼女は要求した。一時的な悲しみの感情は突然、以前の反抗心に取って代わられた。

レンクの表情は厳しかった。「謝っただけでは本当に反省したことにはならない。君は罰を受けるんだ、ニーシャ。それを乗り越える唯一の方法だ」

ニーシャは躊躇したが、彼が正しいことを知っていた。それでも、彼女は自分の運命に向かって行進しながら、反抗的に頭を回してふくれっ面をする必要性を感じた。彼女は運命を受け入れるが、好きになる必要はなかった。

彼女は慎重に丸太の上にうつ伏せになり、レンクが白樺を彼女の臀部に試しに当てるのを歯を食いしばって耐えた。ニーシャは、頭に比べて自分の臀部がどれほど高く空中にあるかを痛感していた。子供のようにレンクの膝の上にうつ伏せになることは、それ自体が恥ずかしかった。しかし、まだ痛む臀部を森の露天に女神への捧げ物のように突き出していると、ニーシャは別の感覚を覚えた。恥ずかしさだ。ニーシャが自分自身にこれほど恥ずかしさを感じたのは、そうだな、家を出てから以来だった。

レンクはついに白樺の最初の一撃を彼女の臀部に加えた。鋭くパチッという音とともに。
ニーシャは、小枝が手のひらよりも痛くて持続的な痛みを与えることを不満に思った。小枝が再び彼女の臀部に当たると、ニーシャは痛みの悲鳴を上げた。それはまるで細い線で彼女の臀部を切り裂くかのようで、レンクが罰を続ける間、彼女はじっとしているのに苦労した。

ニーシャは歯を食いしばり、泣かないように自分に言い聞かせた。彼女は涙をこらえることに夢中になりすぎて、三発目に不意を突かれた。悲鳴を上げて、彼女は手を後ろに回して臀部を庇った。頭を支えるものがなくなり、彼女は倒木の上にうつ伏せに倒れ、足は空中にぶら下がった。

レンクは次の一撃を間一髪で止めた。「じっとしてろ、ニーシャ」

「じっとしてるわ、じっとしてる！」とニーシャは叫んだが、自分がまったくじっとしてないことに気づいて、その声には欲求不満が混じっていた。落ち着いた姿の見事な絵だ！ 彼女は大人のように勇敢に罰を受けたいと切望していた。彼女はレンクに自分が震える子供ではなく、強い女性だと思ってほしかった。四発目の鋭い小枝の一撃で、その希望は消え去った。なぜなら彼女は実際に自分の皮膚にミミズ腫れができるのを感じ、小枝がゆっくりと皮膚から剥がれていくように感じたからだ。五発目の新鮮な一撃の後、彼女は自分の脚が制御不能に蹴っているのを感じた。

「足を下ろせ」とレンクが命じた。ニーシャは聞かず、右足を蹴り上げ、手を後ろに回して何かで自分の臀部と恐ろしい白樺の小枝の間にものを入れようとした。彼女は彼の手が優しく自分の足を臀部から引き離すのを感じた。それから彼は小枝を下ろした。彼女が予想した臀部ではなく、右足の裏に。彼女はこの出来事の展開に息を呑んだ。右足の裏にさらに二発の痛む一撃が加えられた後、彼女はそれを地面に置き、念のため左足を持ち上げて取り残されないようにした。

左足に一発目を加えた後、彼は止まった。「分かったな、もし足を蹴ったら、小枝の一撃を受けるかもしれない。もしまた言うことを聞かなければ、森に送って小枝を一束取ってこさせて、最初からやり直しだ」彼は左足に最後の二発を加え、しっかりと地面に置いた。「手も同じだ」と彼は付け加え、彼女の右手首を取って、手のひらに三発加えた。

なぜかニーシャはこの新たな窮地に新たな力で叫んでいる自分に気づいた。最近はあまりに注意が自分の臀部に集中していたため、他の部分の体はある意味存在しないかのようだった。レンクが彼女の右手を離すと、彼女はそれを引き離して息を吹きかけ、交差した三本の怒ったような赤い跡を冷やそうとした。冷たい空気は何もせず、ただ手のひらをひりつかせるだけだった。

予想通り、彼女はレンクが自分の左手のひらを掴むのを感じ、身構えた。以前よりも勇敢な態度を見せたいと思って。「ちょっとやそっとのスパンキングなんか怖くない」と彼女は猛烈に考え、レンクが左手のひらに三本の筋を加えた。

左手が解放されると、彼女は従順にそれを前に置き、小枝の届く範囲から遠ざけた。彼女は前後に少し踊り、足の裏と手で自分を支えようとしたが、どちらも自分の体重を支えるには痛みすぎることが分かった。しかし今は、それらを自分の臀部の前に置こうという誘惑はまったくなかった。「ごめんね、お尻さん。しばらくは自分でなんとかするしかないわ！」とニーシャはフンと息を吐いて思った。

レンクはニーシャに手と足で不快に動き回らせながら、自分の考えをまとめようとした。これはうまくいっていなかった。何か忘れていたのだろうか？ 彼はオドラーン村での経験を思い出そうとした。ムロは行儀が良かったが、レンクが彼を罰する稀な機会には、小さなムロは厳格なプロフェッショナルのように振る舞った。スパンキングは不快なことかもしれないが、ムロはそれを真剣な仕事として扱った。コナーも似ていた。とても行儀の良い子で、非常に敏感だったので、レンクは最初の一発を加えた後に罪悪感を感じた。この二人に関する彼の記憶は、今のところ役に立たないようだった。

一方、トゥロは問題児で、彼の両親はレンクに「雇い手」として頻繁に仕事を依頼していた。ニーシャのように、トゥロは強がって一歩も譲らない傾向があったが、少なくとも彼はじっとする方法を知っていた。ベスもニーシャを思い出させたが、別の意味で。いつも心はドラマクイーンだったベスは、スパンキングが始まる前から泣き叫び、レンクに手加減させるよう説得しようとした。レンクは最終的に、本物の涙を聞くまでベスのワニの涙を無視することを学んだ。ニーシャも同じ劇的な才能を持っていたが、ベスよりもはるかにタフだった。彼は既にニーシャを、オドラーンの子供たちの中でこれまでに罰した誰よりも厳しく罰していた。まあ、イリヤを除いては。レンクはその記憶に喉のつかえを飲み込んだ。

「良いスパンキングは涙で終わるべきよ」とウルリケはかつて、彼が受け手だったときに事もなげに言った。ベビーシッターであり「雇い手」として、レンクはウルリケの言葉の知恵を見出した。本当の涙は、メッセージが伝わった証拠だった。それらは偽装できなかった。たとえベスがスパンキングされるという方法演技のアプローチを持っていても。彼はニーシャから数滴の涙を一瞥したが、涙を隠すことに関する彼女の意志の力は信じられないものだった。レンクがその種の不屈の精神を見た唯一の時は…イリヤだった。

そう、優しく思いやりのあるイリヤでさえ、何年もの間、懲らしめが必要だった。実際、オドラーンでレンクを児童指導の「雇い手」にする伝統を始めたのはイリヤの父ボーだった。イリヤがオドラーンのヤギを訪ね、後ろの門を閉め忘れたとき、群れ全体が逃げ出した。必死の追い込みが終わった後、イリヤは自分の父に話す前にレンクに罪を告白した。彼が彼女にボーに真実を話すよう促すと、イリヤはレンクが一緒に来てくれるならそうすると約束した。予想通り、ボーは失望した。

しかしレンクの衝撃に、ボーはためらわずにイリヤを彼の前でスパンキングし、それからレンクがイリヤのスパンキングを仕上げる役目を担うべきだと提案した。イリヤが台無しにしたのはレンクの苦労だったからだ。レンクは最初は拒否した。イリヤのような友人を傷つけるという考えに恐怖したのだ。しかしイリヤは、どちらにしてももう一度お尻を叩かれるなら、レンクがやってくれたほうが罪悪感が少ないと主張した。彼女は非常に誠実に反省しているように見えたので、レンクは彼女を一人で二度目のスパンキングに直面させることを耐えられなかった。ボーは彼に、ヤギ飼いの技術を教えるのと同じ父親的な配慮で、イリヤをスパンキングするプロセスを指導した。そしてウルリケが教えた通り、レンクはイリヤを涙が出るまでスパンキングした。その後二週間、イリヤは毎朝一番にメッセージを強化するために追加のスパンキングのためにレンクのところに送られた。伝統が確立された。ボーは町中でレンクの「雇い手」としての腕前を宣伝した。レンクはその理由を決して理解しなかった。イリヤが誇らしげ

に、自分は父親のスパンキングで一度も泣いたことがないと認めるまでは。レンクがそれを達成した最初の人物だった。

レンクは何年にもわたってイリヤをスパンキングした記憶を飲み込んだ。イリヤとニーシャは、スパンキングされる運命を受け入れる方法において、確かに同じではなかった。イリヤは礼儀正しく、悔い改め、従順で、奇妙なほど協力的でさえあった。しかしそれでも、イリヤは簡単には泣かなかった。ニーシャにイリヤの「うつ伏せになって尊厳を持って運命を受け入れる」という考え方を採用させる方法があればいいのだが。

ニーシャのことを考えて、レンクの思考は現在に戻った。彼はニーシャのオレンジ色の目が自分を振り返っているのを一瞥した。彼はもう十分に待っていた。彼女に数分間、落ち着きを取り戻し、手と足の新しいミミズ腫れについて考えさせる時間を与えるのは良い考えだったが、良いスパンキングは決して退屈であってはならない。レンクはニーシャの好奇の視線に、知っているという笑みで応えた。見つめられているのに気づいて恥ずかしくなり、彼女は不機嫌そうに頭を前に戻した。レンクは特に難しいパズルを解いたように感じた。彼はニーシャがただスパンキングを受け入れてそこから学ぶだろうと期待していたが、彼女が最初に学ぶ必要があったのは、スパンキングから学ぶ方法だった。

「よし、ニーシャ、さっきで二度、命令に背いてもがいたな。手と足の調子はどうだ？」

ニーシャはフンと息を吐いて顔からオレンジ色の髪の一筋を吹き飛ばし、目を回した。「痛いわよ。手も痛い、足も痛い、お尻も痛い。何を期待して――」

バシッ！

ニーシャは狼の姿の時と同じくらい見事に叫び声を上げ、その叫びは最後にはうめき声に変わった。手を使うときと同じく、レンクは杖や白樺を使うには手首の正確なスナップが必要で

あることに気づいた。少しバリエーションがあっても悪くないが、杖の先端が標的に当たるように狙うことで、より力を集めて太いミミズ腫れを起こすことができる。剣を下から握るのと同じだ、とレンクはその効果を賞賛しながら思った。

「それからもう一つ、君の態度だ。反抗と無礼はこの状況で君の助けにはならないよ、ニーシャ。君はそれを勇気だと思っているかもしれないが、それはただの頑固さだ。ラバを見たことがあるか？」
ニーシャは意地悪な笑みを浮かべ、振り返った。「最近乗ったことがあるわ！」ニーシャの小悪魔的な表情は、悟りの表情に変わった。レンクは彼女の左側に移動し、風を切るバックハンドの一撃を狙い、杖の先端が彼女の右頬に正確に当たり、左側と完璧に一致するミミズ腫れを残した。

結局、ニーシャの賢い返しに対する唯一の返答は、白樺が真っ二つに折れるパキッという音だった。

レンクはそれを一瞬見つめ、それから肩をすくめて脇に投げ捨てた。「残念だ、まだ終わってなかったんだが。構わない、君は新しい小枝を取ってきなさい。そしてリアノンのヘアブラシで追加のスパンキングが待っていると考えておけ。今日のところはそれで十分伝わるはずだ」

パニックになって、ニーシャは丸太の上から慌てて飛び起き、レンクの方を向いて自分の臀部を隠した。「ずるいわ！ 私が蹴って最後の一本を折ったら新しい小枝を取りに行かせるって言っただけじゃない！」

「実際には、もしまた言うことを聞かなければ、小枝を一束取ってこさせると言ったんだ。思い出させてくれてありがとう」

「でも言うことを聞かなかったわけじゃない！ 小枝が折れたのは私のせいじゃない！」

レンクは強調して指を指し、ニーシャを黙らせる力強い視線を送った。「第一に、折れたのは俺が君を叩いたからだ。叩いたのは、君が態度について警告した直後に口答えしたからだ。意図的な反抗は不服従だ。第二に、従ったら追加のスパンキングがないとは言っていない。不服従だったら小枝の束を取りに行かせると言ったんだ。君が小枝での処罰の間にどう振る舞うかに関わらず、最初からヘアブラシを導入すると決めていた。第三に、スパンキングは子供のための罰だ。いたずらな子供が教訓を学んだときに終わる。それが君だ、ニーシャ。君はまだ何も学んでいない。わがままな子供も何人か知っているが、彼らは少なくとも膝の上にうつ伏せになったときに態度を改める賢さを持っていた。俺の膝であれ、彼らの親の膝であれ。君ほどスパンキングを受け入れられない奴を見たことがない。そんなに怖いのか？」

ニーシャは牙をむき出しにした。「私は何も怖くないわ。ましてやスパンキングなんて幼稚なものはなおさら」

「なら、その小枝を取ってくるのは何の問題もないはずだな？」

ニーシャは何かが喉に詰まったように感じた。彼女は口を開け、再び閉じてふくれっ面をした。くそっ！ なぜそれに対する返しが思いつかないんだ？ 彼女はこの田舎者を鼻先で導いているはずなのに。

「よろしい、ご主人様。あなたの小枝の束を取ってきましょう。そしてお望みなら、その全部を私の尻に叩き込んでください。でもあなたに泣き顔を見せるという満足は与えないわ」

「俺は君のご主人様じゃない、ニーシャ。味方だ。少なくとも、そうなりたいと思っている。これから何の満足も得ていない。誰も傷つけたくないんだ。君は俺を虐待した。君は俺を攻撃し、自ら呪いを招いた。そしてその欲求不満を俺にぶつけた。もし俺たちが友達――ああ、味方になるなら、お互いの間に理解が必要だ」

「つまり、私があなたの気に入らないことをしたら、お尻を叩かれるっていう理解？ なんて素晴らしいパートナーシップ！」

「君には魔法があるだろ？ 君を脅かすために使える水晶がある。それでいい。もし君がその水晶を悪用しないと信じられるなら、君も俺が二度と君をスパンキングしないと信じられる。しかし俺が君をスパンキングできるという事実、それが俺の魔法のタッチだ、ニーシャ」

魔法の話を聞いて、ニーシャは自分の髪のことを考えた。彼女は再び足で地面を突き、影に滑り込めるかどうか試した。運がない。彼女はレンクの顔が自分の足に集中しているのを一瞥した。「くそっ！ 彼に分かってるのか？」

ついにレンクの番だった。彼は彼女に知っているという笑みを送った。「まだ影に滑り込めないのか？ まあ、少なくとも髪の魔法は回復したようだ。小枝を持って戻ってきたときに内なる輝きが戻っていたぞ」

「まあ、罠を見つけるのには役立たずなくせに、相手のことになると何も見逃さないのね！ 剣士として…そして狼として役に立つんでしょ！」

「ありがとう、その通りだ。そして、何が起きるか分かっていながら戻ってきたという事実は、君が臆病者ではないことを意味する。いつでもその髪を使ってこれを止められたはずだ。なぜしなかった？」

ニーシャは下唇を噛んだ。「私…私はスパンキングが怖くないって言ったでしょ。そして…あなたが必要なのよ」

レンクは彼女の答えを空中に漂わせた。ニーシャはその不快感を感じた。「強くて寡黙なタイプの演技ね」

ニーシャはため息をついた。「小枝をもう少し切ってくるわ。…十本で十分？」レンクはうなずくだけだった。

せめて小さな勝利を得ようと必死に、ニーシャは髪の魔法を使って近くの木々から十本の丈夫な枝をひったくり、一瞬のうちに整えて差し出した。彼女はそれらをリボンで結ぶためのリボンがあればいいのにと思った。

レンクはそれぞれを順番に調べ、うなずいて承認した。それから彼は、なんと女性用のヘアリボンを自分の装備から取り出し、それらをきちんと束ねた。「おそらく田舎の可憐な花のような娘からの贈り物だろう」とニーシャは憤慨した。

レンクはついに石のような沈黙を破った。「ようやく前進したな。残っているのは、君に罰の受け方を練習させることだけだ」ニーシャは丸太に近づいて姿勢を取ろうとした。まだ痛む手と足で体重を支えようとした記憶がよみがえり、慎重に歩いた。

しかし彼女がその上にうつ伏せになる前に、レンクが彼女を止めた。「ただうつ伏せになるんじゃない。前回それをさせたのは間違いだった。君は丸太の上のこぶじゃない。その前に足をしっかりと置き、うつ伏せになって、手を丸太の上に置いて体を支えなさい」ニーシャは従っているふりをし、不快そうに足を動かし、樹皮の粗い表面の上にかろうじて手を浮かせた。ミミズ腫れが抗議して叫んでいた。

レンクの白樺の束が彼女の臀部の新しいミミズ腫れに優しく当たると、ニーシャの注意はレンクに戻った。

「それではダメだ。しっかりしなければならない。戦闘態勢を取ると思え」

「ミミズ腫れが…痛すぎるの…」

「痛すぎると思っているからだ。何をしてもミミズ腫れは痛い。その上で踊るのはおそらく悪化させている。姿勢に集中しろ。体全体に、痛む小さな部分じゃない」

ニーシャは従い、ミミズ腫れの痛みが一瞬走った後、確かにそれを乗り越えられることに気づいた。まるでレンクが一瞬、剣術を教えているかのようだった。ほとんど…威厳があった。

「さあ、頭を上げて、臀部を突き出せ」

ニーシャは顔をしかめた。「そして…消えた！」

「目は前だ。集中する点を見つけて、それに注意を保て」

ニーシャは鳥の巣を見つけ、怒りに満ちた目でそれに固定した。「馬鹿な鳥ども！」と彼女は思った。

「背中を少し反らせ。兵士だと思え：『銃を捧げよ！』」

「ううっ！ これがどうして役に立つの？」

答えとして、レンクは彼女に白樺を当てた。痛くはない程度に（まあ、ミミズ腫れはほんの少しの接触でも痛んだが！）しかし、ニーシャが自分の体が前方にわずかに揺れるのを感じるほどには強く。

「その動きを感じるか？ 君のお腹がその丸太に押し付けられていないから、白樺の衝撃が君を通り抜ける。君の目標はそれを受け入れることだが、同時にそれに抵抗することだ」

「子供の頃に頭をスパンキングされたことはないの？」とニーシャはからかい、また口を滑らせた自分を呪った。

レンクはくすくす笑った。「いいね。笑わせてくれたから、口答えに対する追加のスパンキングはなしにしておくよ」しかし彼は遊び心を持って白樺を彼女に叩きつけた。前の試し打ちよりほんの少しだけ強く。

「運を試すんじゃない、ニーシャ」と二人とも思った。

「剣術では、構えは強くなければならないが、柔軟でもなければならない。君は岩のようであり、川のようでなければならない。白樺を感じると、それは君を前に運ぶ。だから俺が君を再び丸太の上に倒れさせないように、それに抵抗する必要がある」

ニーシャは目を回してから、三発目を感じた。二発目よりほんの少し強かった。今回は、彼女は揺れる動きを感じて自分を支えた。そうすることで、彼女は自分の体重を白樺に押し付けるのを感じた。「自分でスパンキングを手伝わなきゃいけないみたいね」と彼女はつぶやいた。

レンクは四発目を加えた。今回は、いくらか痛みを感じるほど強かった。「その通りだ！」

「つまり、彼に聞こえたのか。あのとがった耳め！」とニーシャは思ったが、今回は黙っていた。

バシッ！

五発目はおそらく彼の全力の半分くらいだった。ニーシャは両頬のミミズ腫れがチクチクするのを感じて息を吸い込んだ。

「リラックスするのを忘れるな、ニーシャ。筋肉を長時間緊張させてはいられない。息を吸って。息を吐いて」

ニーシャは顔をしかめてから、息を吐いた。彼女は楽になった。

そして六発目で、彼女はそれが始まったことを知った。もはや手加減せず、レンクは剣士の力で打った。しかしニーシャは準備ができていた。彼女は自分の体が優雅に各打撃を受け入れ、奇妙なことに、一打ごとにそれが当たる前に精神的に受け入れられることに気づいた。しかし十二発目は彼女の不意を突き、前方に押し出され、肘で丸太に身を支えた。彼女は振り返り、これでまたスパンキングされるのではと恐怖した。彼女は何発目まで行ったのだろう？ しかしレンクは慈悲深く止まっていた。

「良くなった、ニーシャ。でも君はリズムを予測するのに頼っている。相手と一緒に動く必要がある」

「次は剣術を教えてくれるの？ できればお尻を叩き落とさないでほしいわね！」

「それは悪くないだろう。いや、剣の使い方を学ぶ部分は悪くない。相手のリズムを予測しようとするのは負け戦だ。自分自身と議論を終える頃には――」

バシッ！

不意打ちの一発！

「――相手にやられている！ 自分の体が何をしているかを考えないように。自然に動かせ。今は別のこと集中しろ」

「何に、あの木の上の鳥の巣？ それが集中するために選んだものよ」

「よし。今度は目を閉じろ。同じ鳥の巣を思い浮かべろ」

ニーシャは目を閉じて巣を思い浮かべた。鳥も含めて。しかし素早い白樺の一撃が彼女をそれから揺さぶった。「ちょっと！ 準備ができてなかった！」

「攻撃してくる敵に文句を言うのか？ 受け入れて、集中しろ」

バシッ！

ニーシャは反論を思いついた。相手が背を向けている間に尻を刺すというようなものだが、口を控えることにした。

バシッ！

彼女はようやく再び鳥の巣のイメージを思い浮かべた。レンクは悠長に構えているようだった。もう終わったのだろうか？

ビシッ！

鳥！ 鳥について何か！ 小さな突っつきどもめ！

ビシッ！ バシッ！

二発連続。レンクは自由形式のスタイルに戻っていた。

バシッ！

くそっ！ これを予測する方法はなかった。

バシッ！

鳥！ 巣の中の雛鳥！

ビシッ！

ニーシャは心の中に雛鳥をはっきりと見た。

バシッ！

そのイメージの上に、彼女は自分の体が白樺の衝撃が波のように広がるにつれて優雅に前に滑るのを見た。

パシッ！

彼女はいつもヨタカが飛び立つのを見るのが大好きだった。彼らの羽の揺れる動きを。

バシッ！

ニーシャの目はパッと開いた。最後の一撃で白樺のいくつかが彼女の上で折れるのを感じた。彼女が鳥の巣を見つめると、母親の鳥がそれに戻ってくるのが見えた。

ほぼ使い果たされた小枝の束を見て、レンクは口笛を吹いた。ニーシャがスパンキングを受ける技術をそんなに早く習得したことに感心した。彼女は罰を見事に受け入れていた。

「よくやった、ニーシャ。十本のうち生き残ったのは四本だけだ。今使う意味はないし、後で役立つかもしれない。約束通り、リアノンのヘアブラシで締めくくるぞ」

素早い仕草で、彼は荷物から頑丈な木製のヘアブラシを取り出した。ニーシャは振り返って、レンクがそれを左手に持ち、右手のひらに叩きつけるのを見た。彼女はそれが馬の彫刻で飾られていることに気づいた。どういうわけか、それはふさわしいと思えた。それはハンサムでありながら、シンプルだった。彼女の罰がまだ終わっていないこともふさわしいように思えた。彼女がようやく自分の状況を受け入れた今、以前のことはある意味で数に入らないように感じられた。ニーシャはきちんと罰されたいと思い、それをきちんと受け止めることができることも示したいと思った。

「レンク、お願い…もう一度膝の上にうつ伏せにさせてくれない？ 君の助けなしでは、もう長くじっとしていられそうにないわ」彼女は丸太から体を起こそうとし、ミミズ腫れが痛みを伴って伸びるのを感じた。見なくても、彼女の下臀部のほとんどに交差するミミズ腫れができているに違いないと分かった。

「勇敢に耐えたな、ニーシャ。少しはもがいたが、その場に留まった。でも今度は膝の上にうつ伏せにはしないと思う。俺の膝の上に乗せるつもりだ」

ニーシャは顔をしかめた。「それって同じことじゃないの？」

「少し違う。この姿勢のほうがヘアブラシを当てやすいんだ。説明するより見せたほうが早い」とレンクは言い、この分野での自分の経験を示す機会にかなり満足していた。彼は同じ丸太に座り、旅用の柔らかい毛布を自分の右側の丸太の上に敷いた。それから彼はニーシャを優しく持ち上げ、自分の右膝の上に彼女に向き合って座らせ、彼女の上半身が毛布の上に乗るように前に導いた。

ニーシャは自分の脚が広がるのを感じて顔を赤らめた。レンクの膝が彼女の下半身を支えていた。ニーシャは突然、丸太の上にうつ伏せになっていたときよりもさらに露出していると感じ、少なくとも自分の臀部がレンクに背を向けていることに女神たちに感謝した。繊細なバランスは彼女を完全に彼に依存させ、その場に留まらせた。しかし柔らかい毛布とレンクの厚いウールのズボンに押し付けられて、奇妙なほど快適でもあった。

レンクがリアノンのヘアブラシを左手で熟練した技で回しながら、巧みにそれを受け止め、ニーシャの痛む両頬に数回軽く叩きつけた。それらの優しい愛情のこもった軽打でさえ、ミミズ腫れを通して怒ったような刺痛を送るのに十分だった。まるで日焼けの後のような。

ついさっきまで、ニーシャは自分が当然の罰を受けていると考えていた。彼女は自分に降りかかるものを望んでいた。彼女は何か言わなければならないと感じていた。部分的には数秒の貴重な時間、攻撃を遅らせるため、そして部分的には何か自分の誇りを回復するために。

「手加減したら承知しないからね」と彼女はからかうような声の色を帯びて鋭く言った。「あなたがあの小枝を折る前に、私を赤ん坊みたいに泣かせるところだったわ。あんな風に叩き続けるのが良い考えだと思えないの？ あなたは明らかに懲罰官としての経験が足りないみたいね」

ニーシャはそう言いながら、自分の虚勢が薄れていくのを感じた。彼女は、この姿勢でレンクが頭上高くから垂直に打撃を狙えることに気づいた。彼女は突然、彼が同じようなスタイルの

一撃で剣を使ってモブリンの頭蓋骨を割るのを見た光景を思い浮かべた。さらに、彼女の脚が彼の太ももの両側にぶら下がっているため、以前のように臀部を緊張させることができなかった。あの奇妙なリラックス感が再び彼女を襲った。

「君は一瞬も恐怖を見せないな。それは認めるよ」とレンクは感心して言った。

これ以上時間を無駄にせず、彼はヘアブラシを彼女の右頬、太ももの上部と接する部分に鋭い「パチッ」という音とともに振り下ろした。ニーシャは「座面」が何か全く知らなかったが、レンクはこの地域に注意を戻す時が来たと判断していた。大団円のために。「完璧な位置に完璧なパドリングの罰を」とラッセルはかつて冗談を言った。

二発目はニーシャの左座面に着地した。刺痛は以前よりも強く、ニーシャはもはや無敵の臀部を持っているふりはできず、より大きな声で叫んだ。三発目の鈍い打撃は彼女の肉に深く沈み、下臀部の大部分を覆い、白樺からのいくつかのミミズ腫れをかすめた。これが小枝とどれほど異なるかという考えは、ミミズ腫れからの第二波の刺痛、まるで怒った抗議のようなものによって遮られた。

ニーシャは衝撃が臀部全体に広がるのを感じ、それに加えて通常は小枝だけが与える鋭い痛みも感じていた。レンクは確かに剣だけでなく達人だった。

ニーシャは白樺での処罰の間に完全に崩れ落ちるところまで来ていたので、ヘアブラシからの最終的な主張が望ましい効果を持つまでに時間はかからなかった。涙が戻ってきて、本能的にニーシャはまだそれと戦いたかった。

しかしなぜ？ なぜ彼女は涙と戦いたかったのか？ 自分が強いことを証明するため？ 彼女は自分が強いことを既に知っていた。しかし本当にそうだろうか？ 彼女はレンクを利用した。彼の

強さを自分の道具として使った。なぜなら心の奥底で、自分の大胆な態度だけでは十分でないことを知っていたからだ。

彼女の恥と後悔のすべてが心に湧き上がり、波のように涙となって溢れ出し、頬を伝った。三発目の痛む一撃で、彼女は目を強く閉じ、世界は暗闇に消えた。

ずっと彼女はただのふりをしていただけだった。彼女の「強さ」は嘘であり、彼女の恐怖を隠していた。レンクの強さの背後に隠れていた。しかし今、彼女はレンクから何も隠すものがなかった。すべてが彼の前で裸にされた。そして新しい痛みの波ごとに、彼女はこの男の強さを感じた。

人生で初めて、彼女は他人のために強いふりをする必要がないと感じた。そしてニーシャが自分の弱さを受け入れ、痛みを受け入れると、まるで彼女の肉体の炎がその弱さを焼き払っているかのようだった。

四発目のゆっくりとした意図的な一撃の後、レンクは徐々にペースを上げた。リアノンを歩かせてから速歩、駆け足、ギャロップへと乗り移るように。十発目のスパンキングで、レンクは「駆け足のテンポ」に達し、標的に均一な赤紫色の塗装を施すことに集中した。

この時点で、ニーシャがこれ以上数を数えることは不可能になった。当然の一打一打の痛みは次の一打に溶け込んだ。彼女の心の中で、すべては黒い虚空に消え、輝く星々によって突き刺された。彼女の臀部。哀れな、哀れな臀部！ 世界全体が存在しなくなった。それは黄昏の永遠の闇のようだった。

意志の力で、彼女は目を開け、世界全体が彼女の周りの星々で輝いているように見えた。彼女が暗闇の中で見たのと同じ星々だった。

ニーシャが自分の涙が滴り落ち、顔の下の草の上で輝くのを一瞥すると、彼女の心に奇妙な新しい感覚が満ちるのを感じた。安堵だ。それは自分が悪い小さな女の子であり、レンクがその行動に対して当然の罰を与えているという安堵だった。彼女は彼が自分のことを気にかけており、彼女がより良い人間になることを望んでいることを知っていた。

ニーシャは涙が戻ってくるのを感じて目を閉じたが、今回はそれと戦わなかった。彼女はそれらを歓迎した。そして長く震える泣き声とともに、彼女はすべての涙を出し尽くすまで泣いた。
「ごめんなさい、レンク」とニーシャは嗚咽し、その声はかすかなささやきだった。それから彼女は息を吸い、女王の命令口調で話した。「本当に、本当にごめんなさい！ あんな風にからかうべきじゃなかった。そんなに意地悪するつもりじゃなかったの。ただ…時々どう振る舞えばいいか分からないの…」

ブラシはレンクが頭上高く掲げると止まり、彼の目がニーシャの目と合った。彼女は自分の言葉を聞いて、まだ言い訳をしていることに気づき、痛みに顔をしかめた。

「違う、そうじゃない。ずっと自分があなたに残酷にしていることを知ってたわ。私は…それを楽しんでたの。私はただの甘やかされた、いたずらな小さな女の子よ！ 許してくれる？ 好きなだけスパンキングしていいわ！ お願い、お願い許して！」

レンクは罰を止め、ニーシャを起こして、彼女が泣く間抱きしめた。「大丈夫だ、ニーシャ」と彼はささやいた。「君は教訓を学んだ」彼は躊躇してから、必要な言葉を付け加えた。「許すよ」

ニーシャはレンクの許しに驚いたが、感謝もした。彼女は彼が恨みを持ち続け、自分がいつも彼に示した軽蔑で接し続けると予想していた。彼女は自分がもっと良くなり、レンクにとって

より良い友人になる必要があることを知っていた。そしてその気づきとともに、彼女は自分のやり方を変えると誓った。

「ありがとう、レンク」と彼女は涙を拭いながら言った。「これを忘れないわ。そして将来はもっと良く接することを約束する」

レンクはうなずき、その表情は柔らかくなった。「君が約束を守ると信じている、ニーシャ。君を信頼している。二度とああいうことをしなければならないとは思いたくない」

ニーシャは最後の言葉に興奮を感じた。彼女はその言葉の中に誠実さを感じたが、暗黙の意味も理解していた。「バカ」とニーシャは思ったが、声に出して言う勇気はなかった。

この失言に対して、ちょっとだけレンクをからかうのを我慢できないと決めて、彼女は彼の抱擁から押しのけて、反抗的に彼の目を見た。「つまり、もし必要なときはまたやるってことね。あなたがその可能性について考えたかどうか疑問だわ。これから私が一線を越えるたびにスパンキングするつもりなの？」

「いや、本当にそうしたいわけじゃない。何の喜びも感じない」とレンクはどもりながら言い、自分が言いたいことと反対のことを言ってしまったことに気づいて顔を赤らめた。

「本当にそうなの？ 少しも楽しんでないの？ 小枝やヘアブラシの件は？ あなたは本当にこれが上手いわね。いつか、ある農家の娘を幸せな妻にするでしょうね。そしてそのルーティンで少なくとも十人の子供たちを言い聞かせることができるわ…そしておそらくあなたの妻もね」と彼女は鋭い歯を意地悪な笑みで見せながら、喜びの声で言った。

「何？ 違う、妻じゃない。決して…つまり、それは子供のための罰だ」

「私が子供だって言うの？ あなたの目には私がそう見えるの？ 子供？ あの罰は子供にはかなり厳しかったわよ、狼少年。あれは大人の女性にふさわしい罰だと思うわ。可愛い農家の妻をスパンキングするのは、ちょっとくらい楽しめるって確信してるんじゃない？ もし彼女が頼んだら？」

レンクはごくりと飲み込んだ。彼は認めたくなかったが、ニーシャが子供ではないという考えは以前にも浮かんだことがあった。彼女の機知、言葉遣い。あるレベルで、彼は彼女が外見よりもずっと年上であることを常に感じていた。それが本当に彼の頭から抜けていたのだろうか？ それに、彼はそれを楽しんでいなかっただろうか？「俺は…誰も傷つけたくない。絶対に。君も、戦う相手も、誰も。そうでなければ…」

「必要なければ、だろ？」とニーシャが言い終えた。

「そうだ」とレンクは間抜けに答えた。彼は突然、ニーシャなしではこの使命をここまで進められなかったかもしれないことに気づいた。

ニーシャは首をかしげ、輝くような笑顔を見せた。「まあ、もし二度とやりたくないなら、私が気をつけて行儀よくするから、あなたはやらなくて済むわよ！」

咳払いをして、レンクは硬直して背筋を伸ばした。「ああ！ もしまた俺を犬のように扱ったら、また俺の膝の上に逆さまになることになるぞ！ でもそれは実際には問題になら――」ニーシャは命令的な手の動きで彼を黙らせた。

「それに、いつスパンキングが必要か決めるのはあなただけというのは、本当は公平じゃないわよね？」

「何を言ってるんだ？ 君が俺をスパンキングできるってのか？」

「あら、そんなことないわよ。あなたは無邪気な田舎の少年で、私みたいにいたずらになることなんて絶対にできないんだから」

「じゃあ、もし将来、君がスパンキングを受け入れるつもりがないなら、二度と君をスパンキングしないと約束する」

「あなたって本当に鈍いのね！ それも私が言いたかったことじゃないわ。もし私がスパンキングが必要だと思っていても、あなたがあまりに紳士的で私がその価値があると見なせなかったらどうするの？」

「じゃあ、もしそうなったら、俺はどうすればいいんだ？」

「心配しないで。もし私がスパンキングが必要だと思ったら、お願いするって約束するわ。考えてみて。何ヶ月も溜め込んで今回みたいにするより、さっとスパンキングを済ませたほうがずっといいでしょ？」

「そう…かもしれないな。待てよ、君はまたスパンキングしろって言ってるのか？」

「冗談でしょ？ 今の厳しい懲罰の後じゃ、一週間はあなたの背中に乗れないわよ。でももし将来いつでも私がスパンキングをお願いしたら、あなたがそれを与えるのが公平でしょ？ 今回はよりは少し軽めでいいけど、あなたは犯罪に合った罰を選ぶ才能があるみたいね」

「分かった、ニーシャ。あまりよく分からないけど、それは理にかなってる。もし君がスパンキングをお願いしたら、つまり本当に心からお願いしたら、君を言い聞かせるのに役立つなら、君にスパンキングをしてやってもいいと思う」

「ああ、よかった。もう二度とスパンキングされないんじゃないかと一瞬心配したわ。まあ、その約束は守ってもらうわよ、スパンキングの達人さん」

レンクはニーシャの要求を考えた。どういうわけか、この状況全体に何かおかしいところがあるように感じられた。まるでニーシャが女王であり、事もなげに使用人に命令を出しているが、その命令は彼にはあまり意味をなさないかのようだった。

「あ、そうだ、あなたは私を運ばなきゃダメよ。あの野蛮な殴打の後じゃ、ほとんど歩けないんだから」

「ああ！ もちろん、手伝おう」レンクは謝罪するようにお辞儀をし、ニーシャを抱き上げようと手を伸ばした。

「ああ、ちょっと待って、命令を受けるのをそんなに急がないで。あなたは子犬みたいね！ ちゃんとやらせて！ えへん！」ニーシャは咳払いをして一歩後退した。それから彼女はお辞儀をした。「高貴な騎士様、お嬢様を運んでいただけませんか？ あなたの最も寛大な指導の手と、叱正の杖と、ヘアブラシの見事な腕前が、お嬢様の臀部を最も懲らしめられ、痛くさせました」

片足で優雅に一回転し、ニーシャはくるりと回って優雅に身をかがめた。両手を膝に置き、背中をほんの少し反らせて、よくスパンキングされた臀部をレンクにハートの器のように差し出した。

初めて、レンクはこの一見子供じみた小鬼がどれほど大人であるかを突然悟った。「よろしい、お嬢様、お手伝いしましょう」

彼は左腕を彼女の腰の下に回し、優しく彼女を持ち上げて、彼女が両腕を彼の首に回し、下半身の重さを彼の腕で支えられるようにした。

ニーシャは彼のチュニックの布が自分の座面に押し付けられるのを感じて痛みに顔をしかめたが、レンクが謝罪する前に、彼女は優しく指を彼の唇に当てた。「さあさあ。自分の罰を思い出すのは私にとって良いことなのよ。過去を変えることはできない。ただそこから学ぶだけよ」

レンクは何も言うことができず、ただうなずいた。その頑固な強さは、ニーシャには愚かにも甘く思え始めていた。二人は新たな敬意と理解を持って旅を続けた。

ニーシャの影の力はその夜に戻った。「防御魔法の効果はあの神殿によって強化されていたのかもしれない。あるいはあなたの剣が私が反省していることを知って、謝罪を受け入れたのかもね」と彼女は声に出して考えた。彼女はレンクの抱擁から身を起こし、影の中にひらりと消えた。

レンクはニーシャに対して新たな敬意を感じていることに気づいた。彼女は文句を言わずに罰を受けた。

まあ、文句を言わなかったわけではなかったが、確かに彼女は勇敢にそれを受け止めた。そして自分の行動について謝罪さえした。彼は以前彼女を誤解していたことに気づき、彼女はただのからかい好きな小鬼以上の存在だった。

彼らがその夜の野営地を設営すると、ニーシャはレンクの隣に座り、星を見上げた。
「あなたの言ったことについて考えていたわ」と彼女は言った。「アヴァロンを救うために一緒に働く必要があるって。あなたの言う通りよ。私もそんなにわがままであるべきじゃない」

レンクは彼女に微笑んだ。「大丈夫だ。誰でも間違いは犯す」

ニーシャも微笑み返し、レンクは彼女がしかめっ面をしていないときはかなり可愛いことに気づいた。彼は彼女を新しい光の中で見始めていた。

「あなたを助けるためなら何でもするわ」とニーシャは言った。「約束する」

レンクはうなずき、安堵の感覚を覚えた。罰の後で彼らの間が気まずくなるのではと心配していたが、どうやら彼らは再び友達に戻ったようだった。

彼らが夜のために落ち着き、レンクが背中を高い草の上に横たえ、ニーシャの頭が彼の胸の上に枕として置かれたとき、ニーシャは自分が受けた罰について考えずにはいられなかった。それは恥ずかしくて痛かったが、目を覚ますきっかけでもあった。彼女はレンクの胸が自分の頭の下で上下するのを感じながら、自分がレンクを当然のように扱っていたこと、そして彼はもっと良い扱いを受けるに値することに気づいた。

彼女は将来彼にもっと敬意を持って接し、過去の行動を償うことを決意した。突然、レンクの手が彼女の痛む臀部の上に置かれ、彼女は衝撃を感じた。ニーシャは目を覚まし、彼に怒った視線を送ったが、レンクはぐっすりと眠っていびきをかいているだけだった。最初の痛みのひりつきが消えると、ニーシャはその温かい痺れが奇妙なほど心地よいことに気づいた。「バカ、自分の手が何を掴んでいるかも分かってないのね」

彼女は目を閉じて眠りに落ち、長い間感じていなかった平和と満足感を感じた。

［終わり］

レンク、ラケシスと出会う

ユー・メイ＆ゴジラ作

レンクが器笛で永遠の音楽の最後の音を奏で終えると、彼は光のプールから別の世界の奇妙な神殿へと足を踏み入れた。ここだった。元の旋律の古代の変奏を発見した後、レンクは自分の世界の時間の回廊を通り抜けるだけでなく、世界を越えて移動することを学んでいた。

運命の神殿は威圧的な建造物であり、男性と女性を象った彫刻が施された固体の大理石の柱によって支えられていた。まるで彼らがその建造物を支えるのに必死で苦しんでいるかのようだった。レンクは背筋に寒気が走るのを感じた。その様式はアヴァロンで見たものとはまったく異なっていた。それは古代のものであり、美しかったが、奇妙なほど冷たかった。彫刻の絶望的な顔は彼をまっすぐに見つめ、入らないように警告して叫んでいるように見えた。

レンクは古い短剣と古木の盾を抜き、神殿の中へと進んだ。彼が広大で空虚な回廊をさまよっていると、隅々まで怪物や罠を探したが、運命の神殿は不気味なほど空っぽだった。ついに、レンクは中央の部屋にたどり着いた。床は巨大な円形の平台だけで、それは曇った灰色の水から立ち上がる柱の上に置かれていた。平台の隣には重い破城槌もあり、鎖に吊るされており、部屋の反対側の大きな鐘に向けられていた。部屋の中央には、美しい女性の顔を象った巨大な像が床から天井まで伸びていた。

部屋の隅々を調べた後、レンクはレバーを見つけて引いた。瞬時に、柱は前方に揺れ、轟音とこだまを響かせて鐘に激突した。レンクは固まり、部屋の空気が周囲で静止するのを感じた。それから、鐘の音が遅くなり始めたが、静まることはなく、レンクはそれも不可能なほど凍りついているのを見た。レンクはアヴァロン王女から贈られた器笛から温かい輝きを感じ、即座に理解した。この場所は永遠の神殿と似た魔法に触れられていた。

レンクが器笛に手を伸ばすと、時間は再び流れ始め、鐘は再び振動して鳴り響いた。数分後、レンクは建築者の意図を解き明かした。部屋には二つの鐘があったが、柱は一つだけだった。この部屋はパズルであり、愚かな盗人や侵入者を防ぐための力と知恵の試練だった。二つの鐘があるなら、二つ目の鐘を鳴らす方法があるはずだ。

水中に飛び込み、レンクは中央の平台の下に錆びた回転台を見つけた。彼はそれを引っ張ったがびくともせず、息継ぎのために水面に浮上せざるを得なかった。

素早く、レンクは岸に泳ぎ戻り、サッチェルを掴んで以前の冒険からの装備を取り出した。

顔をしかめて、レンクは金の腕輪をはめ、その非人間的な力が自分の体に流れ込むのを感じた。彼は、イゾルデ王女が彼を過去に送り返し、失われた青春を取り戻す前に、自分が子供の体に閉じ込められていることを嘆いた。

レンクは水底に届くために重い鉄のブーツを履き、古代の機構を動かすのに苦労した。彼が水面から現れると、平台を回転させており、破城槌は今や二つ目の鐘に向けられていた。彼がレバーを引くと、二つ目の鐘がガンという音を立てて鳴り響き、レンクは時間が周囲で凍りつくにつれて再び奇妙な寒気が背筋を走るのを感じた。しかし再びそれは消え、鐘はその深く忘れがたい音を響かせ終えた。

レンクは拳を太ももに叩きつけた。彼が美しい無表情の女性の像を見ると、どういうわけか彼女は彼を嘲笑っているように見えた。彼女の顔はイゾルデ王女を思い出させたが、像の空虚な白い目にはイゾルデの優しさは微塵もなかった。

レンクとイゾルデ王女がマドック・ドラコメアとの戦いをかろうじて生き延び、邪悪の狂王が悪魔の獣マゴグに完全に取り憑かれる前に、イゾルデは彼に、切迫した必要がない限り器笛の力を使わないよう警告していた。しかしレンクはマゴグの最後の警告、復讐して戻ってくると

いう約束を覚えていた。レンクには選択肢がなかった。彼はマゴグを殺さなければならなかった。永遠に。

突然、レンクにひらめきが閃いた。二つ目の鐘に登り、レンクは全力でそれを鳴らした。空気が静止するのを感じた瞬間、レンクは器笛を掴み、最初の音を奏でて大鐘の音に合わせた。それから彼は古代の永遠の音楽を奏でた。彼が曲を終えた瞬間、鐘の音は消えた。それは自然に消えたのではなかった。部屋の中のすべての音が消え去った。

レンクは喜びの叫びを上げたかったが、自分が呼吸できないことに気づいた。まるで周囲の空気が厚く重くなったかのようだった。息が詰まりながら、レンクは破城槌を操作するレバーに急ごうとしたが、空中を泳いでいるように感じた。器笛が彼の脇で熱く燃えたが、レンクはそれを無視した。肺が空気を求めて叫び始めると、レンクはレバーに到達し、それを引いた。それから彼は再び器笛を吹き、世界は生命を取り戻した。破城槌は二つ目の鐘に激突し、両方の鐘が調和して鳴り響く中、レンクは耳を覆った。部屋の中央で、女性の像が割れ始めた。

レンクは息を切らし、自分の作業の結果を調べた。美しい女性の顔は今や傷つけられていた。彼がパズルの鍵を理解すると、レンクは微笑んだ。

＊＊＊

破城槌が女性の石の顔を打ち砕いた後、レンクは瓦礫の中を這い、像の背後にある隠された道に突入した。長い回廊は、高い天井の空っぽの部屋へと通じており、そこには三つの巨大な鏡が扉のように立っており、それぞれが変色した金と銀で装飾されていた。レンクはそれを、永遠の音楽の別の旋律を見つけた古代の書物の挿絵から認識した。そこにはアヴァロンの女神と同じくらい強力だが、民への愛や憐れみを持たない神々について記されていた。ここはラケシスの玉座だった。

レンクが中央の鏡に近づくと、自分の反射が見えたが、それは奇妙に霞んでおり、影に包まれていた。それから、レンクは羽ばたく音を聞き、顔を上げた。彼の上で、雪のように白い髪を持つ背の高い浅黒い肌の女性が急降下し、獲物を仕留めるために飛びかかる鷹のように動いたが、はるかにゆっくりと。

彼女が彼の前に軽く着地すると、レンクはひるんだ。彼女は細い帯で飾られたトーガをまとい、長く翻る鷲の羽根のマントを着ていた。彼女の兜は翼を広げた鷲を模して装飾されていた。女性は絹のような声で話した。それは彼女の喉からではなく、遠くから来ているように聞こえた。「私たちはあなたを待っていました、別の世界の子よ。私はラケシス、運命の姉妹のうち現在の女神です。」

ラケシスが彼に歩み寄ると、レンクは彼女の片方の乳房が完全に露出していることに気づき、ぎこちなく頭を下げた。女性は優雅に笑った。「侵入者にしては礼儀正しいのね。」

レンクはわずかに頭を上げて眉をひそめたが、彼が謝罪する前に、女性は手を挙げた。「いいえ、話さないで。あなたが来た理由はもう分かっているわ。ええ…ずっと前から知っているのよ。それはあなたの運命の織物に織り込まれている。あなたは憎むべき敵の終焉を求めている。」

女性は手を振り、炎と影の円盤が空中に具現化した。その深みの中で、レンクは男の顔を見分けることができた。苦痛と憎悪に歪み、虚空に向かって音もなく叫んでいた。沸き立つ黒い炎の背後で、男の顔は溶けてイノシシのような巨大な獣の姿に変形しているように見えた。

ラケシスは地獄の炎の輝きに浸った。「この男、マドック・ドラコメア…は今や邪悪の霊、悪魔マゴグに取り憑かれている。あなたは彼の体を牢獄に封じたが、その霊は破壊していない。あなたは彼の復活と、自分の世界の破滅を恐れている…だからあなたは時空を旅し、私と私の

姉妹だけが持つ力、すなわち運命の糸を紡ぐ力を求めている。私はあなたの心に刻まれた真実を見た。違うか？」

レンクは背筋を伸ばし、厳しく見えるよう自分に言い聞かせた。「その通りだ。」

ガラスに拳が打ち付けられる音がした。レンクは緊張し、剣を抜き始めて音源を探した。彼の左側に、二つ目の鏡が見えた。しかし自分の反射の背後に、ラケシスと同じくらい美しいが、黒檀のように黒い別の女性の恐ろしい顔があった。狂乱した女性は叫び、鏡の表面の背後に閉じ込められ、長い爪のついた手をそれに叩きつけていた。二番目の女性は唸り声を上げ、その声は低く喉から絞り出すようなものだった。「妹よ…小さき妹よ…私は渇いている！ なぜ私の言うことを聞かない？ 我らの聖なる神殿…我らの像が…冒涜された！ その責任者が今、あなたの前に立っている！ 彼を私に寄越せ！」

ラケシスは手を挙げ、二つ目の鏡の表面は曇った。「静かに、アトロポス！ 姉上をお許しください。彼女はかなり時代遅れなのです。彼女は過去に生きていると言ってもいいでしょう。彼女こそ、神であれ人間であれ、各人の生命の糸を測り、それを断ち切るのです。」

レンクは瞬いた。「それなら…彼女はマゴグが戻ってくるのを止めるのを助けてくれるのか？」

ラケシスは首を振り、叫んでいる男の沈黙の像に視線を向けた。炎が彼を飲み込み、再びイノシシの姿に変える前に。「あなたがこの生き物の死を、ただの小さな復讐の欲望から望んでいるのではないのが分かるわ。むしろ、あなたの民、あなたの世界に復讐を求めるのは彼の方だ。あなたの目的は高貴だ。しかし…」

ラケシスは身をかがめ、レンクの耳元でささやくかのようにして、彼の手首を掴んだ。「…たとえ私があなたの世界を破滅から救うことができたとしても、そうはしないだろう。なぜなら

それがあなたの運命だからだ。分かるだろう、運命の織物は変えられない。そして私はあなたの傲慢さを許すことはできない、小さな少年よ…」

レンクは女性の鉄のような握りから手を解放しようとしたが、彼女は彼を見下していた。空いた手で、ラケシスは指を広げ、きらめく薄絹のような糸が空中に織り込まれ、純粋な光の形を形成した。最後の閃光とともに、高い玉座が部屋の中央に現れた。少年を後ろに引きずりながら、ラケシスは玉座に向かって歩き、腰かけた。「…だから、私の像を壊したことで、あなたを厳しく罰しなければならない…」

そう言って、彼女はレンクを持ち上げ、自分の膝の上にうつ伏せにした。臀部を上にして。それから彼女は彼のチュニックのスカートをめくり上げ、白い半ズボンを乱暴に引き下ろし、彼の青白い裸の臀部を露わにした。レンクは冷たい空気が背後からくすぐるのを感じて息を呑んだ。彼は肩越しに振り返り、ラケシスの無表情な顔が彼女の腕を高く掲げるのを見た。「…よくあるいたずらな小さな男の子にふさわしい、裸のお尻のスパンキングでね！」

ラケシスは手を振り下ろし、彼女の手のひらがレンクの下臀部に当たって響くパチッという音を立て、両方の頬のかなりの部分を覆った。レンクは叫び声を上げ、アマゾンの女性の握りから必死に逃れようともがいたが、無駄だった。

ラケシスは安定したリズムでスパンキングを始めた。まるで過ぎ去る一秒一秒を数えるかのように。一、二、三、四、五、六、七…

スパンキングが始まったばかりだと気づくと、レンクの驚きの悲鳴はゆっくりと絶望の叫びに変わった。彼は蹴ろうとしたが、下着が膝に引っかかった。

スパンキングを止めずに、ラケシスは母親のような口調で説教を始めた。「アトロポスの過去の知識のおかげで、私はあなたの世界でのあなたの悪行をすべて知っているわ。陶器を壊す、人の家に押し入る、縁日でカンニング…」

ラケシスはゆっくりと柔らかく微笑み、いつもの無表情を破り、旋律的に笑った。「…そして鶏をからかう？ まあまあ、あなたはかなりいたずらな小さな男の子ね、違う？」

レンクの苦痛に満ちた叫び声は、耳障りな金切り声に掻き消された。鏡の背後で、アトロポスは爪をガラスの表面に擦り付けた。「違う、愚か者！ 彼を私に寄越せ！ 彼の血が欲しい！」

ラケシスはため息をつき、わずかに首を振った。「姉上、あなたは必要以上に残酷ですよ。結局彼はただの小さな少年です！」

アトロポスは鏡の表面に頭をぶつけた。「小さな少年は皆、大人になる！ そして私の神殿を汚した者は誰であれ、命は奪われる！」

ついに、ラケシスの微笑みは消え、彼女は姉に向き直った。「遅すぎたわ、姉上！ あなたには過去において彼を主張するチャンスがあった。しかし私は現在の女神よ。この少年は今や私のものだ！ そして私はスパンキングで十分だと言っているの――」

努力して、レンクはラケシスの膝の上から体を持ち上げ、床に転がった。不意を突かれて、ラケシスはほとんど少女らしい悲鳴を上げた。レンクは出口に向かって全力疾走しようとしたが、足がもつれた。再び立ち上がろうともがきながら、レンクは臀部を押さえながらドアに向かって足を引きずった。彼は歩くのがやっとで、走ることはもちろんできなかった。

しかめ面をして、ラケシスは立ち上がり、レンクの後を歩いて追いかけた。「あらあら、そうはさせないわよ。あなたはこれから受けるスパンキングから逃げられない」

ラケシスはレンクの襟の後ろを掴み、彼をくるりと回して自分に向き合わせ、低くかがんで彼の目を見た。「見てごらん、酔っ払いのように自分の足につまずいている。あなたは臆病者なの？」

顔中に涙が流れる中、レンクは首を振り、解放されようともがいた。「ち、違う…怖くなんかない――」

ラケシスは彼の臀部に鋭いパチッという一発を加えるために手を回した。「嘘つき！ もちろん怖いわね。怖がるべきよ。自分の姿を見てごらん、愚かな、裸のお尻のガキが、自分の運命から逃げようとしている…」

レンクは見下ろし、自分の下着がブーツに絡まっているのを見た。彼はそれを引き上げようと手を伸ばしたが、ラケシスはすぐに彼の臀部を叩き、彼の手を掴んで荒々しく頭の後ろに引き上げ、降伏の姿勢を強制した。「…もう抵抗は無用よ！ あなたはいたずらでわがままな小さな男の子で、英雄のふりをして遊んでいた。しかしそれはもう終わりだ。これからは、すべての悪い男の子がそうされるべき方法で扱われるのよ…」

ゆっくりと、ラケシスはレンクの腕への拘束を解き、彼の腰を支えた。「長くて激しいスパンキングで、あなたが当然受けるべきようにね。」

強調のために、彼女は彼のチュニックの座面に数回遊び心のある軽打を加えた。瞬時に、レンクは手を下ろし、彼女の拘束を破ろうとしたが、金色の腕輪の魔法が火花を散らすのを感じたにもかかわらず、彼女の握りは破れなかった。

首を振りながら、ラケシスはレンクを腰で抱え上げた。「恥ずかしいわ。そのために、あなたが行儀よく振る舞い、自分の運命に服従することを学ぶまで、このスパンキングをもっと厳しくしなければならないわ。」

レンクは空中で足をバタバタさせ、まるで走って逃げようとするかのようだった。「やめてえ…」

少年を抱える力を調整し、ラケシスは彼を腕の下に挟み、スカートをめくり上げて彼の裸の臀部を露わにした。そこには既にまだらな赤い手形が覆っていた。「ああ、そうよ、子供よ。あなたはたくさんの魔法の宝物を持っているのが分かるわ。時間の川を泳ぐことを可能にする音楽。十人の男の力をもたらす腕輪。しかしそれらのどれもあなたを真の男にはしない。」

ラケシスは再びスパンキングを始めたが、今回は一打一打に全力を込めた。最初の一発が決まった瞬間、レンクは周囲の世界で時間が這うように遅くなるのを感じた。まるで彼の体が氷の中で凍りついたかのようだった。それは、ラケシスの手のひらが彼のうつ伏せで無防備な臀部に押し付けられた場所で感じた灼熱の痛みとは鮮明な対照をなしていた。ぼんやりと、レンクは自分の無力な臀部を救う何かを考えようとしたが、すべての思考が消え去った。

新しい平手打ちごとに、凍りついた時間の瞬間は、まさに衝撃の瞬間に、その長さが二倍になるようだった。十発目のスパンキングの後、レンクは凍りついた瞬間がおそらく十秒間も引き延ばされてから、時間が再び動き始めるのを感じた。疲れ果てて、レンクはだらりとぶら下がり、息を切らした。

ラケシスはレンクの裸の臀部にあまり優しくない愛情のこもった軽打を数回加えた。それは刺すような刺痛を燃え上がらせるのに十分以上だった。「さあ、いい子になってじっとするつもりか、それともこの無駄な抵抗を続けるつもりか？」

レンクは後ろで足を蹴った。「やあああ！」

ラケシスは全力で別の一発を加えた。レンクは叫ぼうとしたが、空気が肺の中で石のように固まるのを感じた。今度は、凍りついた時間の瞬間は数分間も続いたに違いない。レンクは臀部全体に刺痛が走るのを感じた。まるで千本の針が一度に一本ずつ彼に刺さり、抜かれ、彼の臀部の新しい場所を何度も何度も突くかのようだった。ついに、それは終わった。

数瞬待ってから、ラケシスはレンクの革のブーツの一つを掴み、それを引き抜いた。「もう一度言うわ。勇敢になる準備はできた？」

レンクは泣き言を言い、涙と鼻水が鼻を伝って滴り落ちた。「お、お願い…」

「お願い、何？」

レンクは必死に空気を吸い込み、その声は震え始めた。「お願い…いい子になるから」

ラケシスは彼の臀部を優しく撫で、スカートを下ろした。「そうこなくちゃ。さあ、立ちなさい、小さな男よ」

レンクは鼻をすすりながら立ち上がらせられ、自分のブーツの片方がなくなっていることに気づいて不均等にその場でふらついた。彼は自分の下着が裸足にぶら下がっているのを見た。ラケシスは彼の足をしっかりと指さした。「もう片方のブーツも脱ぎなさい」

レンクはその場で跳ねながら足からそれを引き抜こうとした。ついに、彼は恥ずかしそうに振り返り、座らざるを得なかった。彼は裸の臀部が硬く冷たい石に押し付けられるのを感じて痛みに顔をしかめたが、ようやく二つ目のブーツを脱ぐことができた。下着に気づいて、彼はそ

れに手を伸ばし、引き上げ始めたが、背後でラケシスが鋭く舌打ちするのを聞いた。「チッチッ。その奇妙な腰布は必要ないわ。きちんと折りたたんで、私に手渡しなさい」

真っ赤に顔を染めて、レンクは立ち上がり、おとなしく白い半ズボンを差し出した。ラケシスはそれを受け取り、下着を自分のベルトに結び付けた。「さあ、武器をすべて、一つずつ取り出して、私の前の床にきれいに一列に並べなさい」

鼻をすすりながら、レンクは腕の後ろで鼻を拭き、サッチェルを開けた。慎重に、彼はすべての武器を取り出した。古いパチンコ。ブーメラン。大人サイズの弓と矢筒。

ラケシスはレンクがサッチェルを空にするまで注意深く見守った。「腕輪もね…そしてもちろん、剣と盾も」

涙をこらえながら、レンクは従った。

ラケシスは両腕を広げ、武器のコレクションを示した。「これら…おもちゃ。いくつかはあなたの年齢の少年には大きすぎるわ…そうね、分かってきたわ。あなたは過去の自分の思いを携えている。かつてあなたは時間の回廊を下り、今より七歳年上の男として世界を歩んだ。」

レンクはただうなずいた。ラケシスはレンクの剣を手に取り、手首の一振りで、それは煙となって消え去った。レンクの装備の残りも同様に。ブーツだけが残された。「それから、あなたは自分の時間に送り返され、失われた青春が取り戻された…しかしあなたは時間の川の別の道で自分に起こったすべてをまだ覚えている。すべての闘い、痛み、戦士としての人生…あなたは今もなお、それらすべてを携えている。」

レンクはうつむいた。ラケシスは手を伸ばし、彼の帽子の上から頭を軽く叩いた。「哀れな、可哀想な子よ。しかしそれらのどれも、あるべきことを変えるものではない。かつてあなたは

男であり、勇敢な英雄だった。しかし今は子供の生活に戻らなければならない…なんと屈辱的なことか。」

レンクの視界はぼやけ、彼は静かに泣いたが、どんなに激しく目を拭っても、新しい涙が自由に頬を伝い落ち続けた。ラケシスはひざまずき、彼の手を顔から引き離し、手首の後ろを優しく叩いた。「よしよし。今は涙の時ではない。すぐに泣く時間はたっぷりあるわ、すべての涙を出し尽くすまでね。しかしその前に…あなたにはまだスパンキングが待っている」

レンクは泣き言を言ったが、ラケシスは彼の鼻の下で指を振った。「ダメよ！ そんな泣き言はなしよ、若者。さあ、あの汚いブーツを拾って、玉座の間の正面入り口のそばの見えないところに置きなさい。それから、あなたのいたずらな小さなお尻をまっすぐここに戻して、私がもう一度スパンキングできるようにしなさい」

深く息を吸って、レンクはかがんでブーツを拾った。ラケシスは顎に手を当てた。「実際のところ、これからはそのお尻をちゃんと裸のままにしておきましょう。それがあなたに自分の立場を思い出させるのに役立つはずよ、坊や」

ラケシスが指を振ると、レンクは自分のスカートが魔法で後ろに舞い上がり、真っ赤な臀部が露わになるのを感じた。レンクは焦げて痛む座面を見つめ、涙目で女性を見上げ、唇を震わせた。しかしラケシスは沈黙と落ち着きを保った。ついに、レンクは頭を下げ、出口に向かって重い足取りで歩いた。彼が廊下に達すると、トンネルの終わりに光が見えた。自由があった、すぐそこに。

レンクは勇敢でありたいと思った。しかしそれはもはや何を意味するのだろうか？ ゆっくりと、彼は廊下にブーツを置き、玉座の間に再び現れた。ラケシスは微笑み、玉座に座り、彼を手招きした。「いい子ね。勇敢な子ね。ママのところにおいで！」

息を整え、レンクは頭を高く保とうとしたが、女神に近づくにつれて震えを止められなかった。彼は彼女の前で立ち止まり、彼女が自分を掴んで再び恐ろしい膝の上に強制するのを待った。ラケシスは自分の裸の太ももを叩いた。「おいで。お尻を上にして」

レンクは椅子の右側に登り、彼女の太ももの上に這って横たわった。すぐに、彼女は左手を彼の腰の小さな部分に置き、右手を高く掲げた。

彼女はゆっくりと安定したペースでスパンキングを始めた。数秒に一度、毎回新しい場所を狙ってレンクの露わな臀部と太ももの隅々まで怒ったような赤い跡で覆った。レンクは各平手打ちの新しい痛みを感じ、歯を食いしばって泣かずに耐えようとした。少なくとも、戦士としての誇りは保つことができた。ラケシスは神秘的に微笑み、スパンキングを止めた。「教えてごらん、なぜ私の神殿があなたにとってそれほど簡単に通り抜けられたのか、考えたことはある？ なぜ見回りの衛兵も、武装した罠もなかったと思う？」

レンクが息を切らし、目がぱちぱちと開き、まつげに新しい涙が浮かぶのを感じた。「あなたは俺がここに来ることを望んでいたのか？」

ラケシスは笑った。その声はほとんど音楽的だった。それから彼女は再びスパンキングを始めた。以前よりも強く、速く、レンクの臀部の色を均一な、怒ったような血の赤に均した。「その通りよ。私はあなたがここに来ることを予見し、あなたを待つ恐ろしい運命も予見していた。あなたも見ての通り、私たちは共通の運命を持っている。いたずらな行いの罰として、あなたを永遠にスパンキングするのが私の務めなのよ。」

レンクは長く響く鬨の声を上げた。「そんなの嫌だああ！」

「あら、イエスイエスイエス！」 努力して、ラケシスは次の三発のスパンキングに全力を込め、痛みを伴う言葉それぞれを強調した。「恐れることはないわ、子供よ、あなたは死なない

から。この神殿には時間が存在しないのよ。栄養も必要ない。だから私は永遠にあなたをスパンキングし続けることができる。それがまさに私の意図するところよ。」それから彼女は機敏で容赦ないリズムに戻り、過ぎ去る一秒ごとに一発を加えた。

レンクは足を蹴ったが、次の一発はあまりに強い力で決まり、彼は驚いて跳ね上がり、長く震える泣き声を上げた。

鏡の背後から、アトロポスは隠しもせぬ脅威をもって進行を見守っていた。「まあ、あの愚か者に対しては寛大すぎると思うけどね」

ラケシスは鼻を鳴らした。「まあまあ、姉上。生きている者に慈悲を示すのは私の権利よ。そして何しろ…彼はただの小さな少年ですから。」

痛みと屈辱に圧倒されて、レンクはまるで子供のように自由に泣き始めた。しかし彼の泣き声はすぐに、響く各スパンキングの安定した音と、ラケシスの美しい笑い声に掻き消された。

［終わり］

レンクのヒールフォールでの冒険

第一章：捕縛

ユー・メイ＆ゴジラ作

リアノンは、霧に包まれたタオルミナの森をレンクを乗せて進みながら、頭をうなだれた。行方不明の友人ネヴィアを見つけるためのレンクの長い旅は、彼らを時間と現実の法則が神秘的に作用する奇妙な領域へと導いていた。しかしタオルミナの人々を救出した後でも、レンクは自分の目標に近づいたとは感じられなかった。イゾルデが彼を失われた子供の体に戻して以来、レンクは場違いな感覚を抱いていた。いや、場違いではない。時代違いだ。

霧が晴れ、レンクとリアノンは開けた風景、起伏のある丘と野原、集落が点在し、煙を吐く煙突のある数軒の小屋の中に現れた。煙が多すぎる。それからレンクは、一団の男たちが、素朴な農民の服装をして、馬に乗った鎧の人物から逃げているのを見つけた。その人物は非武装の男たちに襲いかかろうとしていた。

レンクはリアノンを駆け足に促し、古木の盾を掴みながら、神秘的な騎士の突進の進路を遮るように曲がった。

騎士はためらわなかったが、レンクは盾を突き出して、来る槍をかすめるように叩きのけ、その軌道を逸らした。騎士の軍馬は嘶き、戸惑いながら横に逸れた。騎士は手綱を引き、レンクに向き直った。「農奴め！ よくも女王陛下の騎士に――」

レンクはベルトからパチンコを引き抜き、火花の種を騎士に向けて発射した。種が騎士の面頬に当たった瞬間、それは光の爆発とともに炸裂した。騎士は金切り声を上げ、驚いた軍馬から後ろ向きに落ちた。

農民の一人が騒ぎに足を止めた。「あの少年…女王の騎士と戦ってるのか？」

レンクは馬を降り、剣を抜いた。「お前たちの戦闘員はどこだ？」

農民は瞬きをし、逃げていた農奴のさらに数人が立ち止まって好奇にレンクを見た。「戦闘…員？ でも、戦闘員なんていませんよ？ 騎士になれるのは女だけです。」

男たちの服装はレンクの目には奇妙で、粗末な麻袋地の薄いショールだった。

騎士はうめき声を上げ、兜を引き上げると、繊細な顔と長い髪が現れた。レンクは目を細め、剣をその女の喉に向けた。レンクがガルーダ族の戦士女たちに捕らえられたとき、彼は剣を携え鎧を着た女たちを見た。一人はドレッドノートの重い鉄の鎧を着ていた。しかしガルーダ砂漠の頑丈で日焼けした女たちとは異なり、この女は奇妙なほど青白かった。

農民の一人がうめいた。「ああ、なんてことだ。あの少年が女に手を出した？ これで我々は皆、確実に終わりだ！」

＊＊＊

レンクは騎士を武装解除し、尋問した。レンクはヒールフォールの領域に入っていた。名もなき村とその住民はすべて、シャーロット王女の王室領だった。反乱の噂が一人の騎士を村に連れてきた。そこで彼女は、いわゆる「男性の権利」について演説している嫌な男を見つけた。もちろん、ヒールフォールでは男性には権利がなかった。なぜならすべての男性は、母親と妻の自然的で神聖な権威に従うものだったからだ。そこで騎士は、数人の男性農民を馬で追い散らして異端を鎮圧し、帰宅するつもりだった。

最終的に、レンクはその女騎士を解放するよう提案した。彼は村の男たちが反対し、おそらく女の首を杭に掲げるよう要求するだろうと予想していたが、男たちは女を逃がすことに熱心す

ぎるように見えた。ある者は地面に顔を伏せて、女に慈悲を乞うたが、彼女は笑いながら馬に乗った。「犬ども！ 愚かな男ども、この頑固さを後悔することになるぞ！」

ほとんどの男たちは絶望の叫び声を上げ始めたが、レンクを助けるために立ち止まった農民が彼を脇に連れて行った。「あなたくらいの年で、あんな勇気を見せた少年は見たことがない…それに、女王の騎士を倒した男も、年齢を問わず見たことがありません。」

農民たちは、女王の騎士を激怒させた男性の権利に関する公開演説を行った人物、チャップマン卿をレンクに紹介した。

貴族階級の最下位に位置する小男爵として、チャップマン卿は男性戦線の熱心な支持者だった。これは非暴力的な手段による母権的抑圧からの男性解放に献身する平和主義団体だった。

レンクはチャップマン卿の館、丘の上（またはモット）の頂上にある小さな石造りの建造物を訪れるよう招待され、周囲の堡塁を見渡した。レンクは興味を持ってチャップマン卿の話を聞き、ついに手を挙げて質問した。「しかし、女王を打倒しなければ、どうやって自由になれるのですか？」

チャップマン卿はやや神経質に窓の外を見た。「私たちのような弱い人間が？ 女性と戦う？ 誰もが知っている、女性は体力において男性をはるかに凌駕していることを。」

レンクは疑問そうな顔をした。ついに、チャップマン卿はハンカチで額を拭き、続けた。「それに、私たちは皆、女王に忠誠を誓っている。我らが愛する女王が、男性としての正当な不満を聞けば、きっと私に謁見を許し、男性の権利を訴える機会を与えてくれるだろう。しかし私たちは、自己防衛に必要な以上の殺戮を厳格に拒否している。しかしお気づきのように…私の国の男たちは暴力には向いていないのだ。」

レンクは顎に手を当てた。「では、学ぶべきでしょう。」

＊＊＊

数週間が経過した。レンクは藁の案山子を使って農民たちに剣術を教えようとしたが、彼らは女性に似たものに剣を使うという考えに完全に恐怖していた。結局、レンクは斥候と弓術を教えることにした。しかし、男たちは皆、戦闘で女性と対峙するという考えにまだ恐怖していたが、チャップマン卿は女王の要塞へ向かう補給車列を襲撃するというレンクの提案を受け入れた。幸い、これらの車列を率いる男たちはすぐに降伏し、運搬していたものをすべて引き渡すことに熱心すぎるようだった。食料、武器、鎧、織物、すべて周辺の村からの十分の一税と税金を表していた。すぐに、チャップマン卿の村は正規軍が望むものをすべて備えるようになった。

一ヶ月が経過し、レンクは目覚めて木造の砦の壁を散歩し、堡塁で働く男たちを見渡した。鍛冶屋のハンマーが鳴り響き、増え続ける志願民兵の集団が朝の弓術練習に集まっていた。レンクは微笑んだ。ついに、この地の平和的な男たちが戦争の技術を学んだようだった。

戦闘ラッパの轟音が響いた。レンクは木造の胸壁の上から見渡し、一隊の兵士が堡塁の壁に近づいているのを見た。三人の騎士が隊列の先頭を進んでいた。集団の中央の騎士は黒い鎧をまとい、見事な白い牝馬に乗っていた。他の兵士たちを見下ろすようにそびえ立ち、黒い騎士は長く翻る旗を掲げた戦旗を掲げていた。騎士たちの隊長は兜を脱ぎ、鮮血のように赤い髪の滝を現した。「臆病な男ども！ お前たちの略奪が見過ごされると思ったのか？」

チャップマン卿の顔は青ざめた。「なんてことだ！ アレクサンドラ将軍だ！」

長身の女は旗を立て、重い槍を掲げた。「チャップマン卿！ お前の領地と称号は没収だ。門を開け、シャーロット王女の慈悲に服従せよ。お前が彼女の足に接吻すれば、我らが輝く王女がお前の命を救うかもしれない！」

農民の一人が、震えながら隊列を凝視した。「あの三人の女はみんな騎士なのか？」

レンクは兵士の数を数えて微笑み、民兵たちに向かって叫んだ。「そうだ…おい、みんな！ たったの十五人だ。そのうち騎士は三人だけだ！ 何でもない！」

民兵たちは皆、怯えた鹿の群れのようにレンクを見上げて固まった。「シャーロット王女が十五人の女を送った？ それに三人の騎士？」それから、彼らは一斉に武器を落とし、小さな女の子のように叫びながら走り回り、互いにぶつかり合い、泥の上で滑った。「あああ！ 三人の女騎士がいる！ 俺たちは皆死ぬ！」

「それ以上に最悪だ！ もし生きて捕まったら、シャーロット王女の地下牢に閉じ込められ、奴隷と屈辱の人生を宣告される！」

「ママ！ ごめん、ママ！」

農民の一人が門に向かって突進した。「中に入れてくれ！ 今降伏すれば、叩かれるだけで済むかもしれない！ お願いだ、アレクサンドラ将軍！ 慈悲を！ 俺はこの反乱とは何の関係もない！」

チャップマン卿はレンクの肩を掴んだ。「レンク、希望はない！ 私たちのような弱く、哀れで、臆病な男が、こんな圧倒的な不利に何ができる？ 女というものは、男が言い争いを始めると狂ってしまうものだ、君も知っているだろう！」

取り乱した農民は門を押し開け、木製の跳ね橋を制御する車輪を掴んだ。ゆっくりと、ロープが橋を堀の対岸に向かって下ろし始めた。

アレクサンドラ将軍は馬を劇的に後ろ足で立ち上がらせ、それから跳ね橋の真下、開いた門に向かって歩かせた。「チャップマン卿？ 降りてきなさい、小さな領主よ。お前と言葉がある。」

レンクはチャップマン卿を振り払った。「この男たちは役立たずだ！ しかし君が彼らの唯一の希望だ。逃げなければならない、チャップマン卿。そしてより多くの男たちを君の大義に集めるんだ。」

「しかし…十八人の女だ！ 多すぎる！」

彼らの下で、農民は橋を下ろすために車輪を回しながら泣き叫んだ。「お許しください、ご主人様！ 私はいい子になります！」

レンクは弓を引き、矢をつがえた。「なら逃げろ、チャップマン卿。そしてまた戦うために生き延びろ！」

レンクは跳ね橋を支えるロープの一つに矢を放った。ロープが真っ二つに切れると、跳ね橋は空中でねじれ、二本目のロープが張ってがちゃりと止まった。彼らの下で、臆病な農民は車輪が急に動いて後ろ向きに倒れた。アレクサンドラ将軍の馬は嘶き、彼女が手綱を引いて落ち着かせようとした。しかしレンクは別の矢を放ち、最後の残ったロープを断ち切った。跳ね橋がドスンと落ちると、馬はパニックに陥った。アレクサンドラ将軍は馬が暴れ始めると鞍にしっかりとしがみついた。「うわああ！」

レンクは他の騎士の一人が命令を叫ぶのを聞き、女性歩兵の一人がクロスボウを構えるのを見た。訓練された正確さで、レンクは弓を引き、矢を放ち、クロスボウ自体を狙った。女性は悲鳴を上げ、レンクの矢が彼女の武器に深く突き刺さると後ろ向きに倒れ、彼女が引き金を引くと、ボルトは金属的なパキッという音で詰まった。

アレクサンドラ将軍は馬の手綱をしっかりと握り、振り返って木造の壁の上のレンクを指さした。「あの少年を捕まえろ！」

レンクは壁に沿って北へ走り、石造りのモットに近づき、自分の臀部を叩いた。「やーい、やーい！」

レンクはクロスボウのボルトが自分の頭皮をかすめ、帽子をかすめるのを避けて身をかがめた。

下で、アレクサンドラ将軍は軍事指揮官の声で叫んだ。「やめろ！ 撃つな！」

レンクは盲目的に走り、後ろを振り返った。壁の外では、歩兵の半数が彼を追跡していたが、三人の騎士は他のグループから離れ、馬を城内に突入させていた。農民たちは恐怖の叫び声を上げ、馬が荷車や食料の籠をなぎ倒していった。

残りの隊列は、剣とクロスボウを構えた騎馬騎士たちを徒歩で追った。

アレクサンドラ将軍はグループの先頭に立った。「若者よ、今すぐそこから降りてきなさい！」

レンクは、モットの頂上にある石造りの塔の基部で道が突然終わり、村の最後の防衛線に達したところで立ち止まった。レンクは振り返り、チャップマン卿の姿はなかった。彼は、凶猛で

恐ろしい女性たちがまだ困惑している間に、忠実な追随者たちと共に逃げる分別を持っていたことを願うばかりだった。

アレクサンドラ将軍はレンクの下で立ち止まり、女性たちに合図して壁からぶら下がる綱はしごを登るよう命じた。「無駄だ、少年。逃げ場所はない。」

レンクは電光石火の速さで短剣を抜き、足元のロープの一本を切り、それからさりげなく剣を振って背中で鞘に収めた。彼の下で、歩兵の一人が悲鳴を上げ、一本残ったロープにしがみついた。レンクは石壁の側面に沿って生えたツタを見つけ、登り始めた。

咆哮とともに、他の騎馬騎士の一人が槍を突き出し、それを石造りの砦の基部の木製の扉に深く突き刺した。それから彼女はそれを引き抜き、背後にいる歩兵たちに吠えかけた。「彼を追え！ お前たち四人、破城槌になるものを見つけろ！」

レンクは二本のクロスボウのボルトが石造りの塔を上下で削る音を聞き、塔の頂上に到達する前に痛みに顔をしかめた。レンクは胸壁の後ろに転がり込み、息を切らしてから、石の上から一瞬のぞき見を試みた。彼の下で、アレクサンドラ将軍の兵士たちが豚の餌桶を見つけ、それを木製の扉に叩きつけているのに気づいたが、ほとんど効果はなかった。アレクサンドラ将軍が馬を降りると、彼らは緊張した。彼女の重い鉄のブーツが足を踏み鳴らすと土埃が舞い上がった。他の騎馬騎士たちでさえ、その巨大な女が彼ら全員をにらみつけると緊張した様子だった。「愚か者ども！ 木はそれには強すぎる。バールを見つけろ。鉄の棒だ。蝶番でこじ開けられるものなら何でも。」

レンクは火花の種の袋を掴み、壁の上にまき散らした。それらは壁で跳ね返り、転がり落ち、下の道に当たると、各種が目もくらむような光の閃光とともに爆発した。二人の騎馬騎士の馬は激怒した騎手と共に暴走し、歩兵たちは身を隠すために伏せた。混乱の中で、アレクサンド

ラ将軍は毅然として立ち、口を固く結んだ。ついに、彼女はブーツを上げ、頑丈なオークの扉を蹴り倒した。「もういい。」

＊＊＊

チャップマン卿の武器庫で、レンクは周囲を調べた。塔には螺旋階段が一つしかなく、アレクサンドラ将軍の隊列が今まさにそれを登っているに違いなかった。レンクは盗まれたワインの樽を見つけた（つまり、勇敢な臆病者たちの一団が正当な所有者に返すために奪い返す前に、シャーロット王女の徴税官によって盗まれたものだ）。樽を横倒しにして転がし、レンクはそれを階段の端まで押し、転がり落とした。

＊＊＊

女性歩兵たちが階段を登っていると、ドンドンという音が聞こえ、固まった。それから、最初の歩兵がワイン樽が跳ねながら自分に向かってくるのを聞いて悲鳴を上げ、仰向けに倒され、樽は何事もなかったかのように次の二人の女の上を転がった。一人は壁に体を寄せる機転を利かせたが、樽が彼女の足にドスンと落ちた。彼女は片足で跳ね、痛みで悲鳴を上げ、足を滑らせて尻餅をついた。

アレクサンドラ将軍は石段をドシドシと登り、前方からの騒動を聞くために立ち止まった。身を固くして、彼女は槍を握りしめ、武装した戦士と対峙することを予想した。すると、樽が転がって見え、三人の歩兵も一緒に現れた。素早く、アレクサンドラは槍の柄を急角度で石段に突き刺した。樽は鉄の棒にぶつかり、金属に波紋を広げるほどの力で、すべての兵士がそれに激突して止まったが、アレクサンドラは腕を震わせながら槍をしっかりと支えた。それから彼女は拳で樽を叩き壊し、ワインを足元に血のように溢れさせた。

＊＊＊

レンクは扉を閉め、バリケードを築いた。周囲を調べると、レンクは完全な板金鎧の一式、剣、槍、クロスボウ、男性の軍隊にふさわしいあらゆる武器を見た。しかしそれらはすべて彼には大きすぎた。彼は閉じ込められていた。窓の外を見ると、レンクは壁を下りられるかと考えたが、塔の基部から歩兵がクロスボウを自分に直接向けているのが見えた。

レンクはクロスボウのボルトが開いた窓を撃ち抜く前に、間一髪で身を引いた。

それから、彼はドアに優しいノックの音と、外から深く朗々とした女性の声を聞いた。「よし、小さな兵士よ。お前は閉じ込められた。すぐにこのドアを開けなさい。」

レンクは剣を抜き、構え、ドアが破られるのを待った。

数秒が過ぎた。女性の声は不思議なほど落ち着いていた。「私は交渉に来た。」

レンクの腕は震え、剣をドアに向けた。「嘘だ！」

「騎士としての言葉を誓う、お前には何の危害も加えない。」

女性の声に何かがレンクを打った。ゆっくりと、彼は剣を鞘に収め、ドアの閂を外した。彼はさらに数秒待ってから、ついに彼女のためにドアを開けた。アレクサンドラはドアの後ろで天井近くまでそびえ立ち、それから頭を低くして部屋に入った。「お前の勇敢な努力を称賛する。私の部隊を簡単に殺せたはずだ。なぜしなかった？」

レンクは背筋を伸ばし、長身の女性の視線に応えた。「チャップマン卿と彼の部下たちは、あなたの王女に戦争を仕掛けたいわけではない。彼らが求めているのは、彼女の領土の男性として当然の権利と尊厳を持って扱われることだけだ。」

アレクサンドラは眉をひそめた。「男性が？ 戦争？ 馬鹿げている。戦争は女性の仕事だ。そしてすべての男性の権利は、女王に服従することにある。お前がこの地のよそ者であることは分かっている。服装、話し方から明らかだ。なぜこの問題に関与する？ 我々が家畜をどう扱うかは、お前の関知するところではない。」

レンクは腕を組んだ。「俺はアヴァロンの王室騎士だ。弱きを守り、無実の者を保護するという誓いを立てている。」

「男性の騎士？ 奇妙だな。お前の勇気は称賛に値する。しかし…」

アレクサンドラは体を低くして防御姿勢を取り、槍を掲げた。「…お前は依然として反逆者であり、それに少年だ。故に懲らしめられねばならない。」

レンクは躊躇し、前進突きで女性に飛びかかった。彼女は彼の一撃を強力にそらし、レンクは衝撃が腕に走るのを感じ、かろうじて短剣を握りしめた。レンクは後ろに跳び、槍の届く範囲外に留まろうとした。彼は待ち、女性が素早い反撃を続けることを予想した。しかし彼女は石像のように立ち、槍を構えたままだった。「ここの男たちは自分の立場を知っている。彼らは女性に手を出す勇気はない、ましてや騎士には。しかしお前の目には奇妙な光がある。戦士の目だ。この地の弱い男たちとは違う。お前は血の色を見たことがあるな、少年？」

突然、レンクはマドック・ドラコメアに最後の一撃を加えた瞬間を思い出した。邪悪の王がイノシシの悪魔マゴグの怪物の姿に変身する前に。レンクは邪悪を滅ぼす剣を獣の喉に柄まで埋めた。それから彼は女性が微笑むのを見て、レンクは突進した。彼女の槍は彼の盾をきれいに貫き、右腕を痺れさせた。レンクは身をひねって低くかがみ、致命的な槍の先をかわした。彼は射程内にいた。彼は跳び、女性の顔に向けて水平の一撃を振った。アレクサンドラは迫る剣撃を見て目を見開いた。それから彼女は槍を落とし、レンクを腰で捕まえ、空中に保持した。

レンクの一撃は空中に細い線を描き、刃先は彼女の鼻の前で揺れる血のように赤い髪の束を捉えた。それからアレクサンドラはレンクを軽く空中に投げ、彼の剣の腕を手首で掴み、彼が剣を落とさざるを得なくなるまで腕をひねった。それは脇にガチャリと落ちた。アレクサンドラが彼を見ると、その表情は無邪気な無実のふりを嘲るものだった。「もう少しだったな。」

唸り声を上げて、レンクは足を蹴ったが、女性は彼を腕の長さに保ち、まるで赤ん坊のように扱った。

アレクサンドラは首を振った。「あああ！ お前はこの決闘に負けた。恥じることはない。それは美しい攻撃だった。もう少し背が高ければ、私を殺していただろう。しかしお前はまだ小さな少年に過ぎない。故に…」

レンクが見下ろすと、アレクサンドラが木製のスツールをブーツで部屋の中央に押しやるのが見えた。それから彼女は腰かけ、彼を自分の膝の上に落とした。レンクが彼女の太い太ももの上に叩きつけられると、彼女は彼が今まで出会ったどんなゴルゴンの戦士と同じくらい強いことに気づいた。彼は寒気を感じ、その源を探して身をよじった。そして恐怖に、女性が彼のチュニックのスカートをめくり上げ、その大きな手で彼の白い半ズボンを乱暴に引き下ろしていることに気づいた。「…私はお前の命を助けることに決めた。しかしお前の裸の尻をしっかりとスパンキングしてやる。」

アレクサンドラは彼女のずっしりとした手のひらをレンクの背後に叩きつけ、両方の臀部を簡単に覆った。

レンクは驚きの悲鳴を上げたが、女性は再び彼を打った。今度は、レンクは鬨の声を上げ、彼女の握りから逃れようと奮闘した。

アレクサンドラはゆっくりと腕を高く掲げながら首を振った。「そんなのは無用だ、小さな兵士よ。男に生まれたにもかかわらず、お前は女性のように勇敢な心を持っている。今、戦士にふさわしく、優雅さと決意をもって罰に耐えようとしなさい。」

しかしアレクサンドラが三発目のスパンキングを加えると、レンクは息を呑み、腕と脚を振り回して自分の臀部を遮ろうとした。「痛い！ 痛いよ！」

彼女がレンクの手首を掴み、腰の小さな部分にしっかりと押し付けてひねると、アレクサンドラはうめいた。「それにしても、やはりお前はただの馬鹿な少年だな。誰もが知っている、小さな男の子はちょっとしたスパンキングにも耐えられず、新生児のように泣き叫ぶものだ。それはお前の本性だ。女神たちは、出産の恐ろしい痛みに耐える能力を女性だけに与えた。お前の敏感な少年のお尻には、軽いスパンキングでも、強い女性にとってのほとんどの拷問よりも悪く感じるに違いない。」

レンクは足を蹴った。「やめろ！」

アレクサンドラは足を蹴り上げ、レンクの足を太ももで挟み、さらに猛烈な平手打ちを加えた。「それでも、そんな頑固さは許容しない。私の歩兵の誰かがそんな生意気な態度を示したら、彼女の尻が真っ赤になるまでスパンキングしてやる。だから、本物の女戦士に示すのと同じ敬意を、お前にも示してやろう。」

そう言って、アレクサンドラは迅速で容赦ないペースでスパンキングを始め、安定したリズムを保った。レンクは一度叫んだが、スパンキングのペースが彼に息を整えさせることを強いた。足音が聞こえ、一人の鎧の騎士に率いられた歩兵の一団がドアに現れた。「将軍？ お許しください、あなたについてきましたが、苦痛の叫び声が聞こえたので、何が起こっているのか調べに来ました…」

アレクサンドラは女たちを鋭く見つめた。「私は反逆者を処理している間、塔のふもとで待機するよう厳命したはずだ。まっすぐ我々の野営地に行き、私の裁きを待て。このいたずらな少年のスパンキングが終わり次第、合流する。到着したときには、お前たち全員の尻が裸で、むち打ちの準備ができているのを見ることを期待する。」

騎士は面頬の下で目を見開いた。「しかし将軍、ただあなたが私に――」

この時点で、レンクは歯を食いしばり、各平手打ちの後に息を吸っていた。

アレクサンドラはリズムを崩さずに少年をスパンキングし続けた。「命令を下したら、それが実行されることを期待する。今回の場合、軽いスパンキングでお前の軽率な行動に対する罰としては十分だろう。それとも、不服従で軍法会議を望むか、中尉？」

騎士は敬礼した。「いいえ、将軍！ お望み通りに私の愚かさを罰してください、将軍！」

「ふん。それ以外にどうやって罰するというのだ、中尉？ 構わない。良い小枝の束を集めてこい。もし地元の農奴の誰かが何をしているのか尋ねたら、それがどのように使われるのか正確に説明することを期待する。」

騎士は震えたが、敬礼を保った。「はい、将軍！ 私の裸の尻を鞭打つためです、将軍！」

「正解だ。実際、今すぐそれらの尻を裸にするほうがいい。お前たち歩兵、中尉の鎧を脱がせるのを手伝い、それから自分たちも服を脱げ。」

この時点で、レンクは涙で視界が滲み、目を強く閉じて息を吸い込もうとした。彼は水の神殿の下に閉じ込められているように感じた。

アレクサンドラはスパンキングを半拍止め、それからレンクの緊張した臀部の奥深くに波紋を送る猛烈な平手打ちを加えた。ついに少年は泣き、二滴の涙が頬を伝った。アレクサンドラは微笑んだ。「残りの隊列を集めろ。数分で行く。」

数分が引き延ばされ、一秒一秒が痛みとともに過ぎた。アレクサンドラは説教を止め、容赦ないスパンキングにすべてを語らせた。レンクは自由に泣いたが、スパンキングが延々と続くにつれて、彼の声は震え、嗚咽はより絶望的になった。そしてついに、スパンキングが止まり、何か冷たいものが彼の臀部に押し付けられるのを感じた。涙を瞬きで拭い、レンクは肩越しに振り返り、アレクサンドラが人差し指で彼の臀部に沿って円を描いているのを見た。

アレクサンドラは自分の作業の結果を調べて微笑んだ。それから彼女はレンクの脚のロックを解除し、彼の腰への握りを調整し、彼の上を向いた臀部を優しく撫でた。まるで彼を慰めるかのように。「なんて可愛い小さなお尻の頬を持っているんだ。もうかなり赤いが、色は少しムラがある。もしお前が普通の、弱くていたずらな小さな少年なら、これで十分以上満足しただろう。しかし私はお前を大人の女性のように扱うとも約束した。」

レンクは緊張し、首を振った。今度は、彼の顔はアレクサンドラのずっしりとした太ももに寄りかかっていたが、戦う力は残っていなかった。彼は何か言おうとしたが、鼻水が滴り落ち、どもった。「い、いや…」

アレクサンドラはレンクの右臀部、次に左臀部にしっかりとした一発を加え、新鮮なスパンキングで彼の臀部の隅々まで覆うように左右を交互に叩いた。ゆっくりと、まだらな赤い跡はより均一な赤色に変わり、ゴルゴンのルビーの鮮やかな色合いに完全に一致した。

レンクはスパンキングがどれほど続いたか分からなかった。彼は時間の感覚をすべて失っていた。しかしそれがついに終わったとき、彼は疲労でほとんど動けなかった。

アレクサンドラはレンクの各臀部を軽くつまみ、放射される熱を感じて口笛を吹いた。「これで十分だ。もちろん、もしお前が反逆罪を犯していたら、絞首刑にするか…地下牢に投獄しなければならなかっただろうが…」

レンクは泣き言を言った。これで終わりだ。彼は失敗した。それからアレクサンドラは彼を膝の上から抱き上げ、胸に抱きしめた。「…しかし、お前のような勇敢な少年には、もっと良い考えがある。」

＊＊＊

石造りの砦の外の中庭で、中尉と歩兵たちは新鮮な白樺の小枝を集めていた。中尉は鎖帷子だけを着ており、背中側がまくり上げられて裸の臀部が露わになっていた。歩兵たちはズボンを肩に結び、尻を裸にさせられていた。彼らの仲間の数人が、本物の同情と隠しようのない安堵の入り混じった表情で彼らを見守っていた。

そして、アレクサンドラ将軍が塔から現れ、すすり泣く少年を腕に抱いていた。「チャップマン卿と残りの反逆者はどこだ？」

残りの部隊は互いに緊張した視線を交わした。騎士の一人が足を引きずりながら前に出た。「ええと…混乱に乗じて逃げたようです…」

「愚か者ども！ この少年だけがこの臆病者たちの中で真の戦士だった！ この反乱を鎮圧せよとの命令だった！」

「もしかしたら…残りの村人を虐殺し、彼らの男を側室として奪うことができるのでは？」

アレクサンドラは嘲った。「いや。農奴は収穫期により良い使い道がある。弱者のことは気にするな。私と来い。これらの臆病な男たちに、裏切りの代償を思い知らせねばならない。」

アレクサンドラは丘を下りて堡塁の中央の市場広場に向かい、足枷と絞首台がある足場に上がる階段を登った。巨大な女が彼を胸にしっかりと抱きしめるとレンクは緊張したが、彼女の声は轟き、ざわめく群衆の音をはっきりと越えて響いた。「聞け、聞け、ヒールフォール王国の忠実なる臣民よ。喜べ、お前たちは反乱の脅威から解放された。シャーロット王女は慈悲深い。お前たち庶民がチャップマン卿の反乱の裏切りに加担していなかったことを彼女は知っている。ひざまずき、王室の旗に接吻する者はすべて、寛大に許されるであろう。」

アレクサンドラはレンクを両手で高く掲げ、彼を回転させて集まった群衆に彼の臀部を露出させた。レンクは初めて、アレクサンドラが彼のスカートをまくり上げ、ベルトに挟んで、輝く赤い裸の臀部をすべての人に見えるようにしていることに気づき、緊張した。アレクサンドラはレンクの懇願する目を無視し、声は安定し、顔は落ち着いていた。「反乱の指導者たちは逃げたかもしれないが、我々は彼らの最高の武器の一つを奪い取った…そして私は息子を得た。」

兵士たちは心から喝采し、集まった農民たちも半ば心を込めて加わった。アレクサンドラはレンクの頭を肩に乗せ、片腕で抱きかかえ、空いた手で彼の臀部を叩いた。優しい愛情のこもった軽打は、最近のスパンキングの痛みを目覚めさせるのに十分以上だった。「彼は規律と服従の真の意味を学ぶだろう。そしてある日、彼は若者に過ぎないが、真の騎士になるかもしれない。シャーロット王女と我らが輝く王国に仕えるにふさわしい騎士に！」

アレクサンドラが群衆に手を振ると、彼女はレンクの耳元に近づき、柔らかく低い声でささやいた。「もちろん、もし行儀が悪ければ、またスパンキングしなければならないだろう。しかしお前はいつか、立派な紳士に成長することを知っている！」

レンクの唇は震えた。彼は逃げ出し、兵士の隊列すべてと戦いたかった。もし大人の体があれば、彼は彼ら全員を倒せたと分かっていた。レンクをまだ抱えたまま、アレクサンドラは白い馬に乗り、堡塁の門に向かって導いた。

その時、レンクは聞き覚えのある馬の鳴き声を聞いた。歩兵が町の厩舎から出てきて、若いクライズデールの牝馬を手綱で引いていた。「アレクサンドラ将軍！ 奇妙な軍馬を見つけました。この農民たちにはあまりにも高貴な品種です。反乱軍の指導者のものだと思います！」

レンクはリアノンと認識して目を見開いた。彼女はこの奇妙な地で彼に残された唯一の友人だった。アレクサンドラは好奇の表情でレンクを見下ろした。「うーむ…よくやった、兵士よ。あの馬は確かに反乱軍の指導者のものだったようだ。しかしもう違う。レンク、我が子よ、あの美しい馬の主人になりたいか？」

レンクは涙がこぼれそうになった。「お願いです、彼女を傷つけないでください！」

アレクサンドラは優しく微笑んだ。「傷つける？ もちろんしない。彼女は忠実な馬だ。もちろん、お前が彼女の世話をしっかりすることを期待する。なぜならもししなければ…ママがスパンキングしなければならないからだ。分かったか？」

レンクは怒りが湧き上がるのを感じた。しかし彼は自分が再び少年に過ぎないことを思い出した。彼は母親の顔を覚えていなかった。母親のように感じられる人に最後に近づいたのは、ニーベルンクの森の端でサリアに別れを告げたときだった。レンクはアレクサンドラの巨大な胸に顔をうずめた。「はい、ママ…」

＊＊＊

レンクの寝室には、活気に満ちた冒険心あふれる少年が夢見るすべてのものが備わっていた。壁には剣と盾が飾られていた。冒険と偉大な戦士の壮大な物語が詰まった本棚。何年もの毎日の使用に耐えられるように作られた訓練用の案山子。

しかし今のところ、最も注目すべきは部屋の中央にあるベッドだった。それはすべての毛布とシートを取り払われ、それらは即席のロープに結ばれ、開いた窓から外に垂れていた。

パジャマを着たアレクサンドラ将軍は、裸のベッドの端に座り、重い木製のヘアブラシでレンクの裸の臀部を叩いていた。彼のチュニックはベッドの足元に、信頼の革のブーツと共にきちんと折りたたまれていた。今のところ、レンクは生まれたばかりの赤ん坊のように裸で、同じように泣き叫んでいた。「お願い、ママ！ ヘアブラシはやめて！ 痛いよ！」

アレクサンドラはフンと息を吐いたが、一瞬もスパンキングを止めなかった。ヘアブラシの一撃一撃がレンクの臀部に波紋を送った。「痛い？ もしお前の手が滑って、首を折っていたらどうした？ それがどれほど痛いと思う？」

レンクはスパンキングの力がゆっくりとクレッシェンドに達するにつれて叫び声を上げた。「ひいい！ ごめんなさい、ママ！ ごめんなさああい！」

アレクサンドラは微笑んだ。彼女の養子はとても可愛くて、彼女は彼に怒り続けられなかった。しかし彼女には母性的な義務があり、徹底的にやるつもりだった。「今は反省しているが、これからもっと反省することになるぞ、小さな兵士よ！」

アレクサンドラは容赦ない力を緩めることなくスパンキングのテンポを上げた。レンクは金切り声を上げ、決意は完全に崩れ去った。「うああ！ うわあ！ わあああ！」

アレクサンドラはヘアブラシを円を描くように当て、レンクの臀部の側面と下臀部が太もも上部に接する下部の曲線を覆った。それから彼女はさらに六発の最も猛烈な一撃を、各臀部の中央に直接加えた。アレクサンドラはレンクの哀れな泣き声を無視して腕を伸ばした。「よし、今夜はこれで十分だろう。しかし家出をしようとした場合のルールは分かっているな。明日の朝、またスパンキングがあることを覚悟しておけ。夜明けに、次のスパンキングに適した大きさの棒を削るために、お前をまっすぐ木立に送る。中庭でしっかりむち打ちにしてやる。すべての男使用人たちが、日が暮れた後に部屋を抜け出そうとするいたずらな小さな男の子に何が起こるかを見られるように。」

レンクは鼻をすすった。「お願い！ もう二度と逃げ出したりしない！」

アレクサンドラは裸の少年を抱き上げ、抱きしめた。「うーむ。信じたいところだが。今夜はお前を監視しなければならないだろう。」

レンクは息を整えようとしゃっくりをしながら、両手で前を覆った。

アレクサンドラは少年を自分の簡素な寝室に運び、足で立たせた。それから彼女はナイトシャツを取り出し、少年の頭からかぶせた。レンクは両手を差し出してアレクサンドラに着替えさせ、それからお尻を抱え、鼻をすすった。

アレクサンドラは彼をじっと見つめた。「不幸せか、レンク？ もうここに住みたくないから逃げ出したいのか？」

レンクはうつむいた。「いいえ…そうじゃない。ずっと逃げ出すつもりじゃなかった。ちょっとだけのつもりだった。」

アレクサンドラは眉を上げた。「おや？ それでいったい何をするつもりだった？」

レンクは足を引きずった。「ただ…リアノンに乗ってお城の周りを散歩するだけだ。俺たちは昔、いろんな場所に行ってたんだ。二人だけで。君は俺のことを心配しなくていい。」

アレクサンドラはレンクの頬を撫でた。「まあ、お前のことを心配するのは私の仕事だ。なぜならお前は今や私の小さな兵士だからだ。もし家を出て少し探検したいなら、ただ頼めばよかった。しかし良い兵士のように、外出の許可を求め、日が暮れる前に本部に報告することを期待する。」

レンクは涙目でアレクサンドラを見た。「つまり…君は俺に怒ってないのか？」

アレクサンドラはレンクの頭の頂上にキスした。「もちろん。時には愚かでいたずらな小さな男の子になることもある。しかしお前は私の愚かでいたずらな小さな男の子だ。分かったか？」

レンクは袖の裏で鼻を拭い、微笑んだ。「はい、将軍。」

アレクサンドラはレンクを抱き上げ、自分の膝の上に座らせ、最後の涙を拭った。「そして明日の朝にもう一度スパンキングがあることを理解しているな、息子よ？」

レンクはうなずき、彼女の頬にキスした。「はい、ママ。」

アレクサンドラは優しく鳴き、ベッドに横たわり、レンクに自分の胸に寄り添わせた。「いい子だ。」

［第一章 終わり］

レンクのヒールフォールでの冒険

第二章：訓練

ユー・メイ＆ゴジラ作

レンクは自ら切り整えた白樺の枝を、新しい養母であるアレクサンドラ将軍に差し出すとき、手が震えていた。アレクサンドラは鼻歌を歌いながら、その重い小枝を注意深く調べた。要求された通り、それはレンクの親指の幅よりも太かった。この棒の一撃一撃は、太く、怒ったような赤いミミズ腫れを残すだろう。少なくとも、適切な手によって、適切な臀部に対してならば。

アレクサンドラは背後で兵士たちがくすくす笑う音を聞き、城の衛兵の数人が手の後ろでささやいているのを見つけた。アレクサンドラは顔をしかめた。彼女は規律違反として衛兵隊長に報告しなければならなかった。彼らは公衆の面前での鞭打ちで軽く済むだろう。しかし今のところ、アレクサンドラは彼らに楽しませておくことに満足していた。数人の笑っている目撃者がいることで、この経験は彼女の誤った若い被護者にとってより謙虚なものになるだろう。アレクサンドラは鞭を振って城の中庭の脇にある長い木製のベンチを指した。「よくやった、兵士よ。立派な小枝を用意した。しかし今度はお前自身がむち打ちの準備をしなければならない。すぐに尻を裸にし、まっすぐあのベンチに行き、肘に体重をかけなさい。脚はまっすぐに、頭は上げて。」

レンクは衛兵や歩兵たちがくすくす笑うのを聞いて、頬と耳を真っ赤にした。慎重に、彼は自分で半ズボンを下ろし、チュニックのスカートの裾を押さえ、それからベンチに向かってよちよち歩いた。下着が足首に引っかかっていた。おとなしく、レンクは自分のスカートを上げ、ベルトの後ろに挟んで臀部を露わにした。それは前回のスパンキングからのまだらな赤紫色のあざで既に印されていた。そして彼は次のスパンキングのための姿勢を取った。レンクは痛む臀部が伸びてひりつくのを感じてうめいた。

アレクサンドラ将軍が彼に近づく重いブーツの足音が聞こえ、白樺の棒を彼の臀部に軽く叩きつけた。「よし、若者よ。ここにいる全員に、なぜお前がこのむち打ちを受けるのかを言わせる。」

レンクは小声でつぶやいたが、アレクサンドラは手首の素早い一振りで棒を彼の臀部にパシッと叩きつけた。「大きな声で。」

レンクは息を呑んだが、ひるむ衝動を抑えた。「昨夜、家から逃げ出そうとした。ほとんど成功しかけたんだ。」

アレクサンドラは棒でレンクの背後を二度叩いた。「そんな生意気は無用だ。さあ、ベッドのシーツを逃げるためのロープにして城壁を登ろうとしたいたずらな小さな男の子には何が起こるか言いなさい？」

「いたずらをすると、裸のお尻をスパンキングされます。」

アレクサンドラは手作りの杖をレンクの臀部に沿って撫でた。「その通りだ。各違反につき、最良の指導者による六回の鞭打ちを受ける。逃げ出そうとしたことで六回…そしてベッドを散らかしたことでさらに六回。さて、スパンキングの時間になったら何と言うんだ、若者よ？」

見物人の何人かはこの言葉に隠しようのない楽しみでくすくす笑った。彼らは経験から、将軍が義務を怠った兵士に対する罰を屈辱的にする才能があることを知っていた。レンクは深呼吸した。「はい、ママ。私にふさわしいように、私をスパンキングしてください。」

即座に、アレクサンドラは震えるような力で小枝の一撃をレンクの臀部に加えた。レンクは叫び声を上げ、棒が温かいバターを切るナイフのように自分を横切るのを感じて足を蹴り上げ

た。アレクサンドラは棒の先端をレンクのブーツに軽く当てた。「足を下ろせ。それはカウントしない。」

レンクは唸り声を上げ、それから力を込めて足を踏み鳴らした。見ていた兵士たちは恐怖で固まり、アレクサンドラがこの頑固さにどう対処するのかと思った。しかし驚いたことに、アレクサンドラは実際に微笑み、意味深な表情で見物人たちを見渡した。それから、見ずに、彼女は棒のバックハンドの一撃を、レンクの臀部の中央に正確に狙って加えた。アレクサンドラは数秒待ってから数えた。「一。」

レンクはアレクサンドラが次の一連の一撃を加える間、蹴りたい衝動を抑えた。六発目が終わると、彼女はほぼ一分間止まり、腕を伸ばし、小枝をもう一方の手に持ち替えた。レンクは震えるような息をし、七つの脈打つひりつくミミズ腫れを感じた。それらはすべてきれいに並んでいた。

ついに、アレクサンドラは再びむち打ちを始めた。今度は、彼女は斜めに一撃を狙い、以前のいくつかのミミズ腫れを横切った。「一。」

レンクは最後の一撃が現在の一連の筋に新しい痛みを目覚めさせるのを感じて痛みに顔をしかめたが、次の一撃がそのすぐ下に着地した。レンクは痙攣し、膝が互いにぶつかったが、蹴らなかった。アレクサンドラは微笑んだ。「二。」

即座に、彼女はレンクが息を整える間も与えずに三発目を加えた。彼は驚いて叫び、背中を反らすと帽子がばたついた。レンクの膝は折れ曲がったが、彼は脚をまっすぐに伸ばし、従順に臀部を掲げた。アレクサンドラは感心した。彼女はレンクがずっと前に数え直しをさせる理由を与えると予想していた。「三。」

アレクサンドラはレンクの反対側に歩き、自分の手の成果を調べた。今回は、彼女は新しい角度で一撃を狙い、前の一連の上に交差模様のミミズ腫れを作ることに決めた。アレクサンドラは腕を高く掲げ、肘のスナップで棒を振った。彼女はレンクが叫び終えるのを待ってから数えた。「四。」

最後の二発のために、アレクサンドラは再び戦術を変えた。今回は、彼女はより多くのフォロースルーを使い、棒がレンクの臀部の肉の奥深くまで沈むことを確実にした。レンクはほとんど窒息し、頭をベンチにぶつけないように肘で体を支えた。アレクサンドラは震える息をした。「五。」

彼女は最後の一撃を同じ力で加えた。レンクは叫び声を上げ、膝の上に崩れ落ちた。見物人たちは息を呑んだ。レンクは自分の間違いに気づいて目を見開いた。素早く、彼は立ち上がり、将軍の恐ろしい裁きを待った。

数秒が引き延ばされた。ついに、レンクは肩越しに一瞥する勇気を振り絞った。アレクサンドラ将軍は厳しく、動じない様子だった。「若者よ、お前は位置を離れた。もしお前が私の剣士の一人なら、そのためだけに最初からむち打ちをやり直させるところだ。」

レンクは鼻をすすり、それから頭を下げ、スパンキングが再び始まるために臀部を高く掲げた。「ごめんなさい、ママ。私のスパンキングを終わらせてください。」

怒っているように見えて、アレクサンドラは杖をレンクの背後に当て、そのままにした。そしてついに、アレクサンドラは笑みをこぼし、肩をすくめた。「しかし一方で、お前は私の剣士の一人ではない。男の子は所詮男の子だからな。」

レンクは瞬いた。「つまり…スパンキングは終わりですか？」

アレクサンドラはひざまずき、レンクの頭を軽く叩いた。「もちろんスパンキングは終わりだ、愚かな子よ。改善の余地は大いにあるが、最初のむち打ちを私が予想した通りに受け止めた。」

アレクサンドラはレンクを優しく抱きしめ、それから手を回してまだ露わな臀部を撫でた。「さあ、腰を締めなさい。」

レンクは顔を赤らめ、素早くかがんで半ズボンを引き上げた。レンクが服装を整えると、女たちは笑い声をあげたが、その時、奇妙な黒髪の女性が中庭に歩いてきた。彼女はアレクサンドラ将軍とほぼ同じ背丈だったが、よりしなやかな体つきだった。彼女は金の房飾りの付いた肩章を持つ赤い軍服の上着と、繊細な眼鏡をかけていた。「その騒音はもう十分だ！ お前たち、恥を知れ。王室衛兵の女たちが、女子校生の群れのように振る舞うとは。昼食前に、下着だけを身につけて、鞭打ち台に全員揃っているのを見ることを期待する。」

アレクサンドラは黒髪の将校に向き直った。「おはよう、アニタ大尉。」

アニタは姿勢を正し、敬礼した。「アレクサンドラ将軍。どうか、私の衛兵たちの礼儀欠如をお許しください。」

「おや？ もし私が彼女たちを許したら、彼女たちの代わりに鞭打ちを受けるか？」

アニタは完璧な決意で敬礼を保った。「はい、将軍！ それがあなたのご判断なら。」

アレクサンドラは王室衛兵たちに向き直った。「そして被告はどう言う？ 自分の指揮官に、お前たちにふさわしい罰を受けさせるのか？」

装甲衛兵たちは素早く敬礼した。彼女たちは皆、顔を隠す兜をかぶっていたが、どういうわけか、全員が明らかに恥ずかしそうだった。衛兵の一人が話した。「アレクサンドラ将軍。もしあなたのご意志なら、自分たちの鞭打ちを受ける名誉をお許しください。」

アレクサンドラはうなずいた。「その通りにする。命令通り、速やかに鞭打ち台に報告せよ。アニタ大尉、お前の女たちの忠誠心はお前の評判を高める。だから、彼女たちの尻の運命はお前に任せる。」

「ありがとうございます、将軍！」

アレクサンドラは手を振った。「休め、大尉。頼みがある。私は最近、レンクという息子を養子にした。彼は剣での戦闘ごっこが好きで、彼の剣術訓練を個人的に見てもらいたい。」

アニタはレンクを見て、眉をひそめた。「男の子が？ 剣術を学ぶの？」

アレクサンドラはくすくす笑った。「分かっている。この子はかなりのお転婆娘だ。もちろん、彼には厳しく接することを期待する。どう思う、レンク？ 正しい剣術を学びたいか？」

レンクは拳を握りしめた。「もう剣術は知っている。」

中庭のすべての視線がレンクに注がれた。アレクサンドラの微笑みは消えた。「なら、最初の授業の後、アニタ大尉から素晴らしい報告を聞くことを期待する。分かったな、若者よ？」

レンクは言葉の背後にある暗黙の脅威を感じ、緊張した。「はい、将軍。」

アレクサンドラはレンクをにらみ、それから優しく彼の頬をつまんだ。「その意気だ、息子よ。お前たち、盾乙女たち、少年を風呂に入れ、最初の授業の準備をさせなさい。」

女たちが彼に近づくにつれて、レンクのとがった耳がピクッと動いた。「しかし――」

すると盾乙女の一人が彼を腰で抱え上げ、肩に抱えて連れ去った。

アレクサンドラはレンクの顔に指を振った。「そしてもし風呂場で彼が何か問題を起こしたら、しっかりスパンキングする許可を与える。もちろん、もし行儀が悪ければ私に知らせなさい。覚えておけ、レンク、もし別の女が何らかの理由で私に代わってお前をスパンキングしなければならなくなったら、寝る前に私からもう一度スパンキングされると思え。」

二人の女が聞こえない距離に出た瞬間、彼女たちは少女らしい歓喜の悲鳴を上げた。レンクを運んでいる女は笑いをこらえながら息を切らした。「なんてこった！ 彼、めっちゃ可愛い！」

レンクは顔が燃えるように熱くなるのを感じ、目をそらそうとした。

二人目の盾乙女は優しく鳴いた。「あら、恥ずかしがってるわね。見て、耳が真っ赤だよ！」

「言うまでもなく、彼の可哀想なお尻もね！ てへへ！」

＊＊＊

レンクの入浴中、盾乙女たちは、もし彼が浴槽で水を跳ねさせすぎたら、どちらが彼をスパンキングすべきかでからかいながら議論した。これを聞いて、レンクは静かに泣き始め、二人の少女は彼が行儀よく振る舞うならスパンキングしないと約束した。

結局、レンクは入浴中のスパンキングを免れた。徹底的に洗われた後、彼は自分の新しい服のセット、古いチュニックの一つを着せられ、兵舎に護送された。

剣術場は長く狭く天井の高い部屋だった。チョークの線が剣術練習用の長方形のアリーナを示していた。脇では、数人の騎士が少女従者たちと剣術の練習をしており、中にはレンクより少し年上の者もいた。

アニタ大尉は中央のアリーナに立ち、両手を後ろで組み、レンクの方を向いた。「ああ、剣士志望の少年が到着したな。盾乙女たちよ、ありがとう、解散だ。」

二人の乙女は失望したように見えたが、お辞儀をして退出し、背後でドアを閉めた。レンクは腕を組み、ふくれっ面をしながらアニタ大尉をにらみつけた。

アニタは腰をかがめてレンクの目を注意深く見つめ、彼の長くとがった耳に沿って指をなぞった。「奇妙だ。それはお前の故郷では一般的な特徴なのか？」

レンクは手で耳を覆った。「ただの耳だ。誰にでもある。」

「ここの男たちの誰もナイフのような形の耳をしていない。私の質問に適切な答えを期待する、兵士よ。」

レンクはうつむき、顔が燃えた。「はい、将軍。ハイ――」

レンクはうっかりアヴァロン王国の名を漏らしそうになってどもった。「――私の故郷では、みんなこんな耳だ。」

アニタは唇を歪めた。「そしてお前の故郷の名は何と言う？」

レンクは頭を上げ、アニタを見つめ返して瞬きをしないようにした。ついに、彼女は笑みをこぼした。「さあ、子供よ、自分の故郷の名を言って何が悪い？ 我々が征服するのが怖いのか？」

「俺はアヴァロン王国の騎士だ。イゾルデ王女自身によって騎士に叙任された。お前たちに故郷を征服されることはない。」

「王国？ 奇妙だな。少なくともお前を騎士に叙任する立派な王女はいるようだ。しかしもしすべての騎士がお前のように小さいなら、征服は難しくないだろうが。」

「俺は――」レンクは自分が小さいことを否定しかけたが、自分を止めた。「――俺は怖くない。」

アニタはその瞬間を引き延ばし、それからくすくす笑った。「なかなかの度胸だ。訓練用の剣を取ってきなさい、始められる。」

「自分の剣と盾のほうがいい。」

「剣と盾の戦闘員か？ お前の可愛い小さな剣は見た。よくできた刃だが、他の皆と同じように木製の練習剣を使うことになる。」

「自分の武器で戦ったほうが上手くいく。」

「私は槍で戦ったほうが上手くいく。アレクサンドラ将軍との決闘はかなり早く終わったと聞いている。しかし基本から始める。剣術の授業の前にスパンキングされたくなければ、訓練用の剣を取ってこい。」

レンクは歯を食いしばり、ラックから木剣を取った。彼は女騎士たちと少女従者たちが練習を止めて自分を見つめる目を感じた。

レンクが中央のアリーナに戻ると、アニタは自分の木剣を抜き、防御姿勢を取った。「最初の教訓：常に相手を測れ。臆病に抵抗する限り、弱い戦士であることに恥はない。私の防御を破ってみせよ。」

レンクは準備姿勢に入り、剣を後ろに構えた。彼は左手で柄をしっかりと握りしめ、指の関節が震えるのを感じた。

アニタは微笑んだ。「左利きか？ 奇妙だな。それで劣った相手は虚を突かれるだろう。」

レンクは突進し、左手で剣を回転させた。アニタの眉がひそまり、彼女は彼の最初の荒い突きをそらし、後ろに跳んだ。レンクは攻撃を続け、よく練習された攻撃コンボに優雅に流れ込んだ。彼は射程内に留まるために前に押し続け、アニタをアリーナの外に追いやろうとした。彼女は彼の攻撃の最後の一撃から軽く回転して逃れ、リングの中央に後退した。「良い、猛烈な攻撃だ。しかしアプローチが少し荒い。次は――」

レンクは後ろに跳び、狂ったように回転しながら以前の勢いを失わずに攻撃を続けた。アニタは息を呑み、剣を近接防御に構え、かろうじて各攻撃をそらした。ついに、彼女はレンクの頭蓋骨を狙った低い斜めの一撃で応じた。レンクは横に跳び、首を伸ばして剣が頭皮をかすめるようにし、アニタの右側から回り込もうとした。アニタのフットワークだけが彼女を腹部への突きから救った。彼女はぎこちなく後ろに倒れることを余儀なくされたが、かろうじて射程外だった。レンクは空中に跳び、彼女の頭蓋骨に飛び降りて下向きの一撃を加えた。

最後の瞬間、アニタは地面に倒れ込み、レンクの攻撃を力強く防ぎ、彼は衝撃で腕が詰まるのを感じた。アニタは後ろに転がり、軽く立ち上がった。周囲で、数人の女たちと少女たちがざわめき始めた。「大尉をあそこまで追い詰めるのを見たことがない。」

レンクは息を切らした。彼はその容赦ない攻撃にすべてを注ぎ込み、すでにその負担が筋肉に影響を及ぼしているのを感じていた。

アニタは震える息をした。「信じられない。純粋な本能だ。明らかに自分で訓練している…しかし攻撃は目標に届かない。それは大柄な蛮族に期待するような攻撃的な『犬喧嘩』スタイルだ。お前の小さな体格を考慮に入れていない。」

レンクは必死に息を吸った。木剣は彼の短剣よりも長かった。その質素な外見にもかかわらず、その飾り気のない剣の重さが何かを思い出させた。それは彼がまだ大人の体で老いなき英雄として邪悪を滅ぼす剣を握っていたときを思い出させた。しかし彼には盾がなかった。レンクは息を整え、両手で剣を構えた。より大きな武器に使うような構えだった。

瞬間が引き延ばされ、彼がアニタの攻撃を待つ間、レンクは彼女の表情が変わるのを見た。しかし奇妙なことに、アニタは怒っているようには見えなかった。彼女の顔は完全に落ち着いていた。

彼女は彼の無言の挑戦を理解した。まるでレンクが「来い」と言っているかのようだった。

そしてアニタは前進突きをし、片手で剣を構えた。レンクは彼女の攻撃をそらし、射程外に留まるために後退した。アニタの攻撃はほとんどダンスのようだった。流動的で、落ち着いていた。それはレンクにガルーダの盗賊たちの戦い方を思い出させた。彼女たちは皆女性で、優雅な湾曲したシミターで戦った。

アニタが三つの優雅な攻撃を加えた後、レンクは素早い突きで彼女を不意を突こうとしたが、彼女は彼の剣先から滑り去り、回転して彼に向き直った。「なるほど、野良犬のように突進するだけではないようだ。ブラボー。堅実な防御を偽ることはできない。さて、今日の最後の教訓だ。最初と同じだ。常に相手を測れ。」

しかしレンクは答えなかった。

アニタは姿勢をレンクに合わせ、彼の両手の握りさえも鏡のように写した。「告白がある。アレクサンドラ将軍がチャップマン卿の反乱に加わった悪名高い無法者を捕まえたと聞いたとき、私はお前に良い教訓を教えるために一発お見舞いしてやろうと強く思った。あの反逆者の犬どもは慈悲に値しない。しかしお前は立派に戦ったので、今回だけは引き分けを提案しよう。」

見ていた観客は息を呑んだ。レンクは目を細めた。「もし引き分けにしたくないなら？」

アニタは眼鏡を直した。「なら決闘を続ける。しかし続けるなら、勝つために戦う。そして勝ったら、望むように罰する。」

レンクは剣の握りを緩めた。「もし俺が勝ったら？」

アニタは目を閉じ、微笑んだ。彼女はほとんど少女らしく見えた。「もちろん、その時はお前が私をスパンキングできる。」

レンクは両手の握りから左利きの戦闘スタイルに戻したが、ひねりを加えた。彼は荒々しいアプローチを真似て、それからフェイントをかけ、横に身をかがめて剣の腕から離れた左側からアニタを攻撃した。

アニタはフェイントにかかったように見え、防御しようとして躊躇した。レンクは自分の隙を見て、勝利の鬨の声とともに打った。

すると、アニタは軽く剣を左手に持ち替え、レンクの攻撃をそらした。レンクは前方によろめきながら目を見開いた。アニタは剣を回転させ、木製の刃の平らな面を彼の臀部に叩きつけた。レンクはその日の朝の杖の一撃が抗議して叫ぶのを感じて息を呑んだ。

レンクは防御のために回転したが、アニタは攻撃に移っていた。左手を使って一連の猛烈で流動的な一撃を加えた。それはレンク自身の戦闘スタイルだった。レンクは三発を防いだが、最後の一発が強力に彼に衝突し、彼は後ろ向きに倒れ、痛む臀部の上に真っ直ぐに着地した。

それから、レンクは木剣の先端が自分の喉に当たるのを感じた。アニタは首を振った。「チッチッ。最初の試験に失敗した。常に相手を測れ。剣士として悪い癖がついているようだ。野良犬のように戦う。だから、子犬のように訓練して、その癖を直してやらなければならない。そして愚かな子犬を訓練する最良の方法は…」

アニタはレンクの手から剣を叩き落とし、手首を掴んで乱暴に立たせ、それから手を回して木剣で遊び心を持って彼の臀部を叩いた。「…可愛い小さな尻尾を叩くことだ。」

レンクは首を振り、乱暴にアニタの手首を掴んだ。「違う！ できない！」

アニタはレンクが彼女に木剣を落とさせるのを嫌そうな顔で見て、彼のシャツの襟を掴んだ。「遅すぎた、子犬よ。残念だができる。良いスパンキングが、勝っているうちに止めることを教えるだろう。『学習の座』に適した場所を見つけよう。」

アニタは彼を剣術場から連れ出し、中庭を見下ろす石造りの胸壁の上に出た。レンクは、胸壁が城の住民のための憩いの場として椅子やスツールで設置されていることに気づく間しかなかったが、来るべきスパンキングへの恐ろしさがその考えを追い払った。

アニタはレンクを椅子に連れて行き、腰かけた。レンクの手は彼女の握りを振り払おうともがいたが、彼女は落ち着いた様子で彼の下着を引き下ろし、彼を左太ももの上にぽすんと座らせ、右手を高く掲げた。

「あのような間違いは、本物の決闘では命取りになる。故に、より良く教えるための適切な動機が必要だ。これはお前自身のためだ、子犬よ。」

そう言って、アニタは手をレンクの裸の臀部に鋭く振り下ろした。彼は痛みの叫び声を上げ、前回のむち打ちの痛みとともに刺痛を強く感じた。

集まった女たちは、アニタが真剣にレンクをスパンキングし始めるのを見て、喜びの息を呑んだ。アニタ大尉は巨大なアレクサンドラ将軍ほど強くはなかったが、アニタは筋肉で劣る分を正確さで補った。アレクサンドラの力任せなアプローチとは対照的に、アニタは手のひらを安定させ、手首を使って各スパンキングに少し余分な摩擦を加えた。レンクはすぐにその違いに気づき、今のところどちらが悪いか分からなかった。

スパンキングが圧倒的に強力でないという事実は、アニタが優しく歌うような声で説教を始める間、レンクがすべての言葉を聞くことができることを意味した。「このスパンキングは絶対に必要だと思う。二度とそんな愚かなことを考えないようにするためにね。稽古中のお前の目の反抗的な輝きに気づいた。お前は意志の強い少年だ。」

重い足音が聞こえ、アレクサンドラ将軍が入り口に現れた。「片手で拍手する音が聞こえる…おやまあ、アニタ大尉？ 私の息子は今日、手に負えなかったのか？」

レンクの懇願はすぐに支離滅裂な言葉に変わった。アニタはスパンキングを止めずにうなずいた。「そうなのです、将軍。この尻の状態と、スパンキングに対する彼の反応から見て、あなたの躾けがすでに少年に良い影響を与えていることが分かります。」

すでに、レンクは静かに泣き始めていた。アレクサンドラは進行を見ながらため息をついた。「ありがとう、しかしレンクには良いスパンキングが、そしてもっとたくさん必要であることは明らかだ。彼はまだただの少年なので、自分の立場を学ばなければならない――たとえいつか騎士になるように訓練されていても。レンク、愛しい子よ、私はお前を罰しなければならないだろう。もし指導者からスパンキングを受けたら、寝る前にスパンキングすると約束したのを覚えているな。」

レンクはむせ返り、抗議しようと叫んだが、別のスパンキングが彼を遮り、彼は悲嘆の震える叫び声を上げた。アニタはくすくす笑った。「どうしてそんなに厳しく罰する心があるのか分かりません。彼はとても可愛くて、スパンキングしなければならないのが心が痛みます。彼の泣き声を聞いてください！ 哀れな、悲しげな小さな子犬のようですね。」

アレクサンドラはうなずいた。「そうだ、愛しい子をスパンキングしなければならないのは辛い。しかしそれでも、剣術の授業の前に、毎回しっかりスパンキングすることを望む。」

アニタはくすくす笑った。「ああ、心配しないでください。レンクは今のところ、訓練されていない不従順な子犬のようなものですが。私の膝の上のいつもの訪問が、行儀を教えると確信しています。」

アレクサンドラはアニタの手が上下するのを興味深そうに見た。「なんてこと、彼の泣き声を聞いてごらん。どうやってるんだ？ 彼はとても意志の強い子で、私でさえ時々本物の涙を流させるのに苦労するんだ。」

アニタは特に力強い一撃を腕を上向きに角度をつけて加え、レンクの臀部上部に滑らせ、それから膝を持ち上げてレンクの隠れた座面――彼の臀部の下の子犬の脂肪のすぐ下を露わにした。「ああ、すべて手首の使い方です。良いスパンキングは結局涙で終わるべきですからね！」

それから、アニタは新たに露わになった領域に注意を集中させてスパンキングを最初から始め、レンクは厚く乱れた涙を流し始めた。

アレクサンドラは感嘆の声を上げた。「アニタ大尉、今夜のレンクの就寝前のスパンキングを手伝ってくれないか？ 私の息子はあなたの指導の手から利益を得ると思う。」

アニタは優しく微笑み、最後の響き渡る一発を加えた。レンクは狼の子犬のように叫び、それから最後のうめき声とともに崩れ落ち、弱々しくぐるぐると喉を鳴らした。

アニタは目の前の上を向いた、輝く深紅色の臀部を軽く叩き、それから立ち上がってレンクを腕に抱いた。「喜んでお手伝いします、アレクサンドラ将軍。レンクはあなたに養子にされて幸運でした。あなたはあの反逆者の犬どもから彼を救うのに親切でした。」

レンクは弱々しくアレクサンドラに手を伸ばし、彼女はレンクを腕に受け入れ、肩の後ろを叩き、頬にキスした。「まあ、私はすべての少年は人生に強い女性のロールモデルが必要だと信じている。彼があなたを第二の母として思うようになることを願っている。教訓を学んだか、レンク？」

静かに泣きながら、レンクの息は話そうとするたびに詰まった。「は、はい、ママ。」

アレクサンドラはレンクを再び立たせ、スカートの後ろをベルトに挟んで、裸のスパンキングされた臀部を露わにした。「そして先生に何と言うんだ？」

レンクは足を引きずり、アニタ大尉の目を見るのに苦労した。「ご、ごめんなさい、馬鹿なことをして、先生。スパ、スパンキングしてくれてありがとう。ゆ、許してください？」

アニタはレンクの手を握り、軽く叩いた。「ああ、哀れな子犬が尻尾を巻いているようだ。もちろん許すよ、レンク、愛しい子。そして二度とスパンキングしなければならないことがないことを願っている。」

アレクサンドラはくすくす笑った。「馬鹿なことを、大尉。もちろんまたやるだろう！ 今夜の就寝前に一度、そして明日の朝一番に、次の授業の前に。」

レンクは手の甲で涙を拭こうとしたが、止まらなかった。彼は頭を後ろに倒して嗚咽し、それからアニタ大尉のスカートにしがみついた。彼女はひざまずき、彼を柔らかく抱きしめ、優しくシーッと静め、彼の臀部を叩いた。「この可哀想な小さな尻尾は、今夜までに癒す時間が必要だ。さあ、レンク、少し良くなる鎮痛軟膏がある。魔法ではないが、痛みを和らげるのに役立つ。」

レンクはどんな形の慰めにも必死で、その抱擁を熱心に受け入れた。

＊＊＊

最も高い塔の展望台から、シャーロット王女は冷ややかな興味を持って中庭を見渡した。それから、彼女は遠くの泣き声を聞き、見下ろした。「興味深い。あれが自分を反逆者だと思い込んでいた少年か。アレクサンドラ将軍が自分の子として養子にした者だ…本当に長くとがった耳を持っているのかしら。」

遠くからでも、シャーロットは少年が二人の女について兵舎の中に入っていく真っ赤な臀部を見分けることができた。シャーロットは微笑んだ。「まあ、少なくとも甘やかされてはいないようだ。」

［第二章 終わり］

「レンクのヒールフォールでの冒険」

第3章: 約束

著: ユウ・メイ、ゴジ

シャーロット王女の城では、いつもと変わらぬ一日だった。午前中の厳しい稽古を終えた女騎士たちと少女従者たちが、剣術道場からぞろぞろと出てくる。数人がくすくす笑いながら立ち止まり、アニタ隊長が無造作に若いレンクを膝の上に乗せ、お尻を丸出しにして、しっかりとお尻を叩き始めるのを見物していた。

今日の剣術の稽古で、レンクは特に良い動きを見せていた。アニタ隊長とアレクサンドラ将軍を除けば、成人した騎士たちで彼に敵う者はいなかった。

しかし、レンクがアニタ隊長に打ち負かされて以来、隊長は彼の訓練に個人的な関心を持ち、この少年が最大限の潜在能力を発揮するのを見届けようと決意していた。そして、レンクの出来栄えに関わらず、毎回の稽古は同じ結末を迎えた。

レンクの出来が悪ければ、アニタは自ら彼のズボンを下ろし、怠惰と愚かさを叱りながら、乱暴に膝の上に引きずり倒した。だが今日、アニタは彼の進歩を祝福してから、丁寧に自分でお尻を出して膝の上に横たわるように招いた。

お尻叩きが続く中、レンクはうめき声をあげ、やがて黙り込んだ。

アニタ隊長は懲らしめの手を一瞬も止めず、満足げにうなずいた。「小僧はなかなか意志が強い……少なくとも男の子にしてはね。」

アレクサンドラ将軍はその様子を見つめながら、ため息をついた。「それは、うちの子が頑固な牛だって、遠回しに言ってるだけだな。」

剣術道場に静けさが訪れ、アニタ隊長の手が空中で止まった。アレクサンドラ将軍は身をこわばらせ、振り返ると、入り口にもう一人の女性が現れているのに気づいた。

シャーロット王女が、頭を高く上げ、ゆったりとした足取りで歩いてくる。金髪で、舞踏会用のドレスを兼ねた飾り鎧を身にまとい、そのきちんとした衣装は、彼女のしなやかで引き締まった体型を引き立てているだけだった。「おや、アニタ隊長、そんなに出来が悪かったのかしら？ この哀れな小僧を、ここ一週間、毎朝お尻を叩いているじゃないの。」

即座にアレクサンドラは片膝をついた。「殿下。」

アニタは慌ててレンクを立たせた。下着はまだ足首に絡まったままで、彼の後頭部を押さえて、自分と一緒に無理やりお辞儀をさせた。

シャーロット王女は注意深くレンクを観察した。「ああ、これがあなたの養子、アレクサンドラ将軍？ あの有名な反逆者の少年ね？」

アレクサンドラはうなずいた。「はい、お嬢様。チャップマン卿が、男尊主義の裏切りで愚かな若者を惑わせたのです。保証します、レンクは厳しく罰せられました。」

「おそらくね。しかし、彼の罪は王冠に対するものであり、反逆の罰は重くなければなりません。裁きのため、我々の前に引き出されねばならないわ。あなたの息子は、行儀作法をわきまえているのかしら？」

レンクは何か言おうと頭を上げたが、口を開く前に、アレクサンドラ将軍がさりげなく彼の腕をつねった。アレクサンドラはすぐに答えた。「彼はこの地の者ではなく、彼の人々の流儀は

異なっております。どうか私にお命じください。王族の御前で正しく話せるよう、指導いたしますので。」

シャーロット王女はくすくす笑った。「よろしい。一、二週間もあれば、頭に作法を叩き込むには十分でしょう……いや、むしろ、お尻に焼き付けるのにね。二週間以内に召喚を待っていなさい。それから、アニタ隊長、彼の剣の訓練は続けておいて。朝の散歩のついでに、いたずらな小僧がお尻を叩かれる音楽的な音を耳にする機会がなくなるのは、寂しいからね。」

アレクサンドラとアニタはさらに深く頭を下げ、声を揃えて答えた。「かしこまりました、お嬢様！」

シャーロット王女はその瞬間をしばらく漂わせ、それから無言で向きを変え、部屋を闊歩して出て行った。

＊＊＊

翌週、レンクは毎朝剣術の稽古を続けた。アニタ隊長による日課のお尻叩きが終わると、彼はアレクサンドラ将軍のもとへ送られ、宮廷作法を教え込まれた。レンクは飲み込みが遅いために何度もお尻を叩かれたが、アレクサンドラが彼の置かれた危険な状況を説明すると、レンクは熱心に教えを受けた。王冠に対する反乱に参加したことで、レンクは厳密には死罪に値する罪を犯していたのだ。死刑はヒールフォール女王国では廃れていたが、シャーロット王女は依然としてレンクを赦免するか、断罪するかの権力を握っていた。

シャーロット王女からの召喚は、一週間と二日が過ぎた頃に届いた。その時、丸出しのお尻をしたレンクは、剣術の稽古で特にはずかしい失敗をした後で、まだアニタ隊長の膝の上に曲げられていた。

アニタとアレクサンドラは、レンクと並んでシャーロット王女の私室へと歩を進めた。扉の外で、アレクサンドラは片膝をつき、レンクの目を見つめた。「忘れるでない、息子よ、そなたは恐ろしい罪を犯したのだ。シャーロット王女に慈悲がないわけではないが、しかるべき敬意を示さねばならぬ。私は……お前を失いたくはない。」

レンクは不意にアレクサンドラを抱きしめた。「失望させたりしないよ、母さん。」

アレクサンドラはレンクの背中を軽く叩いた。男性の給仕が大扉を開け、道を譲るようにお辞儀をした。「殿下が、反逆者のレンクをお目通りくださいます。」

アニタ隊長は目を細めた。「殿下は我々の同席をお求めかな？」

給仕はちらりとレンクを見てから、神経質そうに首を振った。「申し訳ありません、隊長。殿下は特に、少年と……二人きりで会いたいとの仰せでして。」

アレクサンドラ将軍はレンクの手をぎゅっと握り、レンクはその手を握り返してから離した。レンクが部屋に踏み込むと、背後で給仕が扉を閉める音が聞こえた。シャーロット王女の私室は完璧に整えられ、タペストリー、本棚、天蓋付きのベッドがあった。シャーロット王女は仕事机に座っており、金箔の縁取りがされた分厚い本を無造作に脇へ置いた。「ああ、野生の少年戦士ね。もっと近くへいらっしゃい、坊や、よく見てあげるから。」

レンクはぶっきらぼうにうなずき、無理やりイゾルデ王女の顔を思い浮かべながら、シャーロット王女の前に進み出た。この嫌な女は友人ではないが、それでも王女であり、王女に敬意を払うのが騎士の務めだ。「殿下の御命令通りに。私はあなたの――」

突然、シャーロット王女はレンクを両脇から抱え上げ、自分の膝の上にうつ伏せにした。「さあ、王冠への反逆の代償について話し合いましょう。」

それ以上の前置きもなく、シャーロット王女はレンクの上着の裾をまくり上げ、白い半ズボンのウエストバンドを掴んだ。不意を突かれたレンクはもがき始めたが、身体に染みついた記憶が働き、無理やり動きを止めた。「殿下？ 何を――」

シャーロット王女はレンクの半ズボンを下ろし、まだ薄くなったピンク色の手形の痕が残るお尻を露わにすると、しっかりと一発叩いた。「心配しなくていいのよ、お子様。反逆罪で処刑したりはしないわ。でも、チャップマン卿の裏切りに関わった分、まだしっかりとお尻を叩かれる必要があるの。それで身の程を思い出すには十分でしょう。」

そう言って、シャーロットはしっかりとした一定のペースでレンクのお尻を叩き始めた。レンクは息を呑んだが、抵抗したい衝動を抑えた。

シャーロットの平手打ちは、アレクサンドラ将軍の重々しいやり方ほど強くはなく、アニタ隊長の狙いすました一撃ほど正確でもなかったが、彼女は頭を高く保ち、ある種の王室の優雅さを漂わせながら、ためらうことなくお尻を叩いた。十分あまりを叩いた後、シャーロットは眉をひそめ、手を止めた。「いいこと、あなたのような小さな男の子はみんな、本質的にいたずらで、お尻を叩かれなければならないと決まっているの。それは自然の法則よ。遅かれ早かれ、すべてのいたずらな男の子は母親にしっかりお尻を叩かれる。だから、若い男性も少年時代を過ぎても適切な指導を受け続けるのが正しいの。アレクサンドラ将軍は、お仕置きの受け方をよく仕込んだようね……」

シャーロットは再びお尻を叩き始めた。レンクは悲鳴を上げたが、動かなかった。シャーロットはくすくす笑った。「うふふ！ 声を上げるのを恥ずかしがらなくていいのよ。痛くないふりをしても、面目を保とうとしても無駄。いたずらな小僧が膝の上に曲げられたら、もはや守るべき尊厳なんて残っていないのだから。それが謙虚さを学ぶ唯一の方法なの。あなたの場合は、反抗心があるからなおさらね。」

レンクは泣き、懸命にこらえようとしたが、二筋の涙が目からこぼれた。シャーロットは高慢に笑い、レンクが自分の説教を聞き取れるくらいの制御された力で、より速くお尻を叩いた。「あなたがお仕置きを受けているのを目撃した後で、私はすっかり許すつもりだったわ。でも、あなたを剣術道場に見に行った時、まだあなたの目に反抗の小さな火花がちらついているのを見たの。それを消し去るつもりよ。」

シャーロットは猛烈な一撃を加え、それから自分の手の仕事を鑑賞するために手を止めた。レンクは彼女が軽くお尻を撫でるのを感じて、すすり泣いた。シャーロットがレンクのお尻を撫でる手つきは、先ほどの平手打ちの鋭い痛みを呼び覚ますのでなければ、優しげでもあった。「心配しなくていいのよ、子や。あなたの母も先生も、よくやったわ。ちゃんとしたお尻叩きを受け入れるのを……実にちゃんと学んだようね。」

シャーロットは手を上げ、頭の後ろの紐についた呼び鈴を鳴らして呼んだ。「ドアマン！」

扉がゆっくりと軋みながら開き、例の男性給仕がお辞儀をしながら入ってきた。「殿下？ 御命令を。」

シャーロットはくすくす笑い、レンクのすすり泣きを無視して、差し出されたお尻を指でそっと撫でた。「ああ！ あなたの反応がまったく愛らしいわ……。さあ、給仕、アレクサンドラ将軍とアニタ隊長を私の部屋へ通しなさい。」

給仕は従った。二人が近づくと、アレクサンドラとアニタは片膝をついた。シャーロットはうめくように、レンクが吠えるほどの強烈な一撃を加えた。シャーロットはその響き渡る音を味わっているようだった。「ああ、もう、堅苦しいのはやめて。泣き言を言う男の子を膝の上に曲げている時に、宮廷作法も何もないわ。二人とも立ちなさい。」

アレクサンドラとアニタが立ち上がると、シャーロットはもう一発の激しい平手打ちを放った。レンクは叫んだが、彼女の膝の上でじっとしていた。シャーロットは、あからさまに称賛の表情を浮かべて鼻歌を歌った。「その野生の少年が恥をかくと思っていたけど、確かに従順にお尻叩きに服すことを知っているわね。本当に二人とも褒めてあげたい。あなたの野蛮人の息子も、いつかはきちんとした紳士になれるかもしれないわ、レクシー。」

アレクサンドラはうなずいた。「ありがとうございます、お嬢様。それは、私が彼を実の息子として養子にしたいという切なる願いをお認めいただけるという意味でしょうか？」

「もちろん！ すでに、この子はあなたの母親としての導きから多大な恩恵を受けていると思うわ……でも、私の我がままを聞いてほしいの。実はね、私、この野生の少年がすっかり気に入ってしまったの。だから、これからの訓練としつけの全責任は、私が引き受けることにします。」

アレクサンドラとアニタは不安げに顔を見合わせた。二人の表情に気づいて、シャーロットは音楽のように笑った。「あらまあ、私が甘やかされていると思うのかしら？ 心配しないで、アレクサンドラ将軍。養母として、あなたはその若者に対して完全な親権を持つわ。それにアニタ、あなたには彼への剣術の指導を続けてほしいし、教えを徹底させるために必要なだけお尻を叩き続けてほしいの。」

シャーロットはレンクのこんがり焼けたホットピンクのお尻にもう一発響き渡る平手打ちをくれてから、ゆっくりと安定したペースで叩き始めた。「でも毎晩、日が沈む前に、私が小さなレンクにおやすみ前のお尻叩きをする役目をいただくわ。それが彼の反逆罪の罰として十分でしょう。レンクの叩かれたお尻の光景は、不従順の代償として、すべての反抗的な男たちへの永続的な戒めとなるでしょう。でも、私だって無慈悲じゃないの。レンクは女王の配偶者として仕えるよう訓練されるのよ。」

アレクサンドラはシャーロットのベッドにちらりと目をやった。「配偶者……ということは、あの少年をあなたの寝室で寝かせるおつもりですか？」

シャーロットはくすくす笑い、それからレンクをより強く叩いた。「ああ、心配しないで。やましいことなんて何もないわ。ただ、あの若者をもっとよく知りたいだけ。もちろん、彼が成人したら話は別かもしれないけど。でも、もしあなたが彼を私の世話に委ねることに同意してくれるなら、王家の誓いにかけて、私自身の子のようにあなたの息子を守り、大切にすると誓うわ。もし望むなら、あなたも同席して、毎晩のおやすみ前のお尻叩きを監督してもいいのよ。」

アレクサンドラはうなずいた。「感謝いたします、殿下。喜んで息子をあなたのお世話に委ねます。レンク、王女様に感謝するのだ。大変な名誉を授けてくださっている。」

レンクが何か言おうとしたが、特に激しい一発が遮った。彼が震えるような叫び声を上げる中、シャーロットは本格的にお尻を叩き始めた。「認めるわ、あなたにはちょっとした才能がある。でも、傲慢すぎたのよ。この地にやってきて、たった一人で帝国を倒せると思ったなんて。その自信過剰が、罰を招いたのよ！」

シャーロットは素早く二発続けて叩き、それから着実なパターンに移り、打擲の速度を上げていった。「素手でのしっかりとしたお尻叩きよ。あなたを矯正するためのね。」

レンクは猛烈な雄叫びで応えたが、それはやがて少年じみたすすり泣きに溶けた。シャーロットは微笑みながら首を振った。「無礼で無作法だったことの報いを受けなければならないのよ。屈辱は、死刑執行人の斧よりもずっと深く切り裂くのだから。」

レンクは息を整えようとあえぎながら叫んだ。「や、やめて！」

一瞬、シャーロットは本当に手を止め、上品に笑いながら口元に手を当てた。「ふふふ！ もう慈悲を乞うの？ これくらい大したことないと思ってた？ また誤算ね。もう自分で考えるのはやめなさい。小さな男の子は、見られるべきで、聞かれるべきではないのよ！」

レンクは足をばたつかせ始めた。強くあろうというかつての決意の思いは、今やすっかり忘れ去られていた。「いやあああ！ もう、やめて！」

シャーロットは鼻を鳴らし、レンクの座り部分の両方に軽く平手を打った。「寛大な処置を求めるに関しては、残念だけど、もう機会を逃してしまったわね。体罰が始まったら、容赦はないのよ。」

シャーロットはお尻叩きのペースを上げ、電光石火の速さで一発一発を浴びせた。レンクは泣き叫び、やがて制御できない涙に溶けた。シャーロットはうなずき、レンクの泣き声の響きを味わっていた。「そうよ、私の導きの懲らしめの手があなたに下るように、あなたの涙もまた自由に流しなさい。我慢してはだめ。苦しみの中で叫びなさい。私があなたを終わらせた時には、あなたは完全に女性の権威に服従しているでしょう。もう二度と、この可愛いお尻で安楽に座ることはできないわ。自分が反逆者だったことなど忘れてしまうのよ。わかった、小さい子？ 教訓を学んだと私に示しなさい！」

レンクは渾身の力を振り絞って吠え、それから力尽きて、抵抗する気力もなく、シャーロットの膝の上に再び崩れ落ちた。

シャーロットはお尻叩きのペースを落としたが、打撃の力は弱めなかった。「そういうこと。でも心配しないで。あなたの高慢な魂が完全に砕かれたと確信したら、私はあなたを許してあげる。実のところ……」

シャーロットは慎重にレンクを抱き上げ、自分の膝の上に座らせて、優しくなだめた。「……もう、私はあなたにすっかり夢中になり始めているのよ！」

＊＊＊

毎晩毎晩、週を重ねるごとに、レンクはシャーロット王女の寝室へと呼び出された。アレクサンドラ将軍は、戦闘で呼び出される時を除いて、毎夜のおやすみ前のお尻叩きの儀式の証人を務めた。そのような夜は、アニタ隊長が代理の証人を務めた。毎晩、レンクはシャーロット王女によってしっかりと鞭打たれ――お尻を叩かれ、彼女は彼に女王国への反逆を思い出させた。ある夜には、シャーロットはレンクに読み書きの訓練を課したり、女神の御心にかなうよう、聖なる婚姻において男性が女性に服従することの重要性について説教を垂れたりした。

レンクは授業の間中、ひりひりするお尻で座るのに耐えたが、少なくとも見知らぬ新しい言語を読むことを学ぶのは楽しんだ。毎晩、日没後、召使いがレンクを毛布でしっかりとぐるぐる巻きにするのを手伝い、彼がその包みから抜け出してはならないという厳しい指示の下、シャーロット王女の隣のベッドに寝かされた。レンクはこの奇妙な儀式の目的を理解しておらず、ヒールフォールの女性たちの変わった習慣のせいにしていた。

彼は、シャーロット王女がひどいいびきをかくことを知ったが、お尻叩きは別にして、寝かしつけられる就寝時の習慣が奇妙なほど心安らぐものだと感じていた。

この毎晩の決まり事は、王家の使者が大々的にシャーロット王女の城に到着するまで続いた。女帝陛下が訪問を希望しており、シャーロット王女は王としての歓迎を準備するよう指示された。レンクが使者の巻物を無味乾燥に読み上げるのを聞いているうちに、彼は奇妙なことに気がついた。レダ女王の名と、城の準備に「大いに骨を折れ」という命令が出ると、シャーロット王女を含むその場にいたすべての女性たちが、まるで緊張したいたずらな少女たちのように、ゆっくりと自分のお尻を覆ったのだ。

＊＊＊

レンクはシャーロット王女に抱きかかえられて、ふくれっ面をしていた。彼の古い上着は不適切だと判断されたのだ。それで、不従順に対する何十回ものお尻叩きに耐えた後、レンクはついに、ヒールフォールの若い王子たちのための馬鹿げた正装に身を包むことを受け入れた。アレクサンドラ将軍とアニタ隊長が緊張した面持ちで後ろに従っていた。その事実がレンクを不安にさせた。彼女たちがこれほど怯えているのを見たことがなかった。

シャーロット王女は身をかがめて、レンクの耳元でささやいた。「レンク、愛しい人、作法を忘れないようにね。母上はとても……厳しい方だけど、悔い改めた男の子には慈悲深い心をお持ちなの。」

レンクは女帝の玉座の間を見渡し、目を大きく見開いた。長い赤い絨毯が玉座へと続き、壁は堂々とした女王の姿の前に男たちが深々と頭を下げる様子を描いたタペストリーで覆われていた。

レダ女王は玉座に座し、彼ら全員を見下ろしていた。レダはアレクサンドラ将軍よりもさらに背が高く、金髪を短くきちんと整えていた。礼装は襟ぐりが深く、成熟した母性的な胸元をあらわにしていた。シャーロット王女は咳払いをした。「母上、女王陛下、アヴァロンの地からの訪問者、若きレンクをご紹介いたします。そして、もしこの縁談にご同意いただけるのでしたら……私の未来の夫でございます。」

レダは神秘的な半眼でレンクを吟味した。「あらまあ、とっても可愛いじゃないの？ ちょっと見せてごらんなさい、シャーロット。」

シャーロットは身を強張らせ、それからレンクを床に立たせた。

レダは手袋をはめた手を振って、レンクを手招きした。「さあ、こちらへいらっしゃい、小さな坊や。」

レンクは女王の玉座へと歩み寄った。内心では、準備していた口上を復唱していた。彼はこの堅苦しい老女帝やその規則など気にしていなかった。彼はヒールフォールの男性たちの大義のために嘆願し、自由を要求するつもりだった。

その時、レダは身をかがめ、彼の耳をつまみ、前に引っ張って、自分の膝の間に彼を押さえつけた。「いい子ね。このとがった耳を見てごらんなさい。なんてつまみやすいのかしら。さて、お子様、シャーロット王女から、あなたのいたずらは厳しく罰せられたと知らされているけれど、私は反抗的な男に容赦はしないの。王家であれ庶民であれ、不従順な男の子にはきちんとした罰が必要よ。そしてこのような反逆の罪には、その罰も厳しくなければね。」

レンクはレダの手を掴んだが、彼女は耳から手を離し、彼のズボンを掴んでお尻の下まで引き下ろした。レンクは恥ずかしさで悲鳴を上げたが、レダは彼を持ち上げ、自分の膝の上に引き倒した。「なんて愉快なのかしら！ お尻を丸出しにした時の彼の表情ときたら、まったく可愛らしい……お尻そのものは言うまでもないわ。」

レダは最初の一撃を加え、レンクは息を呑んだ。叫びたかったが、その衝撃で息が詰まった。これまで感じたどんなものよりも強烈だった。レダはくすくす笑った。「ふふふ。慈悲を乞うには遅すぎるわ。あなたの涙も叫びも、何も変えはしない。」

それからレダは二発目の、雷のようなお尻叩きを加えた。今度はレンクは苦悶の金切り声を上げた。レダはレンクの叫びが収まるまで彼のお尻を軽く叩き、それからアレクサンドラ将軍に注意を向けた。「アレクサンドラ？ あなたがこの子を自分の息子として養子にしたことは承知

しているけれど、これからこの子には私を『ママ』と呼ばせるわ。だって、大きくなったらシャーロット王女と結婚するんですもの。」

シャーロット王女の顔が輝いた。「本当、お母様？ では、私の選択を認めてくださるの？」

レダは、玉座の間に響き渡る震動を送るかのような勢いで三発目を叩いた。「そんな当たり前のことを尋ねるんじゃないの、シャーロット。さて、未来の娘婿に話を戻すけど……」

何か悪いことが起きると察したレンクは、後ろに足をばたつかせた。シャーロットは眉をひそめ、鼻の穴を膨らませた。「そういうのはなし。ママはあなたの態度が矯正されたと満足するまで、お仕置きを止めないからね。」

レダは素早く二発叩き、それから手を高く上げた。「従順さをもって悔恨を証明しなさい。ママの質問に真剣に答えなさい。私の娘を、その地位の王女にふさわしく、敬意を持って遇すると約束するの？」

レンクは叫んで答えた。「はい！ 騎士の名誉にかけて、誓います――」

レダはレンクの尻の中央を狙った凄まじい一撃で彼の言葉を遮った。彼女の大きな手のひらは、容易に少年の両方の尻たぶを覆った。「ふん！ こんなに簡単に手なずけられるなんてね。お仕置きはあとで続けるとして、とりあえず隅っこに行って、鼻を壁につけて立っていなさい。その真っ赤に叩かれたお尻を宮廷中にさらしてやるわ。チャップマン卿の秘密の友人たちで、彼の大義に密かに共感を抱いている者たちへの警告としてね。」

レンクがレダの言葉の意味を理解するまで、しばらく時間がかかった。お尻がひどくひりひりして、他のことはほとんど感じ取れなかったのだ。しゃくり上げながら、レンクは隅へと這う

ように歩き、ちらりと自分の赤く擦り切れたお尻を盗み見た。間もなく、ヒールフォールのすべての王宮の貴族たちも、それを目にすることになるのだった。

レダは舌を鳴らした。「覗いてはいけません、若者。自分のしたことと、これから自分に起こることを考えなさい。」

レンクはすぐに顔をそらした。レダはしばらく彼を観察してから、シャーロット王女に注意を向けた。「正直なところ、最初の一発で泣き叫んで命乞いをしなかったのは驚きだよ。でも、まだ改善の余地はある。シャーロット、彼がいつかふさわしい女王の配偶者に成長するには、しっかり手綱を握らねばならない。私はお前に、男性を手なずける術を教え込まねばね。」

シャーロットは顔を輝かせた。「はい、お母様。ご指導に従います。私の未来の夫も同様に。」

レダはせせら笑った。「当たり前だよ。疑う余地があったか？ 男はみんな、義理の母を怖がるべきなんだからね。」

＊＊＊

シャーロット王女は鏡に映る自分を調べながらため息をついた。「このウェディングドレス、レンクが成人する頃にもまだ流行っていると思う？」

アニタ隊長は眼鏡を直した。「ファッションには詳しくありませんが、そのドレスは熟練の裁縫師が縫ったものです。良い職人技は決して時代遅れにはなりません。そう思いませんか、将軍？」

アレクサンドラ将軍は、うっとりと見つめていたロケットからはっと顔を上げた。彼女はレンクを養子にした記念として、自分がレンクのお尻を叩いているミニチュア画を描かせていたのだ。彼女はそれを大急ぎで胸元に押し込み、咳払いをした。「採寸をするにはまだ少し早いと思いますよ。レンクにはあと数年、成長しなければならない期間がありますから。」

シャーロット王女は鼻を高く上げ、胴着を直しながら言った。「もちろんそうだけど、準備に越したことはないわ。女性のウェディングドレスは、人生の残りを家庭でズボンをはくことを強いられる前に、あんなに……フリフリしたものを着る最後のチャンスなんですもの。」

アレクサンドラ将軍はうなずいた。「ええ、男性は弱い性かもしれませんが、レンクを息子に迎えてから、私の考え方も変わり始めたと認めねばなりません。」

アニタ隊長は肩をすくめた。「男ねえ。一緒には暮らせない。でも、いなくても生きていけない！」

シャーロットは忍び笑いをした。「まったくその通り！ さあ、私がドレスを着た姿をレンクに見せてあげたいわ。」

アニタ隊長はまばたきした。「でも……それって縁起が悪いのでは？」

「縁起なんてないわ。それに、若い殿方は、未来の妻に自分がどれほど美しいか伝える機会をあらゆる時に持つべきなのよ。」

誰かが反対する間もなく、シャーロット王女は花束を前に掲げて部屋を出て行った。彼女は私室へと続く廊下を歩きながら、ヒールフォールの伝統的な結婚行進曲の調べを鼻歌で歌った。「レンク、愛しい人、素敵なものを見せてあげる。さあ、ちゃんと褒めてね。でも、あからさ

まに愚かなやり方じゃなくて。私の胸をときめかせることを言ってほしいの。すべてを言葉にする必要なんてなくて……」

シャーロット王女が私室の扉を開けると、彼女が置き去りにした時と同じく、レンクが宝石箱の上に丸出しのお尻で曲げられているものと思っていた。しかし、その宝石箱は開いていて、空だった。

背後からアレクサンドラ将軍がシャーロット王女にぶつかり、恐怖の表情で部屋を見渡した。ベッドからはシーツが剥ぎ取られ、シーツは長いロープに結ばれて窓の外へ垂れていた。

シャーロット王女のベッドの上に、一枚の置き手紙を見つけた。

「親愛なるアレクサンドラ将軍へ、私を養子にしてくれてありがとう。私は母を知りません。私がまだ赤ん坊の時に、私を守って死にました。母ほど良いお母さんには誰もなれないと思うけど、あなたが最善を尽くしてくれたのは知っています。

アニタ隊長、ロングソード剣術の流派への対抗策を教えてくれてありがとう。戦場であなたとお会いするのを楽しみにしています。それがヒールフォールの男たちの友人としてでありますように、敵としてではなく。

シャーロット王女へ、あなたはとても優しい人で、いつかあなたが探している良い夫を見つけることを願っています。もし私の旅路で良い夫を見つけたら、あなたのところに行って結婚するように伝えます。でも、その人に優しくすると約束してください。

さようなら！

あなたの友、

レンクより！」

シャーロット王女の目が怒りで燃え上がると、レンクの手紙は彼女の手の中で燃え尽きて灰になった。「あの小悪党め！ 今度あの子を捕まえたら、女性の心をもてあそぶってことを思い知らせてやるわ！」

[終わり]